重要文化財指定記念

特別企画展

首里城京の内展

ー貿易陶磁からみた大交易時代ー

2001年

沖縄県立埋蔵文化財センター

重要文化財指定記念

特別企画展

首里城京の内展

―貿易陶磁からみた大交易時代―

会　期／2001年3月24日（土）～5月6日（日）
会　場／沖縄県立埋蔵文化財センター
　　〒903-0125　沖縄県中頭郡西原町字上原193-7
　　Tel.098-835-8752　Fax.098-835-8754
主　催／沖縄県立埋蔵文化財センター

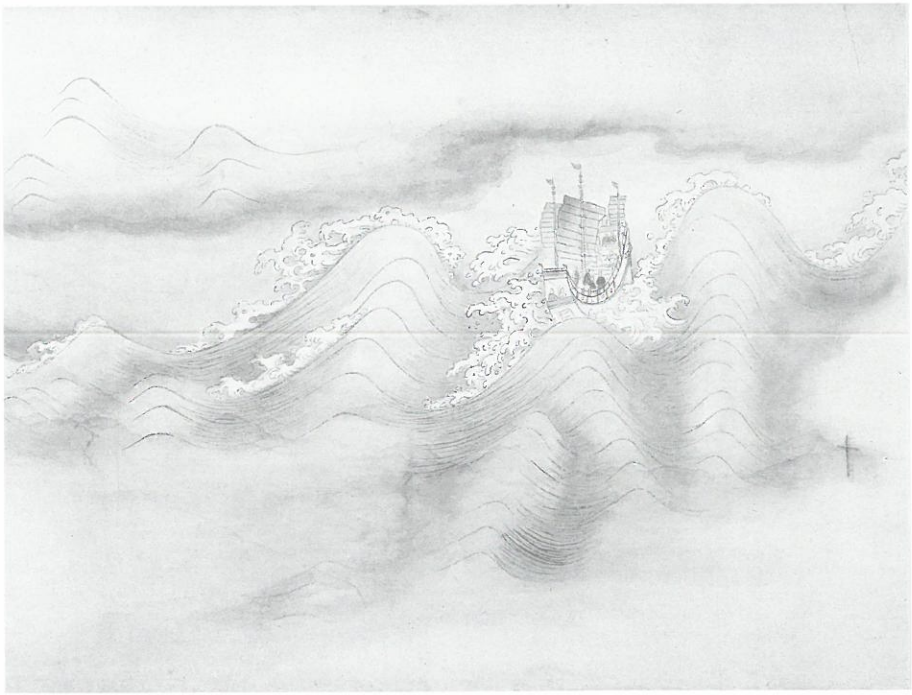
沖縄県首里城京の内跡出土陶磁器
重要文化財指定
平成12年6月27日付け文部省告示第120号
文化財保護法（昭25年．法律第214号）
第27条第1項

重要文化財指定記念

特別企画展

首里城京の内展

ー貿易陶磁からみた大交易時代ー



奉使琉球図（部分）〈履険如夷の一部〉
写真提供：沖縄県立博物館

ごあいさつ

沖縄県立埋蔵文化財センターは平成12年4月1日に開所致しました。開所してまもなく当所が所蔵する「首里城京の内跡出土陶磁器」518点が国の重要文化財として指定されました。

当所では新指定の重要文化財をなるべく早く公開すべく、平成12年11月1日から特別企画展「首里城京の内展」を予定致しておりましたが、企画展示室の温湿度などの保存環境に問題が生じたため重要文化財を展示するためには、空調工事が必要となりました。したがいまして「京の内展」は空調工事が完了する平成13年3月に変更せざるを得なくなりました。このようなことで皆様には大変ご迷惑をおかけ致しましたが、無事工事を完了し、良好な展示環境のもとで「京の内展」を開催出来ますことを大変喜んでおります。

首里城京の内は、正殿、南殿、北殿など政治的建物が集中する区画の南西地域に位置します。「京」は“霊力”と同義語の意味があり、沖縄開闢二神降臨の神をまつる“首里森御嶽”・“真玉森御嶽”などのある聖域でした。首里城整備事業に伴う発掘調査によって、京の内西側から明らかに火を受けた状況で陶磁器類がまとまって発見されました。出土状況からみてこの地点は倉庫跡ではないかと考えられております。

出土したすべての陶磁器資料は破片でしたが、報告書を作成するために、丹念に復元してみると、これらは世界的にも類例の少ない14世紀末～15世紀中の貴重な貿易陶磁であることが判明しました。京の内跡出土の陶磁器資料は国内でも一級の資料であり、わが国の歴史上意義が深く、かつ、学術的価値の特に高いものとして、重要文化財に指定されました。

この度の「首里城京の内展」の展示資料は、かつての琉球国が明皇帝との冊封・朝貢関係をもとにして進貢貿易によってもたらされた14世紀から15世紀中頃までの、中国を初めシャム（タイ）、安南（ベトナム）、日本などの貿易陶磁がまとまって展示されます。

京の内出土の貿易陶磁器は「琉球国は南海の勝地にして、三韓の秀を集め・・・・異産至宝は十方刹に充満している」という「万国津梁の鐘」の銘文を彷彿とさせるものがあります。この機会に多くの方々がこの展示をご覧頂き大交易時代を実感して頂きますとともに埋蔵文化財への理解が一層深まることになれば幸いです。

最後に、今回の特別企画展の図録にご出筆を頂きました亀井明徳氏と金城亀信氏ならびに本特別企画展にご指導とご協力を賜りました関係各位に厚く感謝し、御礼申し上げます。

平成13年3月

沖縄県立埋蔵文化財センター所長　知　念　　勇

凡　例

1　本書は、2001年3月24日（土）～5月6日（日）まで開催する特別企画展「首里城京の内展」の図録である。
2　本特別企画展は、沖縄県立埋蔵文化財センターが主催し開催する。
3　図録に掲載した資料の順序は、必ずしも展示の順序と一致しない。
4　カラー図版の資料番号は、重要文化財指定登録番号を記載している。
5　重要文化財指定一覧は『首里城跡―京の内跡発掘調査報告書（Ⅰ）―』沖縄県教育委員会，1998年報告の分類を用い表を転載し、登録番号を加えた。
6　年代に関しては、亀井明徳の執筆文及び、『東京国立博物館図版目録　中国陶磁篇Ⅱ』東京国立博物館，1990年、『首里城跡―京の内跡発掘調査報告書（Ⅰ）―』沖縄県教育委員会，1998年、那覇市立壺屋焼物博物館編『那覇市立壺屋焼物博物館開館記念特別展　陶磁器に見る大交易時代の沖縄とアジア』那覇市教育委員会，1998年を参照した。但し、ベトナム・タイの陶磁器については、製作年代不詳のため、除外した。
7　法量の単位はセンチメートルを単位とし、（　）は復元、〈　〉は残存の数値を示している。
8　本展示にかかわる協力機関の芳名は、巻末にまとめて列記した。
9　本特別企画展は、嘉手苅徹、島袋春美、仲間留美、宮平真由美、上原久、与那国充子が担当した。
10　資料名の英訳は上原久が担当し、亀井明徳が監修を行った。
11　年表は『沖縄大百科事典』沖縄タイムス社，1983年、宮城栄昌・高宮廣衛編『沖縄歴史地図　歴史編』柏書房，1983年を参照し、対外交易図を含め、金武正紀（那覇市教育委員会文化財課）の協力をえて作成した。
12　提供者が明記されている以外の写真は、すべて長田剛が撮影、資料作成については玉城恵美利が担当した。
13　本図録掲載の写真は、無断使用を固く禁ずる。

目　次

ごあいさつ

凡　例

カラー図版

首里城航空写真 …… 7

首里城航空写真（拡大）・京の内跡調査区全景 …… 8

京の内倉庫跡（土壙SK01）の出土状況など …… 9

焼き物別集合資料 …… 10

主な展示資料 …… 13

重要文化財指定一覧 …… 45

首里城「京の内」跡の発掘調査概要 …… 69

首里城京の内出土陶瓷器　―15世紀前半の標識資料― …… 81

琉球の対外交易路と京の内跡出土の陶磁器の流れ …… 95

用語解説 …… 96

京の内関連図書目録 …… 98

協力者一覧 …… 101

●表見返し：沖縄県首里城京の内跡出土陶磁器

●裏見返し：首里城京の内関連年表

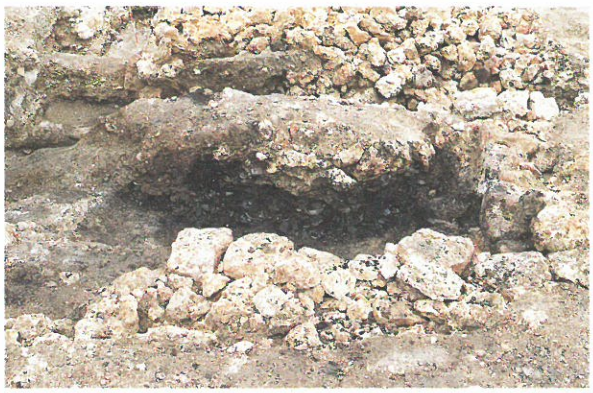
首里城航空写真
写真提供：国営沖縄記念公園事務所

首里城航空写真（拡大）

京の内跡調査区全景

京の内倉庫跡（土壙SK01）の出土状況など

出土検出状況（西側より）



層序（西側より）

完掘状況（岩盤及び石積みが火熱で変色　北側より）

遺物の検出直後の状況（北側より）

青銅製鼎型香炉の把手

遺物の検出状況（左側の石積みは階段　東側より）

焼き物別集合資料

青磁
碗類

青磁
壺類

ベトナム青花・五彩・瑠璃釉・紅釉
瓶・水注・碗類

青花・白磁
碗・皿・鉢類

青花
壺・瓶・高足杯・合子・鉢類

タイ産・中国産褐釉陶器・備前焼
壺・擂鉢類

── 主な展示資料 ──

297. 青磁　牡丹唐草文花瓶
Celadon vase with design of peony scroll
15世紀前期(明初期)
口径 26.7 cm　器高 62.7 cm　底径 14.6 cm

288. 青磁　吉祥字文壺　「清香美酒」
Celadon jar decorated with fortune Chinese characters
15世紀前期(明初期)
口径 25.5 cm　器高 26.3 cm　底径 19.0 cm

289. 蓋　同上
Cover, ditto
15世紀前期(明初期)
外径 30.2 cm　高さ 8.3 cm　内径 20.2 cm

鉄釉獅子型鈕
Lion shaped knob covered with iron glaze

295. 青磁　蓮弁文壺
Celadon jar decorated with lotus petal design
15世紀前期(明初期)
口径 21.5 cm　器高 21.2 cm　底径 17.6 cm

296. 蓋　同上
Cover, ditto
15世紀前期(明初期)
外径 26.0 cm　高さ 8.2 cm　内径 15.7 cm

294. 青磁（せいじ）　蓮弁文壺（れんべんもんつぼ）
Celadon jar decorated with lotus petal design
15世紀前期（明初期）
口径 24.0 cm　器高 23.3 cm　底径 19.8 cm

290. 青磁（せいじ）　牡丹唐草文壺（ぼたんからくさもんつぼ）
Celadon jar decorated with peony scrolls design
15世紀（明初期）
口径 24.1 cm　器高 24.7 cm　底径 18.5 cm

233. 青磁　牡丹唐草文水注
Celadon ewer decorated with peony scrolls design
15世紀前期(明初期)
口径 6.4 cm　器高 23.6 cm　底径 6.8 cm

234. 青磁　双耳瓶
Celadon vase decorated with double handles
15世紀(明初期)
口径 10.6 cm　器高 26.4 cm　底径 10.2 cm

278. 青磁　唐草文鉢
Celadon bawl decorated with peony scrolls design
15世紀(明初期)
口径 26.8 ～ 30.6 cm　器高 12.3 ～ 13.9 cm　底径 10.2 cm

242. 青磁（せいじ）　稜花盤（りょうかばん）
Celadon dish with foliate rim
15世紀前期(明初期)
口径 33.2 cm　器高 6.6 cm　底径 15.4 cm

239. 青磁（せいじ）　鍔縁盤（つばぶちばん）
Celadon dish with flattened rim
15世紀前期(明初期)
口径 33.8 cm　器高 4.9 ～ 5.3 cm　底径 16.2 cm

232. 青磁（せいじ）　直口口縁盤（ちょっこうこうえんばん）
Celadon dish with straightened rim
15世紀(明初期)
口径 28.1 cm　器高 4.0 cm　底径 15.0 cm

73. 青磁（せいじ）　雷文帯碗（らいもんたいわん）
Celadon bowl decorated with a band of thunder pattern
15世紀(明初期)
口径 12.2 cm　器高 6.0 cm　底径 5.2 cm

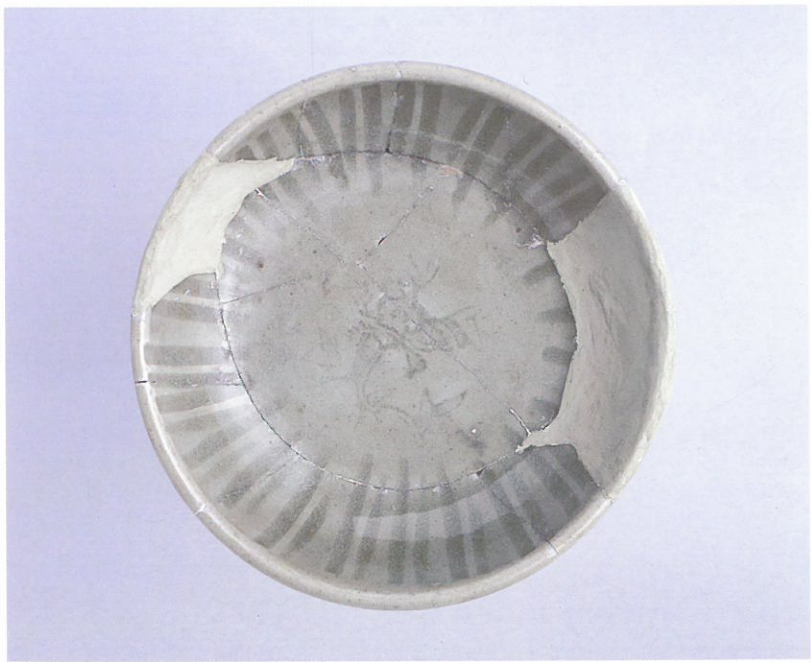
4. 青磁（せいじ）　雷文帯碗（らいもんたいわん）
Celadon bowl decorated with a band of thunder pattern
15世紀（明初期）
口径 15.5 cm　器高 7.6 cm　底径 5.9 cm

5. 青磁（せいじ）　雷文帯碗（らいもんたいわん）
Celadon bowl decorated with a band of thunder pattern
15世紀（明初期）
口径 17.4 cm　器高 9.2 cm　底径 6.6 cm

38. 青磁（せいじ）　蓮弁文碗（れんべんもんわん）
Celadon bowl decorated with lotus petal design
15世紀前期（明初期）
口径 14.3 cm　器高 7.2 cm　底径 5.9 cm

90. 青磁（せいじ）　印花文碗（いんかもんわん）
Celadon bowl decorated with stamped design
15世紀前期（明初期）
口径 16.8 cm　器高 8.6 cm　底径 7.3 cm

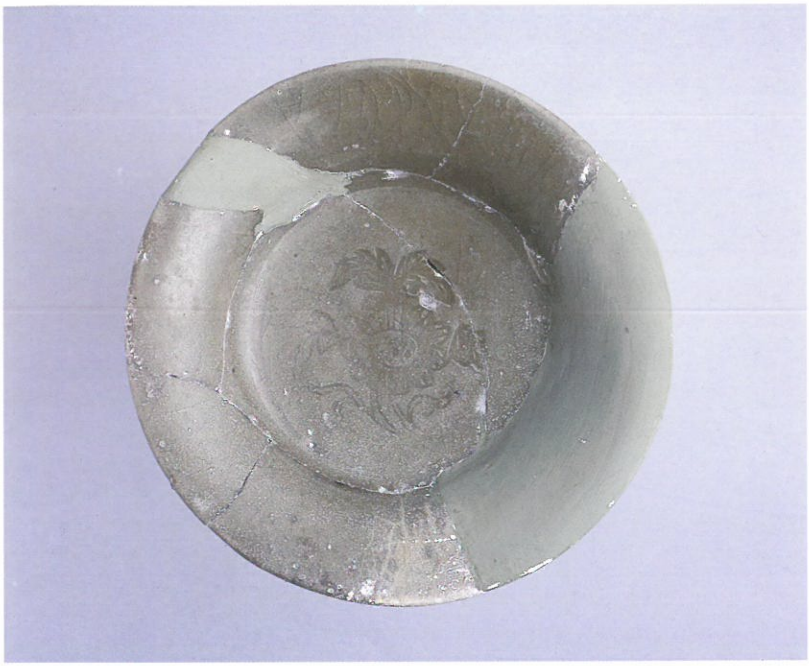
169. 青磁（せいじ）　玉縁口縁皿（たまぶちこうえんざら）
Celadon plate with rounded shape rim
15世紀前期（明初期）
口径 11.8 cm　器高 3.4 cm　底径 5.8 cm

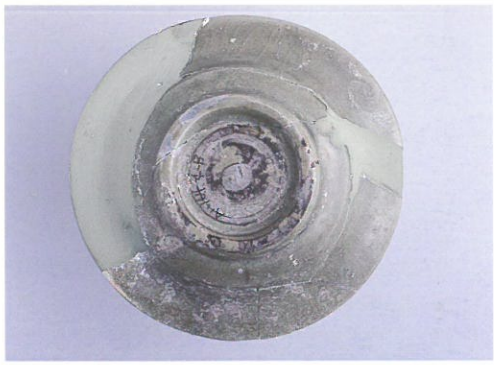


128. 青磁（せいじ）　蓮弁文皿（れんべんもんざら）
Celadon plate decorated with lotus petal design
15世紀前期（明初期）
口径 11.3 cm　器高 3.4 cm　底径 6.1 cm

142. 青磁（せいじ）　貼花双魚文皿（ちょうかそうぎょもんざら）
Celadon plate decorated with two applied fishes
14世紀後期(明初期)
口径 12.4 cm　器高 3.9 cm　底径 5.8 cm

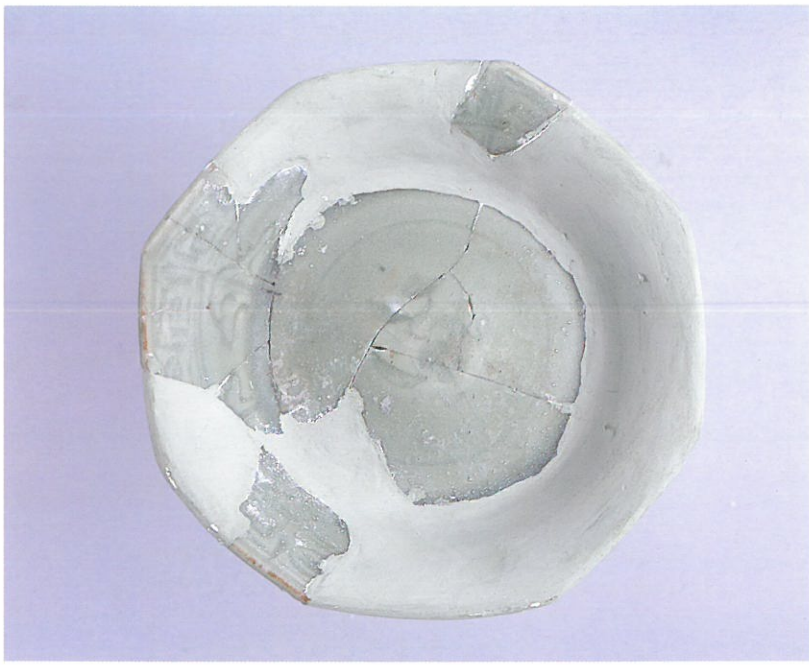
139. 青磁（せいじ）　印花双魚文皿（いんかそうぎょもんざら）
Celadon plate decorated with two stamped fishes
15世紀前期(明初期)
口径 12.2 cm　器高 3.8 cm　底径 6.2 cm

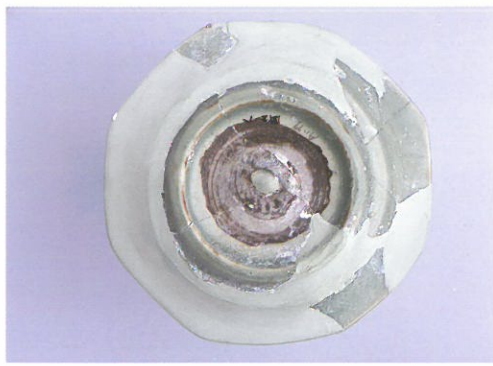




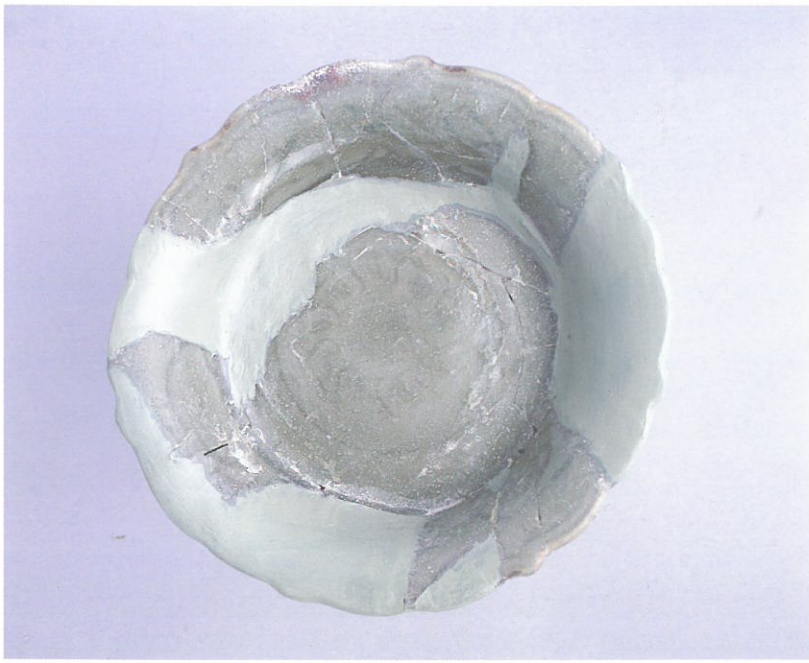
179. 青磁（せいじ）　印花文皿（いんかもんざら）
Celadon plate decorated with a stamped flower
15世紀前期（明初期）
口径 11.6 cm　器高 3.0 cm　底径 4.9 cm

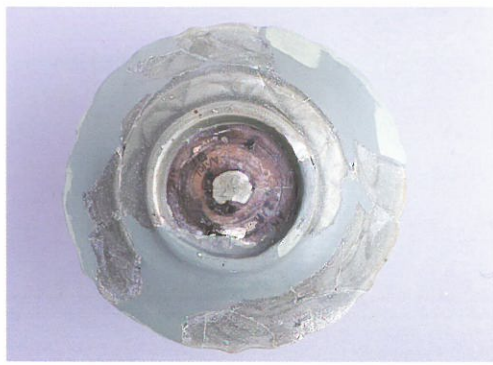
199. 青磁（せいじ）　蓮花唐草文皿（れんかからくさもんざら）
Celadon plate decorated with lotus scrolls design
15世紀前期（明初期）
口径 13.7 cm　器高 3.6 cm　底径 6.5 cm





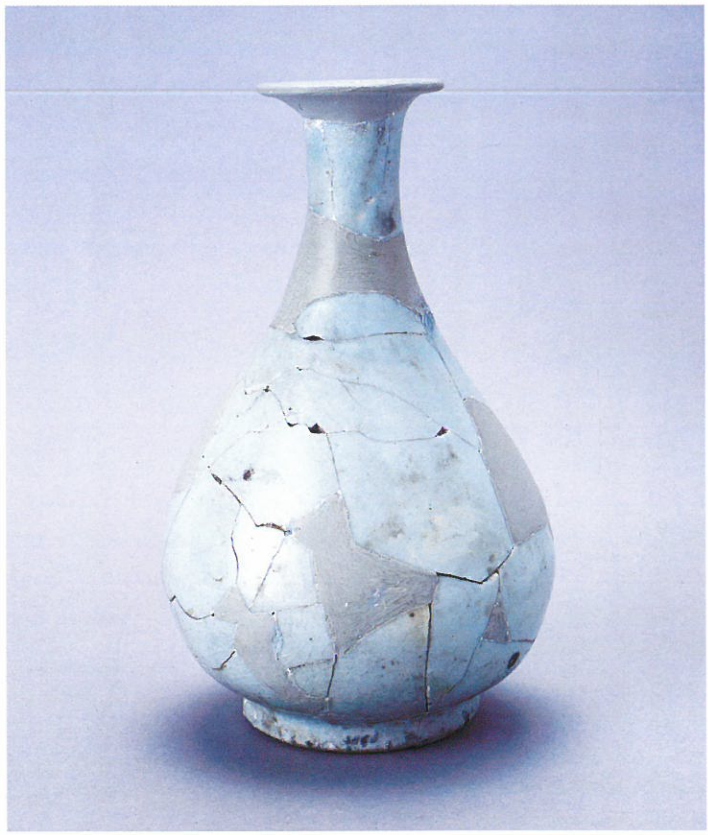
204. 青磁（せいじ）　八角皿（はっかくざら）
Celadon plate of octagonal shape
15世紀前期(明初期)
口径 14.0 cm　器高 3.3 cm　底径 7.7 cm





201. 青磁（せいじ）　稜花皿（りょうかざら）
Celadon plate with flattened rim
15世紀前期(明初期)
口径 14.9 cm　器高 4.4 cm　底径 6.8 cm

349. 白磁　内湾口縁碗
White porcelain bowl with inward curved rim
15世紀(明初期)
口径 14.6 cm　器高 7.1 cm　底径 4.8 cm



443. 白磁　玉壺春瓶
White porcelain pear-shaped vase
15世紀(明初期)
口径 6.7 cm　器高 24.3 cm　底径 9.1 cm

444. 五彩菊花文碗（ごさいきくはなもんわん）
Polychrome glazed bowl with chrysanthemum design
15世紀前期（明初期）
口径 11.0 cm　器高 5.9 cm　底径 4.4 cm

384. 褐釉磁器（かつゆじき）
Porcelain covered with brown glaze
15世紀（明代）
口径（17.4）cm　器高＜3.1＞cm　底径＜14.1＞cm

445. 紅釉水注（こうゆすいちゅう）
Ewer covered with copper red glaze
14世紀（元末期）
口径 6.7 cm　器高 25.7 cm　底径 9.6 cm

298. 青花　龍文高足杯
Semmed bowl decorated with dragon design in under glaze blue
14世紀後期(明初期)
口径 14.2 cm　器高 11.8 cm　底径 4.7 cm

380. 瑠璃釉水注
Ewer fragments covered under blue glaze
14世紀(元末期)
口径(5.8)cm　器高(25.4)cm　底径 8.6 cm

431. 青花　八宝文大合子
Large box decorated with eight precious objects in under-glaze blue
14世紀(元末期)
口径 30.4 cm　器高 18.3 cm　底径 22.2 cm

430. 内蓋　同上
Inner cover, ditto
14世紀(元末期)

435. 蓋　同右
cover, ditto
15世紀(明初期)
口径 9.0 cm　器高 8.4 cm　底径 7.2 cm

437. 青花　牡丹唐草文梅瓶
Vase, mei-ping decorated with peony scroll in under glaze blue
15世紀(明初期)
口径 5.5 cm　器高 35.2 cm　底径 12.3 cm

439. 青花（せいか）　松梅樹文双耳花瓶（まつうめじゅもんそうじかびん）

Vase with two animal-head handles decorated in under-glaze blue with a plane and plum tree design

15世紀(明初期)

口径 14.0 cm　器高 41.4 cm　底径 12.8 cm

441. 青花　牡丹唐草文壺
Jar decorated with peony scroll in under glaze blue
15世紀(明初期)
口径 22.6 cm　器高 37.3 cm　底径 20.9 cm

440. 蓋　同上
Cover, ditto
15世紀(明代)
縁直径 26.0 cm　器高 6.6 cm　内側直径 17.4 cm

306. 青花（せいか）　牡丹唐草文「福」字銘碗（ぼたんからくさもん　ふくじめいわん）
Bowl decorated with a peony scroll and "Fu" character in under glaze blue
15世紀中期～後期（明代）
口径 12.0 cm　器高 6.3 cm　底径 5.4 cm

328. 青花（せいか）　水草文碗（みずくさもんわん）
Bowl decorated with water plants in under glaze blue
15世紀前期（明初期）
口径 13.0 cm　器高 6.1 cm　底径 4.8 cm

333. 青花（せいか）　麒麟文皿（きりんもんざら）
Plate decorated in the center with fabulous animal in under glaze blue
15世紀(明代)
口径 20.8 cm　器高 4.8 cm　底径 12.2 cm

346. 青花（せいか）　牡丹唐草文壺（ぼたんからくさもんつぼ）
Jar decorated with peony scroll in under glaze blue
15世紀(明代)
口径 6.2 cm　器高 10.2 cm　底径 6.4 cm

448. 中国産　褐釉陶器壺（大型）
Brown glazed jar from China
口径 19.8 cm　器高 50.8 cm　底径 15.7 cm

447. 中国産　褐釉陶器壺（大型）
Brown glazed jar from China
口径 12.4 cm　器高 33.8 cm　底径 11.6 cm

446. ベトナム青花　花唐草文面取瓶
Vietnamese blue and white vase with openwork panels
15世紀
口径 9.2 cm　器高 29.8 cm　底径 9.0 cm

209. タイ半練土器蓋（はんねりどきぶた）
Thai earthenware cover
口径 13.0 cm　器高 4.8 cm

217. タイ半練土器壺（はんねりどきつぼ）
Thai earthenware jar
口径 9.8 cm　器高＜11.0＞cm

388. タイ産　褐釉四耳壺（大型）

Brown glazed jar with four handles from Thailand

口径 19.5 cm　器高 62.0 cm　底径 27.0 cm

452. タイ産　褐釉陶器壺（小型）
Brown glazed jar from Thailand
口径 11.7 cm　器高 32.0 cm　底径 12.0 cm

216. 土製の蓋
Earthenware cover
口径 17.5 cm　器高 3.8 cm

449. 備前焼（びぜんやき）　擂鉢（すりばち）
Bizen ware, earthenware mortar
15世紀
口径 28.4 cm　器高 8.7 cm　底径 13.4 cm

451. 備前焼（びぜんやき）　壺（つぼ）
Bizen ware, jar
15世紀
口径 17.4 cm　器高 43.0 cm　底径 23.0 cm

603. 青銅（せいどう） 鼎形香炉（ていがたこうろ）
Bronze incense burner fragment

604. 青銅（せいどう） 鎧物（よろいもの）
Bronze armor fragment

605. 玉（ぎょく）
Beads

── 重要文化財指定一覧 ──

2（図版9 - 16）

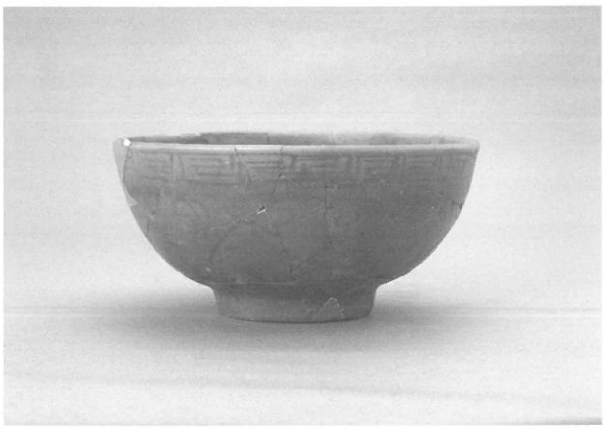
17（図版9 - 2）

80（図版10 - 16）

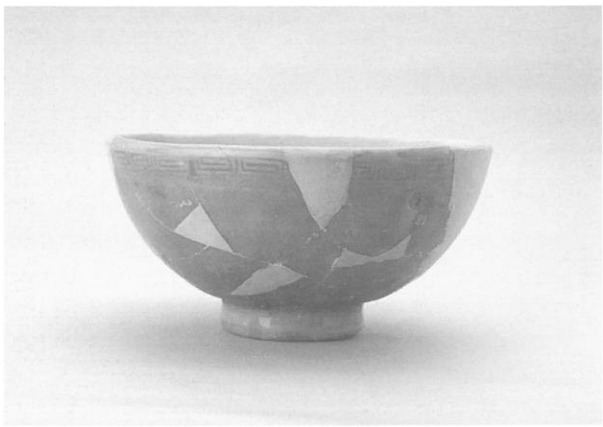
65（図版11 - 14）

名称	分類	報告書図版No.	番号	口径	器高	底径/高台径	登録番号
青磁蓮弁文碗	Ⅰ群	8	1	20.4	〈4.9〉	〈17.1〉	27
		8	2	12	5.6	5.3	1
		8	3	12.2	6.3	5.4	35
		8	4	13.4	〈4.3〉	〈9.1〉	26
		8	5	17.1	7.9	6.8	21
		8	6	11.8	6.3	4.5	23
		8	7	13.4	7	5.8	36
		8	8	14.3	7.2	5.9	38
		8	9	12.4	6	5.2	39
		8	10	13	6.3	5.1	37
		8	11	13.1	6.8	5.1	3
		8	12	12.8	6.7	5.5	25
		8	13	〈14.5〉	〈7.4〉	5.4	24
		8	14	12.4	6.4	5.1	22
		9	15	14.8	7	6.4	31
		9	**16**	**14**	**7**	**5.2**	**2**
	Ⅱ群	9	17	15.6	8.4	5.6	15
		9	18	17.2	8.5	6.3	28
		9	19	〈4.1〉	〈2.6〉	〈4.3〉	20
		9	20	〈8.7〉	〈2.6〉	5.6	19
		9	21	13.8	〈2.9〉	〈11.6〉	18
青磁ラマ式蓮弁文碗	Ⅰ型	9	1	17.8	8.6	6.4	16
		9	**2**	**18.2**	**8.8**	**7.6**	**17**
		9	3	16.8	8	6.4	32
		9	4	16.9	〈16.1〉	〈11.0〉	34
		9	5	16.4	〈5.2〉	〈11.9〉	33
	Ⅱ型	9	6	16.2	8.3	6.5	29
	その他	9	7	〈14.2〉	〈5.2〉	6	30
青磁雷文帯碗	Ⅰ群	10	1	12.6	6.1	5.4	74
		10	2	12.2	6	5.2	73
		10	3	12.2	5.7	5.4	72
		10	4	11.9	5.6	5	71
		10	5	15.1	7.6	6.2	76
		10	6	14	7.4	5.5	78
		10	7	15.2	7.5	6.2	75
		10	8	15.4	7.4	6.1	79
		10	9	15.8	7.4	6.3	77
		10	**10**	**16**	**〈6.4〉**	**(7.2)**	**80**
		11	11	15.5	7.5	6.3	66
		11	12	15.5	7.6	5.9	4
		11	13	15.8	〈7.8〉	(5.8)	68
		11	**14**	**15.6**	**8**	**6**	**65**
		11	15	15.4	7.9	6.4	64
		11	16	16.4	8.5	6.4	11
		11	17	16	〈6.7〉	(7.1)	67
		11	18	14.6	〈4.1〉	〈12.0〉	69
		11	19	〈11.9〉	〈5.2〉	5.4	70

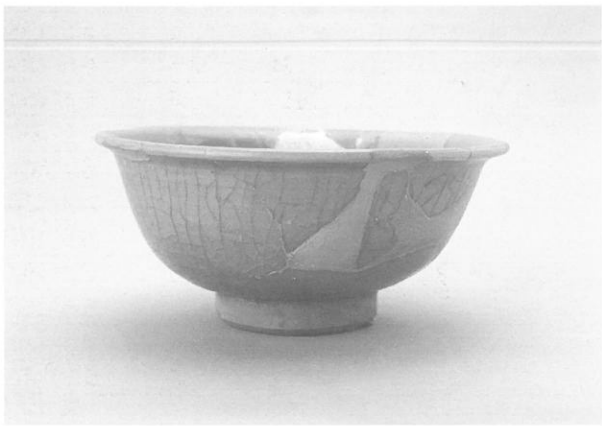
凡例：単位はcm、（　）は復元、〈　〉は残存の数値



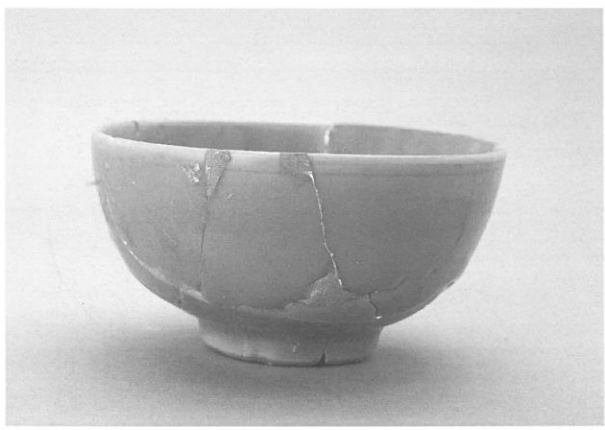
62（図版12 - 26）



47（図版13 - 33）



83（図版15 - 10）



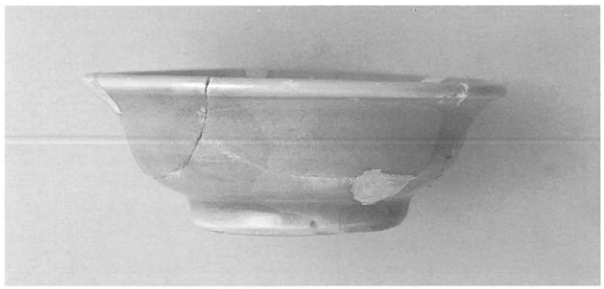
88（図版16 - 15）

名称	分　類	報告書図版No.	番号	口　径	器　高	底径/高台径	登録番号
青磁雷文帯碗	Ⅰ群	12	20	14.9	7.4	6.2	60
		12	21	14.7	7.5	6.2	61
		12	22	12.4	6.6	5.7	57
		12	23	12.2	6.6	5.4	56
		12	24	11.8	6.8	5.4	55
		12	25	15.2	8	6.6	58
		12	**26**	**15.4**	**7.7**	**6.4**	**62**
		12	27	14.8	7.4	6.6	59
		12	28	15.5	8.7	6.6	63
	Ⅱ群	13	29	17	9.2	6.2	46
		13	30	17	9.2	6.1	53
		13	31	16.3	9.2	6.6	48
		13	32	16	8.8	6.2	50
		13	**33**	**16.6**	**8.4**	**6.2**	**47**
		13	34	17.2	(9.2)	(6.2)	49
		14	35	17.6	9.3	7	54
		14	36	16.6	8.6	6.2	51
		14	37	16.6	9.2	6.6	52
		14	38	15.9	8.3	6.6	41
		14	39	16.5	9	6.4	42
		14	40	16.9	8.7	6.8	40
		14	41	16.1	8.7	6	45
		14	42	17.4	9.2	6.6	5
	その他	14	43	17.3	9.4	7	44
		14	44	16.6	8.6	6.4	43
青磁無文口縁碗	Ⅰ群（外反）	15	1	19.8	9.3	8.4	103
		15	2	15	7.3	5.8	104
		15	3	14.2	7	5.8	85
		15	4	15.2	7.7	6	82
		15	5	14.4	7.4	6	81
		15	6	15.8	6.9	6.4	105
		15	7	15.4	7.4	5.6	86
		15	8	14.2	7.3	5.5	106
		15	9	15.4	5.4	6.4	84
		15	**10**	**15**	**6.8**	**5.8**	**83**
	Ⅱ群（直口）	16	11	16.8	8.2	6.6	91
		16	12	16	8.1	6.6	92
		16	13	16.8	8.6	7.3	90
		16	14	14.4	7	6.5	93
		16	**15**	**14.4**	**7**	**6.5**	**88**
		16	16	12.3	6.6	5.2	87
		16	17	12.6	7.2	6.2	102
	Ⅲ群（玉縁）	16	18	15.6	(7.1)	(6.4)	89
		17	19	14.8	7.4	6.6	101
	その他	17	20	17	〈3.0〉	〈14.2〉	100
	その他Ⅰ類	17	21	〈11.0〉	〈3.2〉	5.4	99
		17	22	〈8.1〉	〈2.7〉	5.6	94
	その他Ⅱ類	17	23	〈14.0〉	〈6.5〉	5.6	95
		17	24	〈10.5〉	〈3.0〉	6	97
		17	25	〈9.2〉	〈2.4〉	5.4	98
	その他Ⅳ類	17	26	〈10.8〉	〈3.0〉	6.1	96
	その他Ⅴ類	17	27	〈8.6〉	〈2.1〉	5	513
	その他	17	28	15.6	7	6.8	514
		17	29	18	9.4	6	490
		17	30	14.8	6.5	4.8	515
		17	31	15	6.7	5.8	491

凡例：単位はcm、（　）は復元、〈　〉は残存の数値

177 - 1（図版22 - 11）

177 - 2（図版22 - 11）



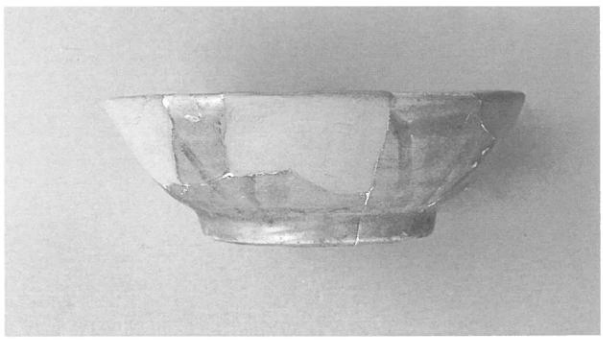
192（図版23 - 20）

189（図版23 - 26）

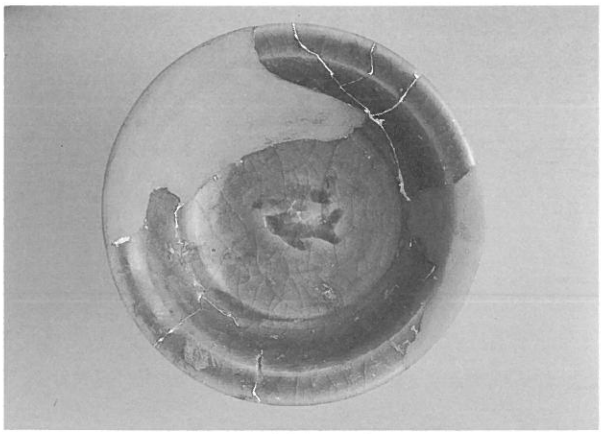
124（図版24 - 2）

名称	分　類	報告書図版No.	番号	口　径	器　高	底径/高台径	登録番号
青磁外反口縁皿	Ⅰ群イ	22	1	11.9	3.6	4.5	174
		22	2	11.9	3.6	4.8	181
		22	3	11.5	2.9	4.4	182
		22	4	11.6	3	4.9	179
		22	5	12.3	3.4	6.3	184
		22	6	11.6	3.2	5.5	185
		22	7	12	3	5.5	176
		22	8	11.2	3.4	5.8	178
		22	9	10.5	3.2	5.7	173
		22	10	11.7	3.3	6.1	186
		22	**11**	**11.7**	**3.8**	**5.3**	**177**
		22	12	11.8	3.7	6	183
		22	13	12.8	3.3	5.6	180
		22	14	12.2	3.5	6	175
		23	15	14.3	4.1	7.5	200
		23	16	14.1	4	6.7	196
		23	17	12	3.4	6.1	187
		23	18	12.5	3.8	6.4	194
		23	19	11.9	3	5.8	188
	Ⅰ群ロ	**23**	**20**	**12.1**	**4.3**	**6**	**192**
		23	21	12.1	4.2	6.3	191
		23	22	14.8	4.4	7.4	195
		23	23	12.4	4.3	6.2	193
	Ⅱ群	23	24	11.5	4	6	190
		23	25	13.6	3.8	7.5	197
		23	**26**	**11**	**3**	**5.2**	**189**
		23	27	12.7	3.4	5.8	198
		23	28	13.7	3.6	6.5	199
	(無文)	23	29	11.8	3.6	5.4	492
		23	30	12.2	4.3	6.1	500
		23	31	13	3.3	6.4	501
		23	32	12.2	3.1	5.2	516
		23	33	12	3.3	6.5	497
	(有文)	23	34	12.4	3.4	5.2	499
		23	35	11.6	3.7	5.8	496
青磁無文直口口縁皿	Ⅰ群	24	1	12.2	3.8	6.5	123
		24	**2**	**11.8**	**3.7**	**6.1**	**124**
青磁有文直口口縁皿	Ⅱ群A	24	3	10.5	3.3	5.5	132
		24	4	11.3	3.4	6.1	128
	Ⅱ群B	**24**	**5**	**10.8**	**3.7**	**5.7**	**122**

凡例：単位はcm、（　）は復元、〈　〉は残存の数値

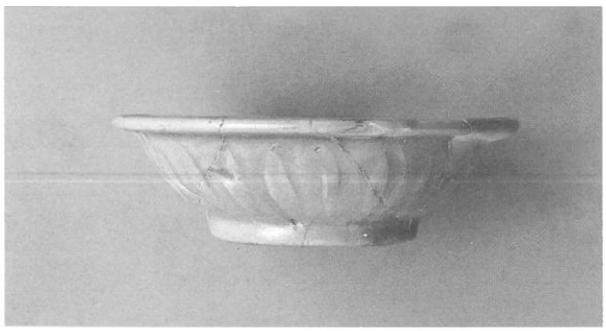


122（図版24 - 5）



135（図版18 - 5）

135 - 1（図版18 - 5）



152（図版19 - 20）

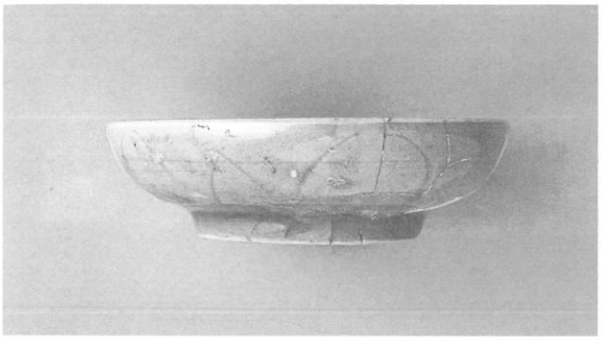
9（図版20 - 28）

168（図版21 - 5）

名称	分類	報告書図版No.	番号	口径	器高	底径/高台径	登録番号
青磁口折Ⅲ	Ⅰ群イ	18	1	12.4	3.9	5.8	142
		18	2	12.6	4.1	5.6	144
		18	3	12.5	4.1	4.5	145
		18	4	12.2	4.5	5	146
		18	**5**	**12.4**	**4.3**	**5.5**	**135**
		18	6	11.2	3.2	5.7	140
		18	7	11.6	4.5	5.8	134
		18	8	12	3.6	5.5	141
		18	9	12.4	3.5	5.8	137
		18	10	12.2	3.8	6.2	139
		18	11	12	4	5.3	136
		18	12-A	13.7	4.7	6.2	138
		18	12-B	14.1	4.4	6.7	143
	Ⅰ群ロ A～C	19	13	12.1	3.5	5	158
		19	14	12.8	4.1	4.9	148
		19	15	11.8	4	4.9	150
		19	16	12.8	4.3	5.4	147
		19	17	11.7	3.3	4.8	159
		19	18	12.6	4	6.3	153
		19	19	11.6	4.1	5.2	151
		19	**20**	**12.5**	**3.7**	**6.2**	**152**
	Ⅰ群ロ D～J	19	21	11.8	3.2	6.2	156
		19	22	12.3	3.5	5.6	157
		19	23	12.6	4.2	5	161
		19	24	11.8	3.4	6	160
		19	25	11.4	3.8	5.8	155
		19	26	11.1	3.4	5	154
		19	27	11.3	3.2	5.8	149
		20	**28**	**12**	**3.4**	**6.6**	**9**
		20	29	12.5	3.7	6.3	163
		20	30	11.4	3.1	5.8	8
		20	31	12.2	3.8	6	162
		20	32	11.2	3	5.5	7
		20	33	11.8	3.9	5	165
		20	34	13	4.2	5.2	164
		20	35	11.4	3.4	5.4	495
青磁玉縁口縁Ⅲ	Ⅰ群	21	1	11.8	3.4	5.8	169
		21	2	11.8	3.7	6.9	166
		21	3	11.7	3.8	6.3	167
		21	4	11.4	3.4	6.3	171
		21	**5**	**12.8**	**4.6**	**6.4**	**168**
		21	6	12.4	3.9	6.5	170
	Ⅱ群	**21**	**7**	**10.6**	**3.5**	**6**	**172**

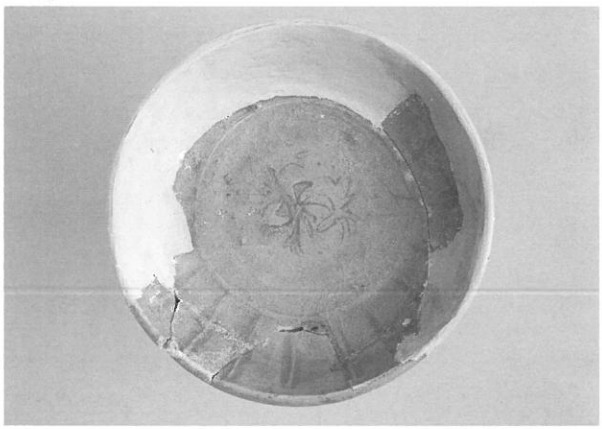
凡例：単位はcm、（　）は復元、〈　〉は残存の数値

172（図版21 - 7）



125（図版24 - 7）

133 - 2（図版24 - 9）



133（図版24 - 9）

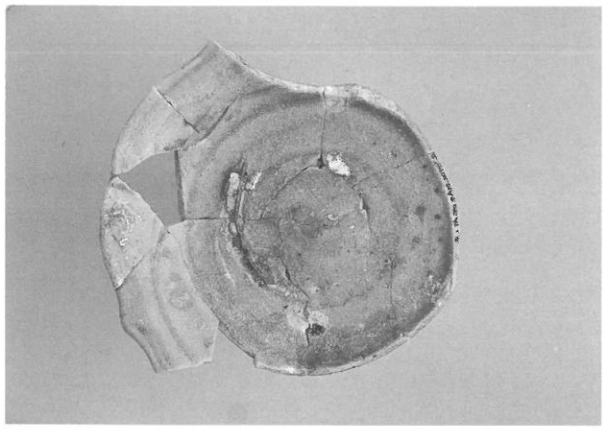
120（図版24 - 12）

13（図版25 - 19）

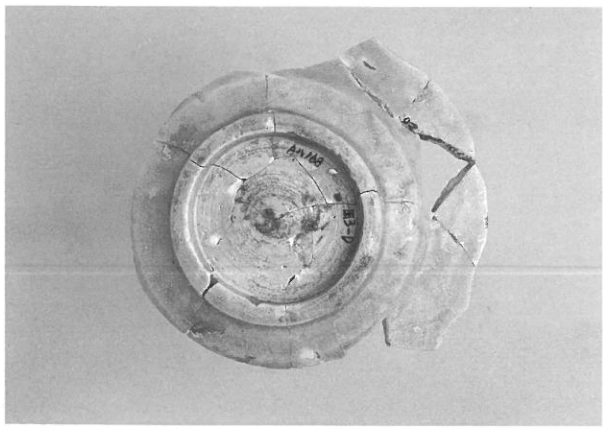
名称	分　類	報告書図版No.	番号	口　径	器　高	底径/高台径	登録番号
青磁有文直口口縁皿	Ⅱ群C	24	6	10.2	3.2	6	129
		24	**7**	**10.9**	**3.2**	**5.9**	**125**
	Ⅱ群D	24	8	10.9	3.5	6	126
		24	**9**	**11.1**	**3.7**	**6.1**	**133**
		24	10	10.7	3.4	6.2	127
		24	11	11.2	3.9	5.5	131
	Ⅱ群E·F	**24**	**12**	**10.1**	**3.2**	**4.8**	**120**
		24	13	9.2	3.5	5	121
青磁蓮弁文菊皿	Ⅱ群G·H·I	24	14	11.5	3.8	5.5	130
		25	15	11.6	3.3	6	110
		25	16	10.5	2.9	5.3	107
		25	17	10.4	3	5.6	119
		25	18	10.4	3.2	5.2	12
		25	**19**	**10.4**	**3**	**5.3**	**13**
		25	20	10.6	3.4	5.3	108
		25	21	10.2	2.8	4.6	117
		25	22	10.7	3.1	5.8	112
		25	23	10.6	2.9	5.4	118
	Ⅲ群	25	24	10	3.5	5.6	109
		25	25	9.5	3.4	5.6	114
		25	**26**	**10.6**	**3.6**	**5.4**	**116**
		25	27	10.8	3.8	4.6	111
		25	28	11.4	3.9	5.9	113
		25	29	11.5	3.6	6	115
青磁有文直口口縁皿		25	30	10.4	3.2	4.6	493
		25	31	10.3	3.3	5.2	517
		25	32	10.6	3.2	5.6	494
		25	33	12	3.8	6	498
		25	34	10.2	3.6	5.2	518

凡例：単位はcm、（　）は復元、〈　〉は残存の数値

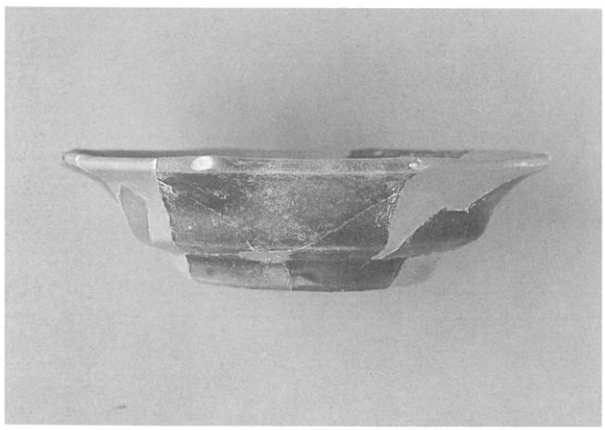
116（図版25 - 26）



203 - 1（図版26 - 3）



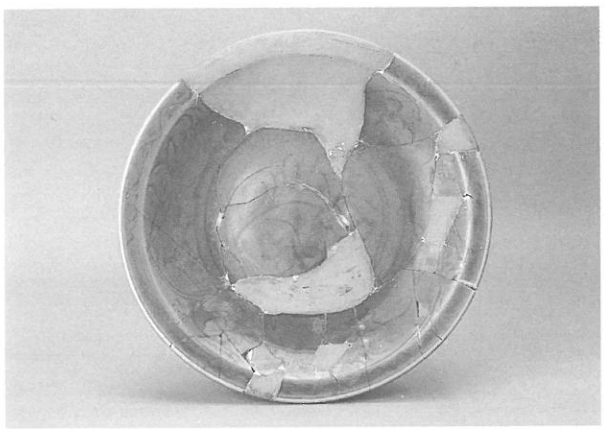
203（図版26 - 3）



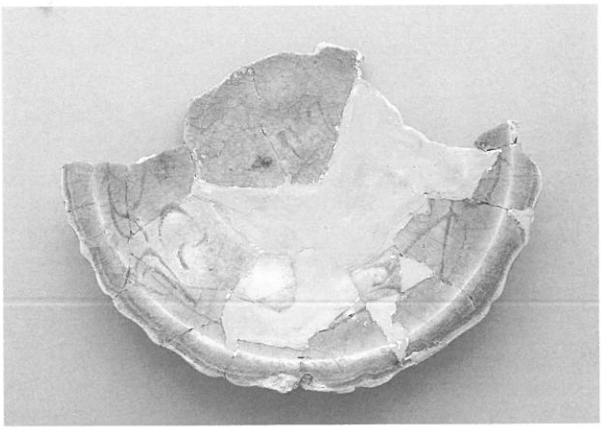
10（図版26 - 6）

名称	分類	報告書図版No.	番号	口径	器高	底径/高台径	登録番号
青磁稜花皿	稜花	26	1	短軸 14.5 長軸 14.9	4.4	6.8	201
		26	2	短軸 15.6 長軸 16.0	4.3	7.3	202
		26	**3**	**短軸 14.6 長軸 15.0**	**3.7**	**6.8**	**203**
青磁八角皿	八角	26	5	短軸 13.6 長軸 14.0	3.3	7.7	204
		26	**6**	**短軸 13.6 長軸 14.5**	**3.7**	**7.4**	**10**

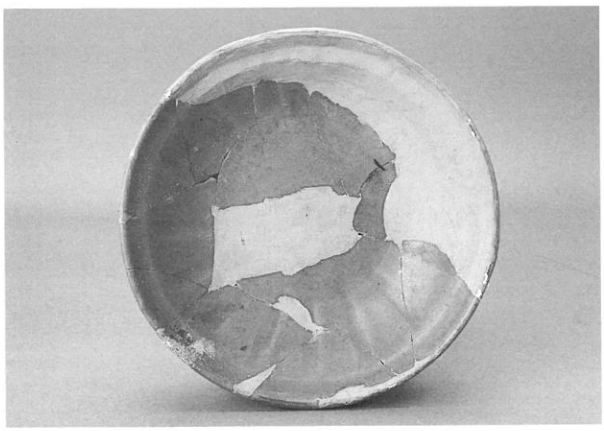
凡例：単位はcm、（　）は復元、〈　〉は残存の数値



238（図版27 - 3）



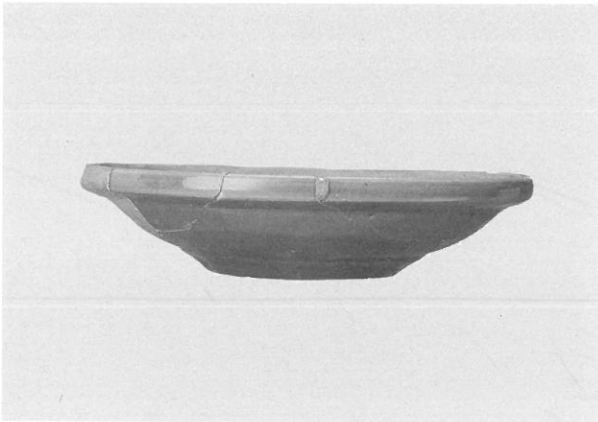
243（図版29 - 9）



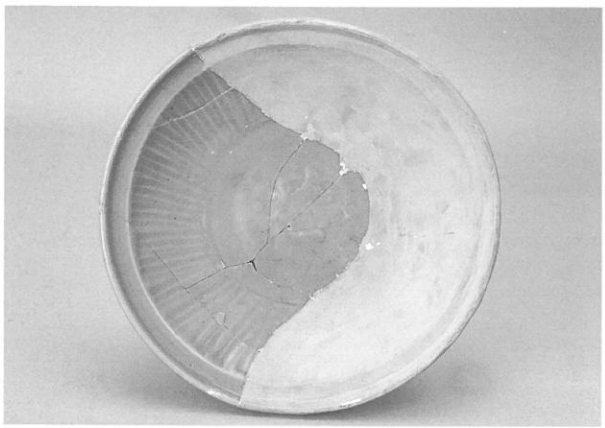
264（図版31 - 20）

名称	分　類	報告書図版No.	番号	口　径	器　高	底径/高台径	登録番号
青磁鍔縁盤	Ⅰ群	27	1	32	6.6	12.4	236
		27	2	33.8	4.9～5.3	16.2	239
		27	**3**	**31.6**	**5.5**	**14.7**	**238**
		27	4	31	5.7	13.4	237
		28	5	24.6	5.2	9.8	241
		28	6	25.8	4.8	10.4	240
	Ⅱ群	28	7	33.2	6.6	15.4	242
		29	8	25	6	11.2	247
		29	**9**	**21.8**	**4.6**	**7.8**	**243**
		29	10	21.1	5.3	7.6	249
		29	11	26.2	4.9	10.8	245
		29	12	23.2	4.3	10	248
		29	13	25.2	4.5	12.2	244
		29	14	23	5	7.3	246
	Ⅲ群	30	15	25.2	6.7	8.5	250
		30	16	20.2	5.2	7.8	251
		30	17	26.3	6.9	12	252
		30	18	24	5.5	10.6	231
		31	19	23.1	5.3～5.8	7.2	265
		31	**20**	**18.1**	**4.7**	**6.6**	**264**
		31	21	25.8	5.9	10	254
		31	22	25.6	5.2	10.8	255

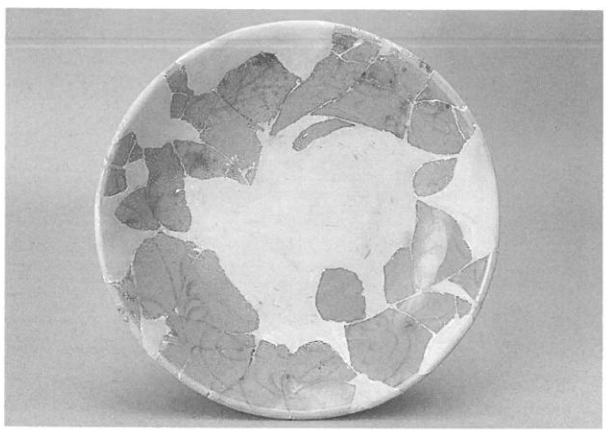
凡例：単位はcm、（　）は復元、〈　〉は残存の数値



261 - 1（図版32 - 24）



261 - 2（図版32 - 24）

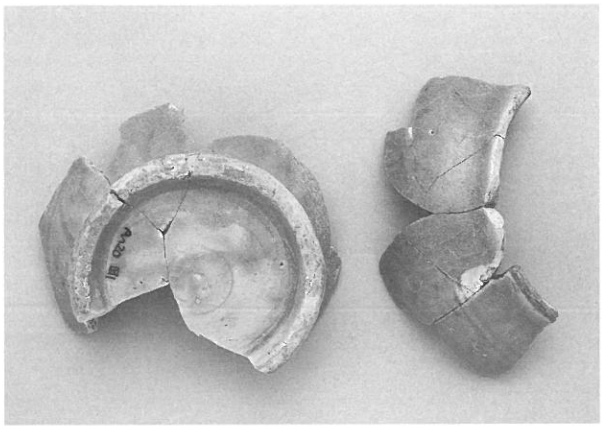


258 - 1（図版33 - 30）

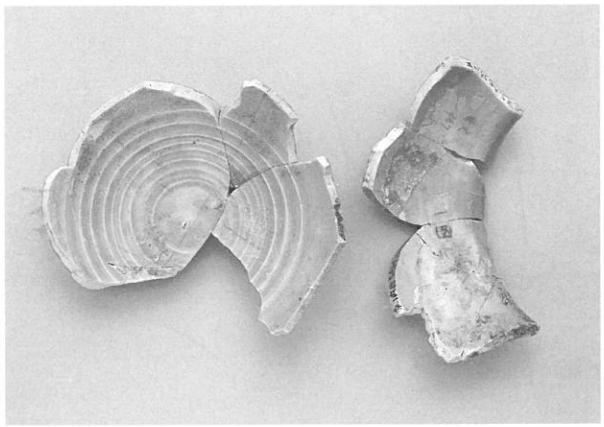
258（図版33 - 30）

名称	分　類	報告書図版No.	番号	口　径	器　高	底径/高台径	登録番号
青磁鍔縁盤	Ⅲ群	32	23	24.6	5.6	11	260
		32	**24**	**24**	**5.6**	**9.8**	**261**
		32	25	23.2	5.6	8.1	262
		32	26	18.2	5.8	6	263
		32	27	23.2	5.5	9.5	256
		32	28	23.8	5.5	8.6	253
		33	29	22.8	5.9	8.2	259
青磁直口口縁盤	Ⅰ群	**33**	**30**	**28.2**	**14.2**	**6.5**	**258**
		33	31	28.1	4	15	232
		33	32	24.6	4.5	13.4	257

凡例：単位はcm、（　）は復元、〈　〉は残存の数値

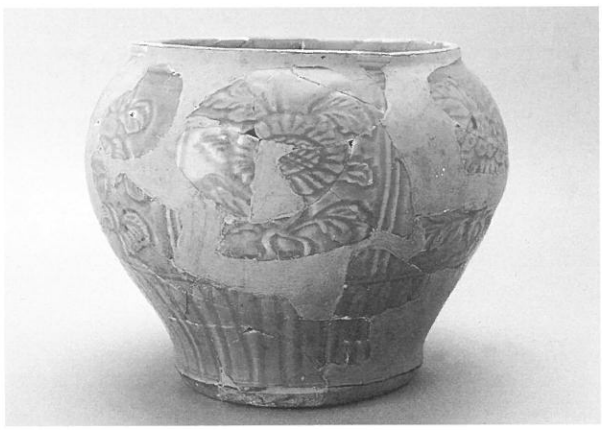


267（図版34 - 1）



267 - 1（図版34 - 1）

270・272（図版35 - 5・11）

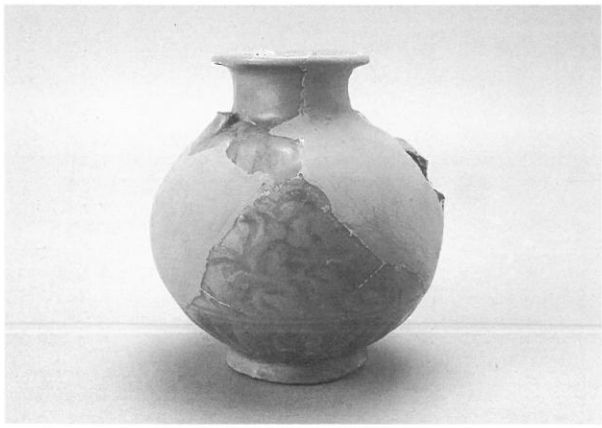


268（図版34 - 6）

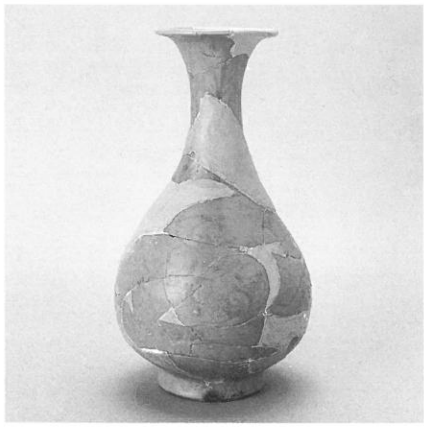
名称	分　類	報告書図版No.	番号	口　径	器　高	底径/高台径	登録番号
青磁壺	小型	**34**	**1**	**10.8**	**(11.2)**	**9.3**	**267**
		34	2	10.8	〈11.3〉	〈9.1〉	266
青磁吉祥字文壺	大型	34	3	25.5	26.3	19	288
		36	4	24.3	24.9	20.2	291
		35	**5**	**20.7**	**22.2**	**17.2**	**270**
		34	**6**	**23.2**	**24.8**	**17.5**	**268**
		35	7	24.1	24.7	18.5	290
		35	8	26	23.9	19	269
壺の蓋		34	9	外径 30.2	高さ 8.3	内径 20.2	289
		36	10	外径 44.8	高さ 6.8	内径 〈16.8〉	292
		35	**11**	**外径 26.2**	**高さ 7.4**	**内径 16.0**	**272**
		36	12	外径 26.1	高さ 7.2	内径 15.4	273
青磁壺		37	13	外径 26.6	高さ 〈7.2〉	内径 17.4	274
		36	14	21.3	22.1	16.5	271
		37	15	20	(20.0)	(15.4)	275
		37	16	18.8	19.5	17	293
		37	17	24	23.3	19.8	294
		37	18	21.5	21.2	17.6	295
壺の蓋		37	19	外径 26.0	高さ 8.2	内径 15.7	296
		36	20	外径 25.8	高さ 6.2	内径 16.2	276
青磁牡丹唐草文	大花瓶	38	1	26.7	62.7	14.6	297
青磁瓶	大　瓶	38	2	〈19.0〉	〈32.0〉	16.9	287

凡例：単位はcm、（　）は復元、〈　〉は残存の数値

6（図版39 - 2）



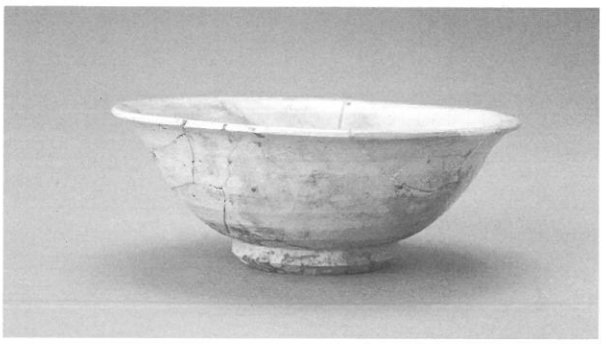
277（図版39 - 4）



235（図版40 - 2）

名称	分　類	報告書図版No.	番号	口　径	器　高	底径/高台径	登録番号
青　磁馬上杯	無文	**39**	**2**	**(8.3)**	**9.4**	**3.6**	**6**
青磁牡丹唐草文　水　注		39	3	(6.4)	(23.6)	(6.8)	233
		39	**4**	**7.2～7.8**	**14.8**	**6.8**	**277**
		39	5	8.4	16.7	8.8	286
青磁双耳瓶		40	1	10.6	26.4	(10.2)	234
青磁玉壺春瓶		**40**	**2**	**7.8**	**23.2**	**7.1～7.3**	**235**
		40	3	〈3.4〉	〈16.8〉	〈6.8〉	280
青磁瓶	小型	40	4	〈7.2〉	〈5.0〉	(4.4)	279

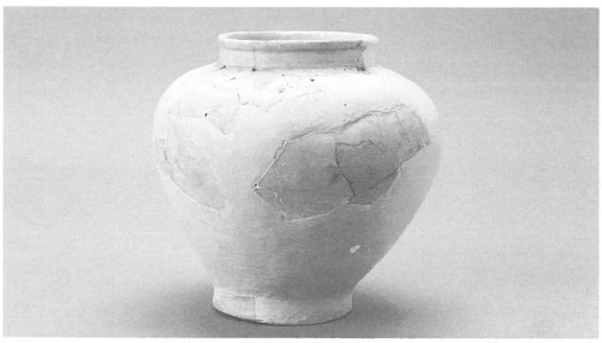
凡例：単位はcm、（　）は復元、〈　〉は残存の数値



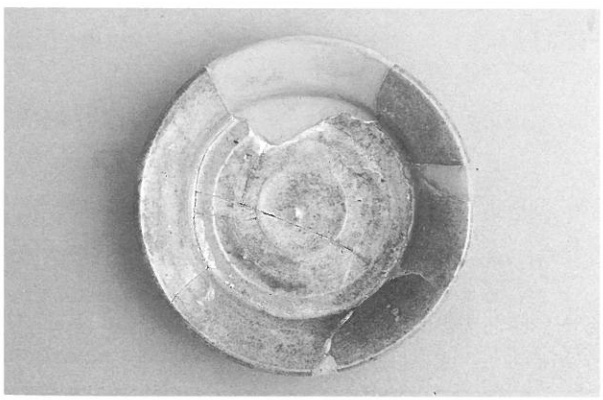
353（図版53 - 3）

360（図版54 - 16）

373（図版54 - 21）



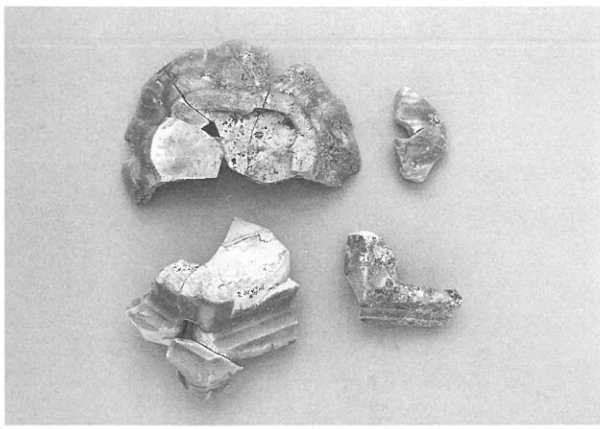
442（図版55 - 26）



356（図版54 - 32）

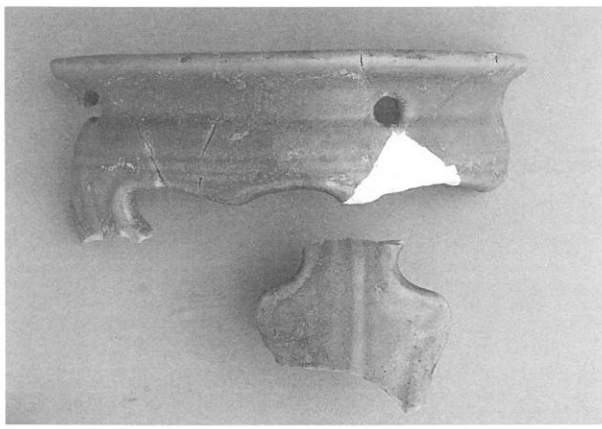
名称	分　類	報告書図版No.	番号	口　径	器　高	底径/高台径	登録番号
白磁碗	Ⅰ類	53	1	14.6	7.1	4.8	349
	Ⅱ類	53	2	12	5.4	4.5	350
		53	**3**	**12**	**4.2**	**4.1**	**353**
		53	4	12	4.9	5	351
		53	5	11.2	5.2	4.9	354
		53	6	11	4.6	3.4	352
	Ⅲ類	53	7	11.2	〈1.4〉	〈9.6〉	371
	Ⅳ類	53	8	11.4	〈1.0〉	〈10.0〉	365
	高台資料	53	9	〈5.6〉	〈1.4〉	5	370
		53	10	〈6.6〉	〈1.4〉	5.7	366
		53	11	〈9.4〉	〈2.4〉	7.1	372
白磁皿	Ⅰ類	53	12	16.2	(3.2)	8.2	363
		53	13	11.4	〈1.6〉	〈7.7〉	368
	皿	53	14	〈11.7〉	〈2.3〉	8	367
		53	15	12.2	〈2.3〉	〈5.6〉	362
		54	**16**	**9.3**	**2.4**	**4.6**	**360**
		54	17	9.8	2.5	4.6	358
		54	18	9.5	2.5	4.3	359
		54	19	9.2	1.5	4.9	369
		54	20	9.2	2.1	4.6	364
白磁口禿杯	Ⅰ類	**54**	**21**	**10.8**	**〈6.0〉**	**〈10.5〉**	**373**
白磁外反口縁杯	Ⅱ類	54	22	8	3.6	2.8	355
白磁八角杯	Ⅲ類	54	23	8.2	〈1.9〉	〈6.75〉	374
		54	24	〈2.2〉	〈2.2〉		375
白磁水注	水注	55	25	6.8	9.3	5.8	376
白磁壺	壺	**55**	**26**	**8.4**	**(15.0)**	**8.8**	**442**
白磁玉壺春瓶	瓶	55	27	6.7	24.3	9.1	**443**
白磁瓶		55	28	〈3.64〉	〈13.5〉	8.8	379
		55	29	〈6.5〉	〈12.6〉	8.8	377
		55	30	6.2	(23.0)	9	378
白磁外反口縁皿		54	31	12.2	2.9	5.9	357
		54	**32**	**12.3**	**3.1**	**6.3**	**356**
		54	33	12	2.9	5.7	361

凡例：単位はcm、（　）は復元、〈　〉は残存の数値



283（図版41 - 3）

左上284、右上285、下3点282（図版41 - 4・2・1）



281（図版41 - 5）

名称	分　類	報告書図版No.	番号	口　径	器　高	底径/高台径	登録番号
青磁唐草文鉢	直口口縁	40	5	26.8～30.6	12.3～13.9	10.2	278
青磁香炉	撮	41	1	最小幅〈2.9〉	〈5.1〉	最大幅〈3.2〉	282
	蓋縁	41	2	短径〈3.1〉	〈3.5〉	長径〈3.8〉	285
	下部と台	41	3	〈11.9〉	〈9.2〉	〈8.9〉	283
青磁水滴	小品	41	4	3	〈4.7〉	〈3.5〉	284
花盆台		41	5	(24.5)	(16.8)	(15.4)	281
青花龍文馬上杯		42	9	14.2	(11.8)	(4.7)	298
青花八宝文大合子	蓋	43	10	30.4	7.8	24.7	429
	中蓋	43	11	29	2.9	28.2	430
	身	43	12	28.7	10.5	22.2	431

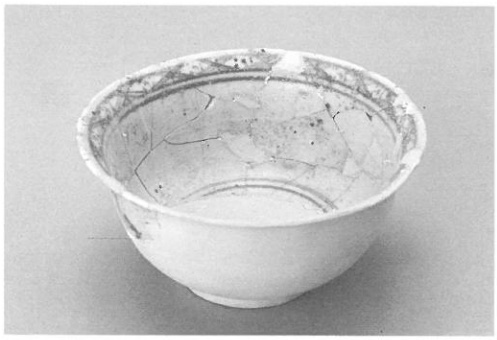
凡例：単位はcm、（　）は復元、〈　〉は残存の数値

319（図版44 - 6）

319 - 1（図版44 - 6）

304 - 2（図版46 - 22）

304 - 1（図版46 - 22）

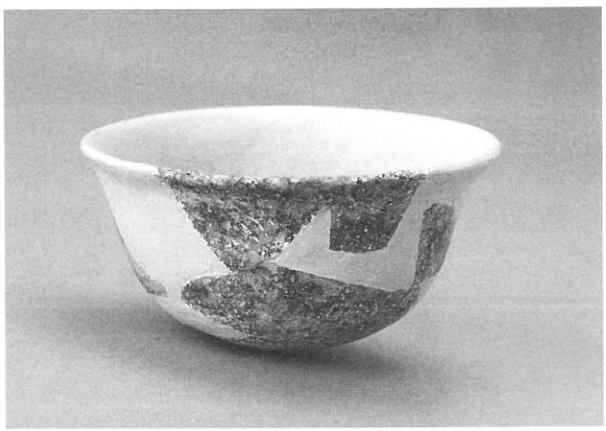


432 - 2（図版44 - 2）

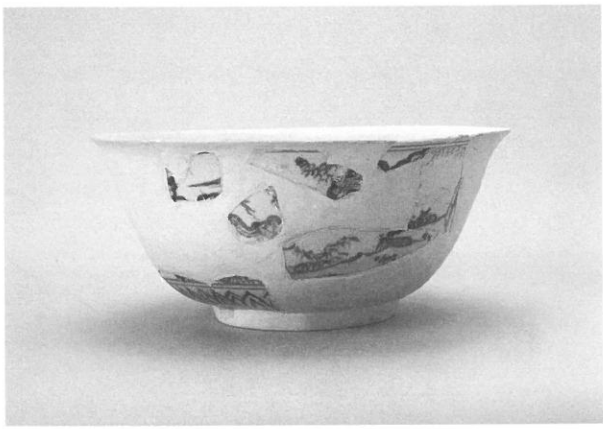
名称	分　類	報告書図版No.	番号	口　径	器　高	底径/高台径	登録番号
青花外反口縁碗	Ⅰ群（大振）	44	1	14	7	5.9	321
		44	**2**	**14.4**	**(7.1)**	**(5.9)**	**432**
		44	3	13.6	(6.8)	(5.8)	324
		44	4	(13.6)	7.7	6.4	325
		44	5	14.8	(7.3)	(5.5)	323
		44	**6**	**16**	**7.4**	**6.2**	**319**
		44	7	14.4	〈6.5〉	〈5.46〉	322
		44	8	15	7.3	5.4	320
		45	9	14.6	6.7	6	315
		45	10	15.4	7.4	5.4	314
		45	11	〈14.4〉	〈6.5〉	4.8	317
		45	12	15.4	7.5	5.6	433
		45	13	15	7.4	5	318
		45	14	15.2	7.3	5.6	316
		45	15	14.4	7	5.4	313
	Ⅱ群（小振）	46	17	11.2	6.6	4.8	305
		46	18	11.6	6.4	4.6	301
		46	19	11.6	6.1	4.7	300
		46	20	12	6.3	5.4	306
		46	21	12.5	(6.5)	(4.8)	310
		46	**22**	**12.2**	**4.7**	**6.1**	**304**
		46	23	12.1	6.4	4.7	307
		46	24	11.6	6	4.6	308
		46	25	12.6	(5.6)	(4.9)	299
		46	26	12.6	5.8	5.2	302
		46	27	12.6	〈5.4〉	〈4.6〉	309
		46	28	(11.5)	(6.4)	(4.8)	312
		46	29	10.2	(5.8)	(4.1)	311
		46	30	11.4	6.2	4.4	303
青花内灣口縁碗	Ⅲ群（大振）	47	31	16	7.7	5.6	326
		47	32	16.1	7.9	5.4	327
		47	33	13	6.1	4.8	328

凡例：単位はcm、（　）は復元、〈　〉は残存の数値

432 - 1（図版44 - 2）

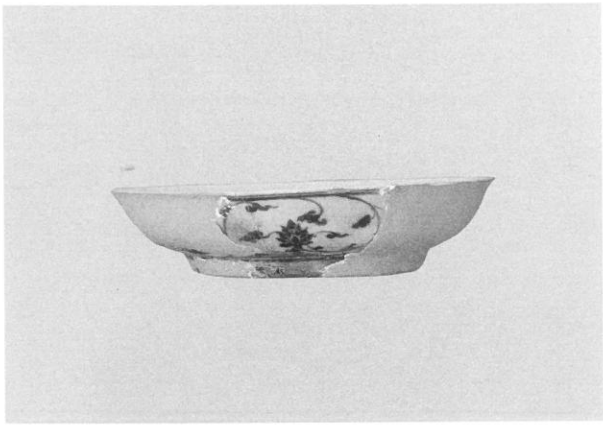


329（図版47 - 37）



434（図版47 - 38）

334（図版48 - 40）



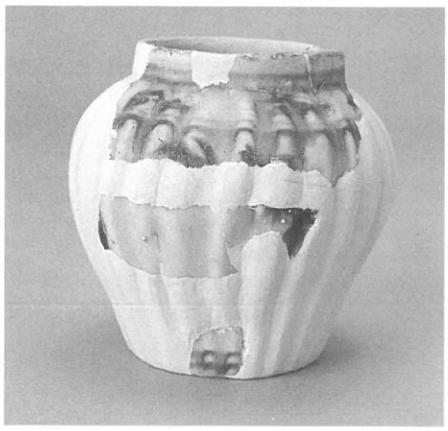
334 - 2（図版48 - 40）

名称	分　類	報告書図版No.	番号	口　径	器　高	底径/高台径	登録番号
青花杯	Ⅰ類	47	34	9	(4.8)	(3.1)	330
		47	35	(6.5)	(4.4)	3.5	331
青花高足杯		**47**	**37**	**8.8**	**〈4.6〉**	**〈2.8〉**	**329**
青花鉢		**47**	**38**	**25.3**	**(11.1)**	**(10.7)**	**434**
青花麒麟文皿	Ⅰ型	48	39	20.8	4.8	12.2	333
		48	**40**	**20**	**4.4**	**12.1**	**334**
青花皿	Ⅱ型	48	41	18.6	5.5	6.7	332
		48	42	17.2	(5.0)	(6.0)	344

凡例：単位はcm、（　）は復元、〈　〉は残存の数値

335（図版49 - 44）

342（図版49 - 46）



345（図版51 - 59）

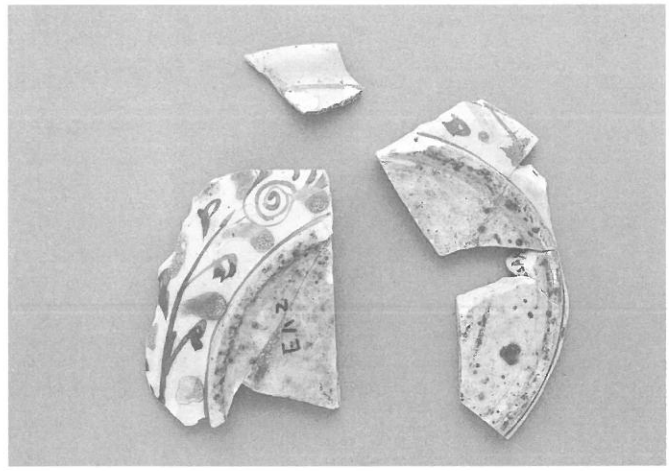
名称	分　類	報告書図版No.	番号	口　径	器　高	底径/高台径	登録番号
青花小瓶		**49**	**44**	**〈4.6〉**	**〈15.29〉**	**8.6**	**335**
		49	45	最小幅〈3.7〉	〈12.1〉	最大幅〈12.1〉	336
		49	**46**	**6.5**	**〈11.9〉**	**〈5.6〉**	**342**
		49	47	4.6	〈12.7〉	〈9.6〉	340
		49	48	〈3.2〉	〈8.5〉	〈8.1〉	339
		49	49	〈3.3〉	〈2.4〉	〈4.8〉	341
	小瓶底	49	50	〈11.3〉	〈3.7〉	7.6	338
		49	51	〈10.1〉	〈4.1〉	7.2	337
		49	52	〈10.3〉	〈3.3〉	8.6	343
青花牡丹唐草文梅瓶	蓋	50	53	9	(8.4)	〈7.2〉	435
		50	**54**	**9.1**	**(8.4)**	**〈6.8〉**	**436**
	身	50	55	5.5	35.2	12.3	437
		50	**56**	**5.5**	**35.9**	**11.8**	**438**
青花松梅樹文双耳花瓶	身	51	57	14	41.4	12.8	439
青花壺	壺	51	58	6.2	(10.2)	6.4	346
		51	**59**	**6.8**	**(10.8)**	**6.2**	**345**
青花牡丹唐草文壺	壺の蓋	52	60	縁直径26.0	〈6.6〉	内側直径17.4	440
	壺	52	61	22.6	37.3	20.9	441

凡例：単位はcm、（　）は復元、〈　〉は残存の数値

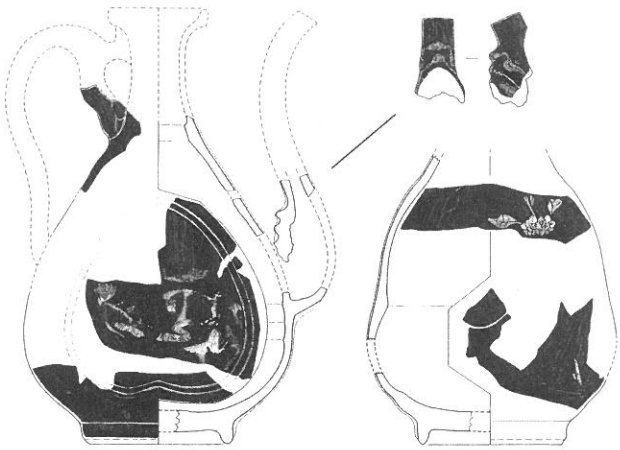
436（図版50 - 54）

438（図版50 - 56）

383（図版56 - 3）



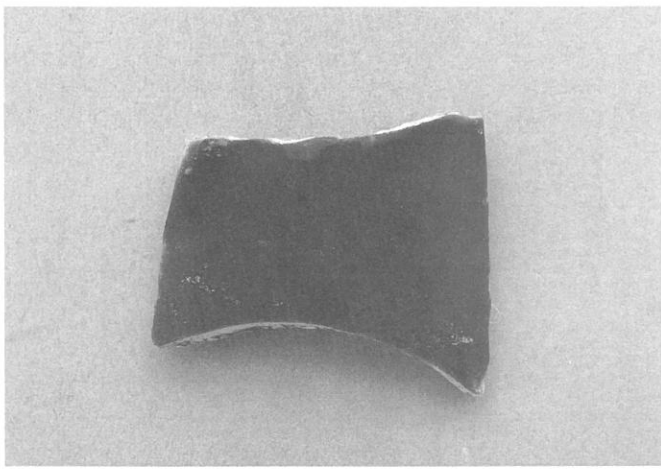
383 - 1（図版56 - 3）



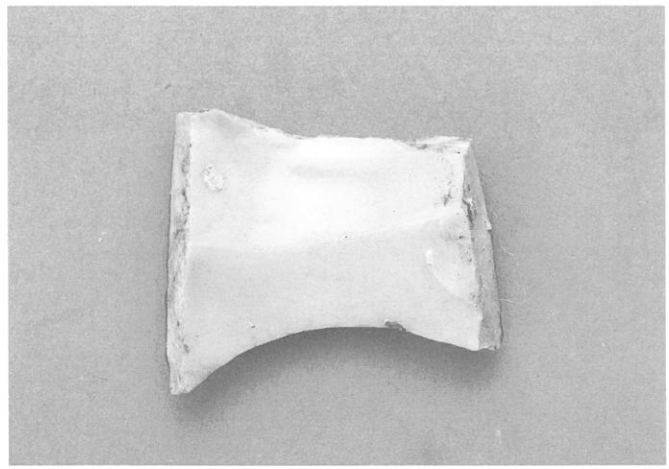
380（図版57 - 1～4･6）

名称	分　類	報告書図版No.	番号	口　径	器　高	底径/高台径	登録番号
五彩菊花文碗		56	1	11	5.9	4.4	444
中国産色絵碗	菊花文	56	2	(11.0)	(5.9)	(4.4)	382
中国産色絵皿	菊花文	56	3	(7.2)	(2.2)	(8.6)	383
紅釉水注		57	1	(6.7)	(25.7)	長軸(9.6) 短軸(9.0)	445
瑠璃釉碗		57	5	最小幅 〈3.6〉	〈3.4〉	最大幅 〈4.8〉	381
瑠璃釉仙盞瓶	仙盞瓶	57	1～ 4･6	(5.8)	(25.4)	8.6	380

凡例：単位はcm、（　）は復元、〈　〉は残存の数値



381（図版57 - 5）



381 - 1（図版57 - 5）

391（図版59 - 2 - A）

392（図版60 - 9）

394（図版61 - 15）

名称	分　類	報告書図版No.	番号	口　径	器　高	底径/高台径	登録番号
褐釉磁器	碗or鉢	58	1	(17.4)	〈3.1〉	〈14.1〉	384
中国産褐釉陶器壺	Ⅰ類（大型）	59	1	21.6	(60.4)	16.8	403
		59	2	27	84.6	19	420
		59	**2-A**	**14.6**	**(34.1)**	**11.8**	**391**
	Ⅱ類	59	3	20	(47.5)	14.6	428
	Ⅲ類（大型）	59	4	18.9	〈35.5〉	14.8	402
		59	5	18.5	42	14.7	401
		60	6	18.6	(44.6)	14	412
		60	7	19.8	50.8	15.7	448
		60	8	20.2	(51.6)	17.2	400
	Ⅳ類（大型）	**60**	**9**	**12.3**	**41.9**	**16**	**392**
		60	10	13.6	41.1	13.6	413
		60	11	〈23.9〉	〈6.7〉	18	414
	Ⅴ類（大型）	61	12	11.4	(39.4)	15	419
		61	13	12.4	(33.8)	11.6	447
		61	14	12	(39.4)	14	411
		61	**15**	**11.2**	**34.6**	**12.8**	**394**
		61	16	9.8	33.7	10.8	410

凡例：単位はcm、（　）は復元、〈　〉は残存の数値

395（図版61 - 18）

393（図版62 - 19）

422（図版63 - 34）

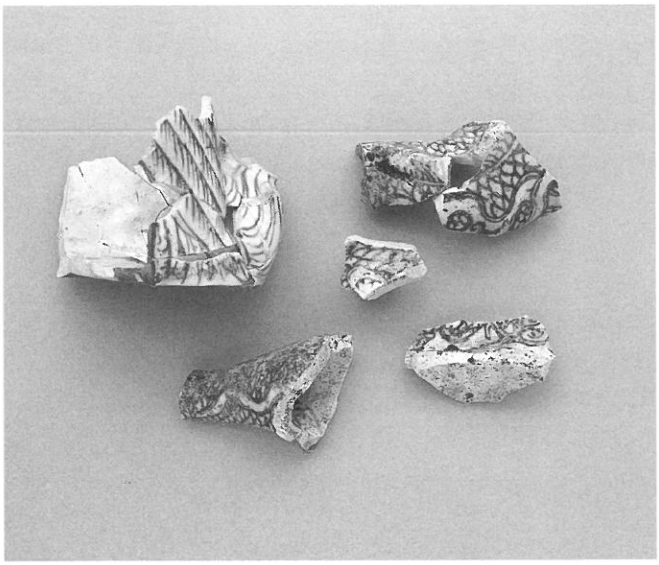
名称	分　類	報告書図版No.	番号	口　径	器　高	底径/高台径	登録番号
中国産褐釉陶器壺	Ⅵ類（大型）	61	17	16	57.4	13.5	396
		61	**18**	**14.4**	**59.6**	**9.4**	**395**
	中型	**62**	**19**	**11.2**	**27.8**	**15**	**393**
		62	20	10.6	28.1	13.6	417
		62	21	11.2	(23.0)	11.8	418
		62	22	12	28	11.4	405
		62	23	11.2	26.3	11.8	404
		62	24	10.2	24.1	10.5	416
	小型	62	25	10.8	〈9.3〉	〈19.5〉	407
		62	25-A	11	21	11.8	408
		62	25-B	93.4	24.9	10.6	409
		62	26	10.4	(20.4)	11	415
		63	27	7.9	17.5	10.4	426
	水注	63	28A・B	10.8	〈33.3〉	12.4	427
	鉢	63	29	21.4	〈3.9〉	〈19.2〉	424
	特殊壺	63	30	7	〈7.0〉	〈14.1〉	421
白釉陶器	大壺	63	31	12.2	(40.6)	14.4	406
	小壺	63	32	9	(25.0)	11	425
	水注	63	33	8	〈3.5〉	〈9.1〉	423
東南アジアか中国産褐釉陶器		**63**	**34**	**撮（直径3.5）**	**4.3**	**15.6**	**422**

凡例：単位はcm、（　）は復元、〈　〉は残存の数値

名称	分　類	報告書図版No.	番号	口　径	器　高	底径/高台径	登録番号
ベトナム青花花唐草文面取瓶		64	9	9.2	29.8	9	446
ベトナム陶器	水注	64	10	幅〈10.5〉	〈8.4〉	長さ〈8.4〉	347
青花水注		64	11	幅〈5.04〉	〈9.24〉	長さ〈29.4〉	348

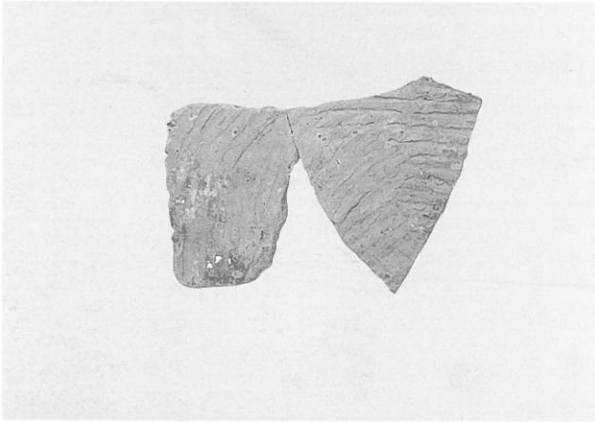
凡例：単位はcm、（　）は復元、〈　〉は残存の数値

347（図版64 - 10）



左上347、他4点　348（図版64 - 11）

208（図版6 - 2）



225（図版7 - 20）

213（図版7 - 24）

213 - 1（図版7 - 24）

名称	分類	報告書図版No.	番号	口径	器高	底径/高台径	登録番号
タイ半練土器蓋	落し蓋	6	1	13	(4.8)		209
		6	**2**	**13.2**	**(4.3)**		**208**
		6	3	12.8	(4.1)		207
		6	4	10.2	(3.8)		211
		6	5	13.2	(3.9)		205
		6	6	13.2	(4.5)		206
		6	7	13.4	(4.8)		14
		6	8	12.2	(3.8)		210
		6	9	13.4	(4.5)		212
		7	10	13.8	3		220
		7	11	16	3.6		219
		7	12	〈6.4〉	3.4		222
		7	13	12.8	(4.1)		218
		7	14	12	〈1.4〉		224
		7	15	14	〈2.5〉		221
		7	16	〈2.0〉	〈3.0〉		226
		7	17	13	〈3.0〉		223
タイ半練土器壺	被せ蓋	7	18	〈2.1〉	〈1.8〉		227
	無文	7	19	9.8	〈11.0〉		217
	壺	**7**	**20**	**〈9.4〉**	**〈9.1〉**		**225**
		7	21	〈3.9〉	〈4.3〉		228
		7	22	〈4.7〉	〈4.8〉		229
その他の蓋	蓋	7	23	17.5	3.8		216
		7	**24**	**22**	**厚さ1.2**		**213**
		7	25	19	厚さ1.1		215
		7	26	20.4	厚さ1.2		214
		—	27	〈5.2〉	厚さ0.9～1.3		230

凡例：単位はcm、（　）は復元、〈　〉は残存の数値

450（図版65 - 1）

399（図版65 - 6）

389（図版65 - 5）

名称	分　類	報告書図版No.	番号	口　径	器　高	底径/高台径	登録番号
タイ産褐釉大型四耳壺	1類	**65**	**1**	**21.8**	**52.5**	**24.2**	**450**
		65	2	23.2	56	27	397
		65	3	19.5	62	27	388
タイ産褐釉陶器壺	小型	65	4	17.6	(36.1)	16.8	398
		65	**5**	**15.3**	**32.2**	**15.6**	**389**
	1類	**65**	**6**	**17**	**(53.7)**	**27.1**	**399**
	小型	65	44	11.7	32	12	452
	1類		7	24	〈7.0〉	〈13.3〉	457
			8	23.2	〈11.6〉	〈28.7〉	456
			9	18.6	〈10.4〉	〈33.2〉	471
			10	20.4	〈12.4〉	〈29.9〉	469
			11	19.8	〈7.9〉	〈22.0〉	470
			12	17.1	〈5.8〉	〈14.9〉	464
			13	19	〈8.3〉	〈19.1〉	462
			14	19.8	〈9.1〉	〈23.2〉	463
			15	21.6	〈4.5〉	〈14.5〉	466
			16	21.8	〈7.4〉	〈16.2〉	467
	2類		17	23.4	〈7.9〉	〈19.1〉	465
	3類		18	24	〈3.7〉	〈17.0〉	468
			19	19.2	〈12.4〉	〈29.1〉	461
			20	23	〈18.3〉	〈42.8〉	460
			21	20.4	〈14.6〉	〈39.1〉	459
			22	23.4	〈5.7〉	〈14.8〉	486
			23	20.2	〈2.0〉	〈18.7〉	487
			24	18.6	〈6.5〉	〈17.1〉	484
			25	18.2	〈8.0〉	〈19.1〉	483
	4類		26	16.2	〈9.7〉	〈29.7〉	485
			27	16.9	〈5.7〉	〈14.2〉	489
			28	18.8	〈6.0〉	〈17.5〉	482
	5類		29	22.4	〈8.1〉	〈16.7〉	481
			30	23.8	〈2.8〉	〈16.7〉	488
			31	22.4	〈9.3〉	〈22.4〉	458
	6類		32	15	〈2.0〉	〈11.4〉	477
	7類		33	17.8	〈7.7〉	〈11.8〉	478
			34	16.8	〈2.4〉	〈12.2〉	476
			35	20.3	〈4.8〉	〈12.6〉	473
	8類		36	17.2	〈6.1〉	〈17.9〉	472
	大型壺		37	〈12.0〉	〈9.4〉	〈38.2〉	475
			38	〈15.8〉	〈9.1〉	〈27.0〉	479
			39	〈13.3〉	〈6.0〉	〈27.8〉	480
	小型壺		40	〈9.5〉	〈6.2〉	〈19.5〉	474
	大型壺		41	〈41.6〉	〈34.1〉	24.5	455
			42	〈41.1〉	〈20.8〉	28.2	453
	小型壺		43	〈17.8〉	〈10.4〉	16.8	454
	その他		45	〈43.4〉	〈28.5〉	(26.4)	503
			46	〈44.8〉	〈33.9〉	(24.4)	502
			47	(21.8)	〈3.5〉	〈14.4〉	504
			48	(18.3)	〈47.3〉	〈14.0〉	505
			49	(19.2)	〈6.2〉	〈12.8〉	506
			50	(22.8)	〈3.4〉	〈15.3〉	507
			51	(19.4)	〈5.0〉	〈12.7〉	508
			52	(16.3)	〈5.9〉	〈13.9〉	509
			53	(18.8)	〈1.6〉	〈16.7〉	510
			54	(13.2)	〈2.2〉	〈9.8〉	511
			55	(11.2)	(21.8)	(10.8)	512

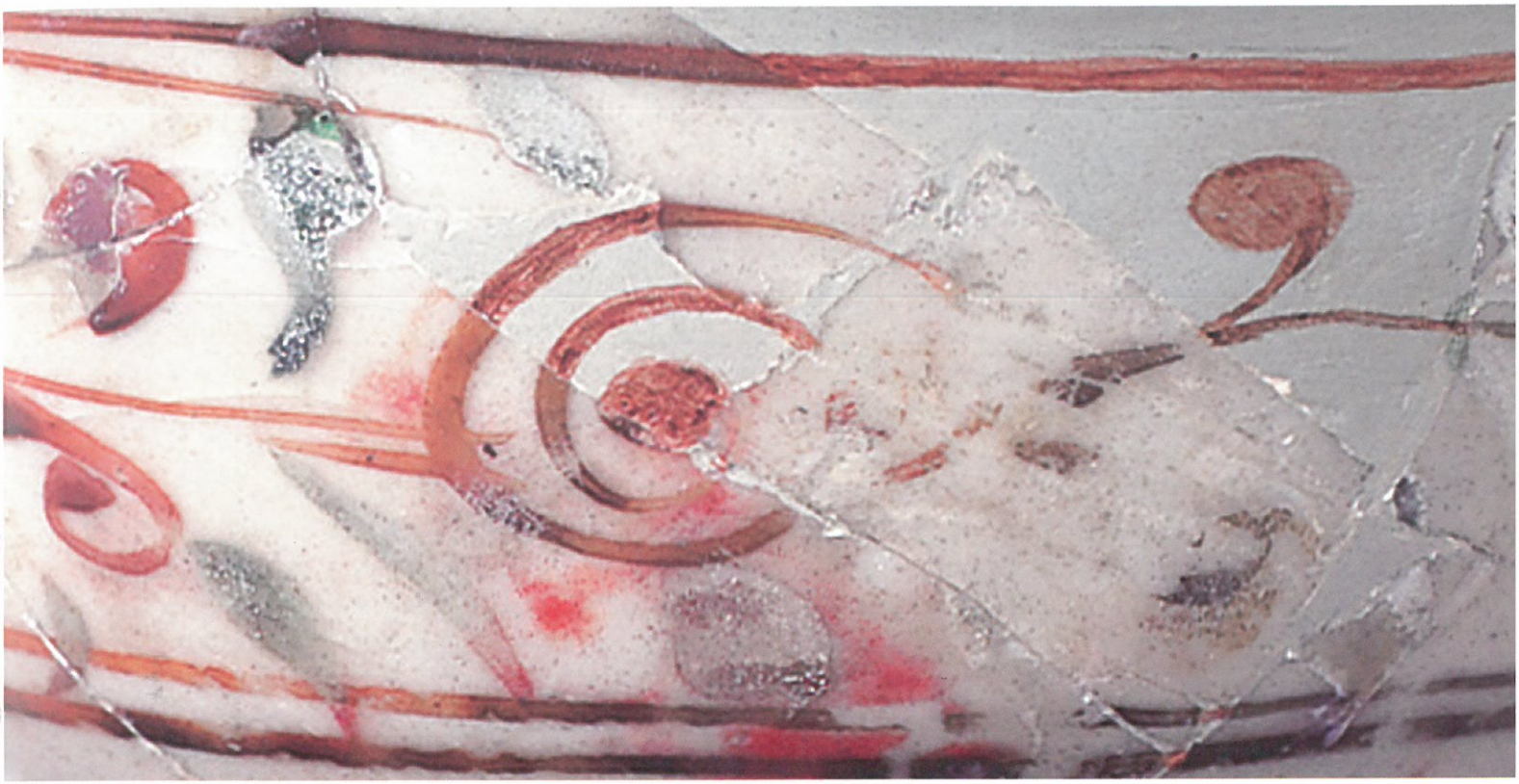
凡例：単位はcm、（　）は復元、〈　〉は残存の数値

名称	分　類	報告書図版No.	番号	口　径	器　高	底径/高台径	登録番号
中世陶器	備前焼擂　鉢	66	1	(28.4)	(8.7)	(13.4)	449
	備前焼大　甕	66	2	(40.2)	(75.0)	(34.0)	385
		66	3	(32.5)	(70.0)	(20.0)	386
		66	**4**	**(34.4)**	**(64.7)**	**(36.0)**	**387**
	備前焼壺	**66**	**5**	**(15.0)**	**(43.5)**	**(19.8)**	**390**
		66	6	(17.4)	(43.0)	(23.0)	451

凡例：単位はcm、（　）は復元、〈　〉は残存の数値

387（図版66 - 4）

390（図版66 - 5）



首里城「京の内」跡の発掘調査概要

金　城　亀　信

（沖縄県教育庁 文化課 主任専門員）

首里城「京の内」跡の発掘調査概要

金　城　亀　信（沖縄県教育庁 文化課 主任専門員）

1．はじめに

首里城跡は那覇市首里当之蔵に所在し、標高100～135mの琉球石灰岩の丘陵上に築かれた琉球国王の居城であった。首里城の規模は、東西370m、南北213m、面積が46,167㎡と県内最大のグスクであった（第１図）。また、首里城は14世紀頃に察度によって築城されたとの伝承もある。

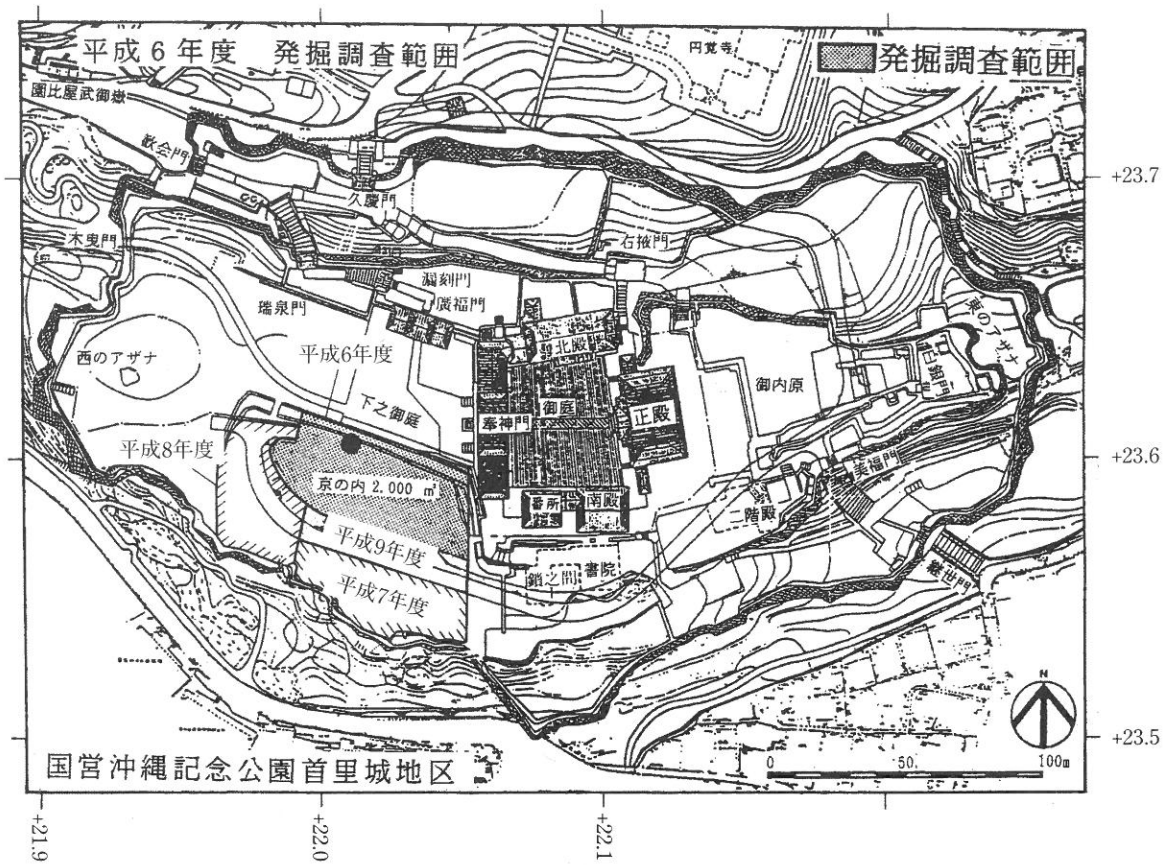
1406年（永楽4）に尚巴志が中山を攻略し、察度の子武寧を滅ぼし、琉球国の支配の拠点として、はじまった首里城は、最後の琉球国王となった尚泰王が明治政府に首里城を明け渡したのが、1879年（明治12）の琉球処分（沖縄県の設置）であった。琉球処分までの約500年間にわたって琉球王国の王宮として、王国の政治、文化、経済の中枢として機能していた。

戦前の首里城は、1925年（大正14）に正殿などが国宝指定を受けて、その偉容を誇っていたが、1945年（昭和20）の大戦で城内地下に日本軍の沖縄総司令部壕がおかれたこともあって米軍の集中砲火を受けて国宝であった正殿などの多くの建造物が消失し、城壁も一部を残して破壊された。戦後は、1950年（昭和25）に首里城跡に琉球大学が創設され、僅かに残っていた城壁の一部も造成や校舎建設等の工事で取り壊され、キャンパス等に使用された。

1972年（昭和47）の本土復帰の際に沖縄県は、首里城およびその周辺の文化財を戦災文化財として復元整備計画を立案し、復帰直後から「首里城城郭等復元整備事業」として沖縄開発庁の補助で、首里城の外郭石積みと檜門を含めた復元整備が開始された。

最初に首里城歓会門復元整備から着手し、久慶門、西のアザナの石積み、継世門、東のアザナの石積みまでの1,003mが復元（平成11年度現在）されている。最終的には、全長1,080mの城郭が平成13年度までに完成する予定である。

1982年（昭和57）の『第二次沖縄振興開発計画』の中で首里城一帯の整備が提言されたため、1984年（昭和59）に沖縄県が首里城の復元整備の指針となる「首里城公園基本計画」を策定した。更に首里城の中心



第１図　首里城跡京の内地区年度別発掘箇所
（●は1459年失火の倉庫跡）

である正殿などを含む建造物の復元が検討され、1986年（昭和61）に首里城公園計画区域の約18haの内、城内内郭の約4haを沖縄県の本土復帰を記念する国の「都市公園整備事業（国営沖縄記念公園首里城地区）」として復元整備を実施することが閣議で決定された。

1992年（平成４）には、遺構調査の成果などを踏まえて復元された正殿を含む建造物が整備され「首里城公園」として内郭の一部が公開されている。

このような中で、首里城内で最も重要な聖域であった「京の内」地域の復元整備の検討がなされた。「京の内」地域の復元整備の一環として、同地域の遺構確認調査が1994年（平成６）から1997年（平成９）までの４カ年間実施された。ここでは、平成６年から平成８年度までの三ヵ年間の調査成果より遺構を中心に主な概要を述べるが、その前に首里城の京の内を中心とした主な歴史や考古学の研究成果を述べる。

２．首里城京の内地域の主な歴史と考古学研究

1372年（洪武５）に中国明王朝の太祖洪武帝の招諭を受けて中山王察度が泰期を遣わし初めて進貢したことが『明實録』(1) にみえる。また、察度は1392年（洪武25）に数十丈の高楼の“高ヨサウリ”（高世層理殿）を造り遊観したことが『中山世鑑』(2) に記載されている。この高世層理殿が浦添城内にあったとする説と首里城内に存在したとする二つ説がある。

真栄平房敬氏の研究では、「京ノ内には古くは「高よそうり殿」をはじめいくつかの殿舎がたっていたであろうが、長い歴史の中であるいは焼け（向氏湧川家々譜に1576年高よそうり殿の炎上の記あり）、」(3) と述べている。また、県内の家譜を整理した比嘉朝進氏は、向氏一世越来王子朝理（尚宣威王長男）の五世を次いだ朝首の説明に「1576年に天界寺（守礼門と玉陵の中間にあった）が失火し、火の手は城内の高楼に燃え移った。しかし、高所なのでだれも消しに登るものなく、朝首ひとりが登って火を消し止めた。（中略）十一世朝略のとき湧川に改名。」(4) と述べている。以上のような状況から高世層理殿は、ほぼ首里城内にあったと家譜研究から推察されてきているようである。

ところで首里城に関する明確な史実は、察度王統を滅ぼした尚巴志が、首里城周辺の造園整備を王城外の安国山に池（龍潭）を掘り、華木を植えたと記録されている沖縄最古の金石文『安国山樹華木碑記』（1427年：宣徳２年）(5) にみえるのが最も古い。

尚巴志が首里城の城主となった1406年以降から安国山に龍潭池を掘って整備をおこなった1427年までの間に王宮の整備も終え周辺の造園整備をおこなうまでに至っていたことが、『安国山樹華木碑記』から窺えるようである。尚巴志は首里城を拠点として、1416年（永楽11）に北山の攀安知を攻め滅ぼした。

北山滅亡から13年後の1429年（宣徳４年）には南山の他魯毎を滅ぼして全島を統一し、琉球王国の礎を築きあげた。

さて、京の内の語義は『おもろさうし』(6) に「きやのうち」、「けおのうち」、「けよのうち」と表記されている。「けお」は「セジ」の同義語として考えられ“神または神の霊力”の意味を持ち「きおのうち」は、首里城内で最も「神の霊力“セジ”のある場所“聖域”」（首里城内の聖域）として位置づけられている(7・8)。民俗学の事例では「きょう」の意味として、知念村の斎場御嶽内にある三庫理に入る右手側の大岩頂上を“キヨウノハナ”（ギョウノハナ）と称し、大岩直下の香炉から岩の頂の“キヨウノハナ”を拝むが、香炉の側にあるクバの神木を足掛かりとしてアマミキヨが天降りされたと伝えられている(9)。また、仲松弥秀氏の研究では、「神の来臨のことであるが、（中略）その前方に微小島が存在する場合は、神は一たんその小島に上陸滞在される。（中略）このような浜前の岩島や小島を、沖縄では「トングヮ」と称しているが、「京」（きょう）と称している村もある」(10) と記述している。

更に“きょう”に関する事例を挙げると名護市嘉陽の集落前面の東方海上にある神が来訪する聖なる小島を“きょう”と称しているとのことであった(11)。

その他に首里城の立地する丘陵一帯が、京の内と称されていたともいわれているようである(3・8)。

京の内には、五つの御嶽が在ったようである。五つの御嶽を記すと“京の内之三御嶽”（神名：アガルイノ大御イベ、ソノイタジキノ御イベ、シキヤヂシキヤダケノ御イベの三神）と称された三つの御嶽、真玉城ノ御嶽または真玉森御嶽（神名：玉ノミヤノ御イベ）、首里森御嶽、の五つの御嶽である(12)。

“京の内之三御嶽”の神名を『琉球国由来記』(12) から同一の神名が存在しないかを検索したところ名護市（久志間切）嘉陽村の濱板敷嶽の神名がソノイタジキノ御イベであり、“京の内之三御嶽”のひとつの御嶽と神名が一致していることが判明している。

将来において名護市嘉陽の濱板敷嶽の祭祀・儀式と“京の内之三御嶽”の祭祀・儀式で、共通の神とみられるソノイタジキノ御イベが、どのような意味合いや係わりがあるのか。或いは濱板敷嶽から京の内の御嶽に来訪するのかなども含めて今後、双方の御嶽での祭祀と儀式における神の位置付けなどの解

明と研究が進展すれば、京の内での祭祀・儀式の在り方が判明するのかもしれない。

京の内に所在した首里森御嶽、真玉森御嶽が、首里城の聖名の由来となり、別名では、“首里森グスク”あるは“真玉森グスク”とも称されていた。

この首里森・真玉森の両御嶽は、沖縄の開闢神であるアマミキヨがつくられた御嶽とされ、首里森御嶽の前庭に“キャウノ内ノ前ノ御ミヤ首里ノ御イベ”(8・12)の神名が『琉球国由来記』にみえる。

京の内の御嶽の配置は、古絵図（第２図Ａ）などから読み取ると京の内の南側が城内でも最も高い位置（標高135m）にある内郭平場に首里森御嶽があり、真玉森御嶽の位置は不明である。首里森御嶽のある南側高台から北西の平坦地および緩い傾斜地に“京の内之三御嶽”が描かれている。

第２図Ａ①の古絵図（第２図Ｂ首里城古絵図）の解釈から首里森御嶽の西側空間から西端に描かれたアーチ門の間の小さな空間（平場）について、首里城研究グループ（高良倉吉ほか）によると、以下のような解釈がある「この郭は京の内で最も高い位置であることから首里森御嶽があった重要な空間と考えられる。（中略）石囲いのある御嶽と思われる門と通路用の門が開けられており、ここを通ってＣの郭に入る。この郭も斎場空間と考えられる。また、西端の内郭城壁が切れた石積みは、国王に託宣を下すキミテズリの神を迎える場所であるといわれ、現場には曲線に切られた精巧な石積みの根石が残っているが、確かな伝承はない。」(8)と述べている。

判然とはしないが、首里森御嶽と同御嶽から西側アーチ門の空間（郭）において、琉球王国の最高神女である聞声大君と高級神女三十三君を中心にして、降臨神である（天神または陽神）キミテズリ（君手摩）の神を迎えて歴代琉球国王の即位決定を初め、国王への託宣、王国の重要な祭祀等をおこなった京の内でも最も重要で、神聖な御嶽（首里森御嶽）と空間（Ｃの郭）であったのではないかと推察される。

次に考古学の主な調査と研究を整理して小史とした。

初めに、首里城の考古学的な発掘調査は、1936年（大正11）12月から翌年の1月までの期間で、伊東忠太・鎌倉芳太郎の両氏に依って四つの地点で発掘調査が実施されている。四地点は、①西ノアザナ東南側下文字瓦層、②京ノ内西北側下（西）、③京ノ内西北側下（東）、④正殿前で調査がおこなわれた。その結果、①・③・④の三つの地点から出土した陶磁器について次のように述べている「此の三地点の出土品は略ほぼ一致して、首里城第一次拡張時代と推察される永楽16年（西紀1418年）－宣徳２年（西紀1427年）の頃の埋蔵であろうと想定される。従って出土品は、大略中山が始めて明に通じた洪武５年（西紀1372年）の頃より、宣徳初年代に至る間のものであろうと推定される」。また、②の京ノ内西北側下（西）については、「此の地点は、出土品より見て、弘治５年（西紀1492年）以降、それより程遠からぬ時代に埋蔵され、出土品は略ぼ成化、弘治の頃のものが多いと想定される」(13)と記していて、伊東・鎌倉の両氏の陶磁器に関する時代観は、現在においても通用する高いレベルのものとして評価が与えられるようである。

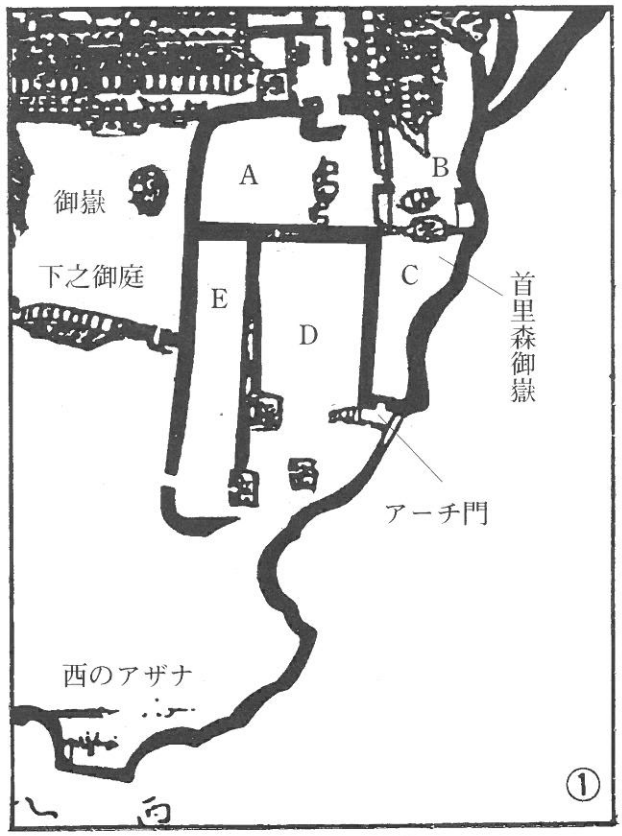
戦後は、大川清氏による西ノアザナ発見の古瓦の調査と高麗系古瓦等の分析(14)がなされ、沖縄の古瓦研究においてひとつの指針となる論文を発表した。

多和田真淳氏は、東恩納寛惇・伊波普猷の両氏が称えていた尚巴志の首里遷都説の概略を説明し、考古学的見地と編年研究から「首里へ移った察度が（中略）他の貿易権の共存を認めた。（中略）首里城、勝連城、崎山子屋敷跡から第三様式の高麗瓦が出土するのはその証左だと考える。さて西紀1200頃からは支那の青磁類が輸入され（中略）須恵器の出土が微弱になってくる、したがって察度王が首里城に移ったころ（1350年―1360年）にはまったく須恵器は影をひそめてよいわけである。もし察度以前に按司がいたとしたら須恵器が相当出土するはずであるが、それが出土しないのはこれを証明してあまりあるものである。」とし、尚巴志説を否定して察度首里遷都説を主張する(15)。また、多和田氏は論の展開の中で京の内について、「察度王の築いたと思われる古城（後代の京の内）（以下、省略）」と述べている。首里城跡の正殿跡、京の内跡などの発掘調査の成果からも須恵器（カムイヤキ須恵器）の出土例は希少である点や正殿の最も古い第Ⅰ期の基壇が14世紀代のものであることから、多和田氏の察度首里遷都説を裏打ちする条件が整ってきている。

次に多和田真淳氏は、『古都首里と古図』(16)の論文で「察度は新首里城の京之内に当たる部分（首里城団塊の南の端）に旧首里城を建設した。御殿の瓦は浦添城の第一類、第二類瓦を利用した。（中略）第一尚氏になってから旧首里城は廃止されもっぱら神事用の京之内として利用され、新首里城へと大拡張されたのである。」と述べている。また、多和田氏は、「浦添から首里に主都が移ったのは察度王の即位のころで、彼は後世の首里城内にあった京之内といわれた所に城を築き、有名な「たかよそうり」という高楼を建てたのである。彼は「癸酉年高麗瓦匠造」と大天の銘のある高麗瓦を浦添城から運び、さらに両瓦の破損を補うためと、岳父勝連按司、無

第２図A　首里城京の内空間の変遷

①『首里城古絵図』（1703年～1707年か）
②『首里古地図』（1700年、1854年）
③『琉球建築』（1937年）
④『首里城熊本鎮台分遣隊配置図』（1893年）
⑤『貳百年前首里城鳥瞰図』



第２図B　『首里城古絵図』
（1703～1707年か）に修正・加筆

官の崎山子（さきやまし―）のために、第三高麗瓦を首里の地で焼いている。（中略）京之内の古城が拡大され、名実ともに城らしくなったのは尚巴志時代であろう。」と結論づけていて、考古資料を基本にして伝承との整合性を計って整理した質の高い論文である。

伊東・鎌倉の両氏が報告した首里城京ノ内西北側下（西）より出土した明代華南彩陶を研究した亀井明徳氏は、次のような事例を紹介して、後述の見解を呈示している。「長くボルネオ島のサラワク博物館で研究生活を送ったトム・ハリスンは、（中略）鴨・ザリガニ・鶴型水注等について、これらの陶器はケラビット族（中略）が首狩りの儀式、収穫祭およびその他の飲酒を伴う祭りにとくに使用する（中略）最近までこれらは非常に価値の高い“聖なる器”であり、部外者が手を触れることは絶対に許されないものであった（中略）さて沖縄から（中略）とりわけ三彩水注などにこのボルネオの「聖なる器」と共通する文化要素が存在したのであろうか。（中略）とりわけ首里城の大量の出土品に注目したい。（中略）京の内が神事用地である点を注意したい。（中略）この京の内で行われた神事とは、王権の交替に伴う祭事といえる。首里城内で発見された大量の華南彩釉陶が、東半部の殿舎の付近ではなく、この祭事の場の付近であったのは、まさしく、これらが新しい支配者を選挙する世謡いの際に使われたことを推測させる。（中略）これら陶器が琉球において新しい支配者の推挙に伴う祭事に用いられた聖器であるとする見解を提起したい。」(17) と位置づけている。また、亀井氏は、首里城跡京の内から伊東・鎌倉の両氏が報告した華南彩陶から「この遺跡は、わが国はもとより、おそらく全アジア地域における華南彩陶の最大の出土地である。」(18) との見解を示している。

亀井氏の研究は、京の内の性格と華南彩釉陶の使用事例などから琉球王国の王権の交替（新しい支配者）に関する祭事に使用されたと結論づけている。京の内の性格（聖域）と華南彩釉陶（聖なる器）との位置づけから推察した場合、明解な結論であり、信憑性は高く、支持ができるのではないだろうか。

3．「京の内」跡の発掘調査と検出遺構

京の内地区の発掘調査は、1994年（平成６）から1997年（平成９）までの四ヵ年間実施されたことについては、前項で述べた。ここでは、筆者が担当した平成６年から平成８年までの三ヵ年間調査をおこなった際に検出された主な遺構等についての概要を記すことにするが、これらの遺構については、遺構の整理と出土品の整理は途中であり、今後の資料整理の進捗によっては、遺構の年代観において修正も必要であることを前提にして、第１表を作成した。

平成６年度から平成８年度までの首里城京の内跡の調査をとおして、14世紀中頃～15世紀中頃までの時期の遺構としては、野面の石積み、基壇、倉庫、瓦葺きの建物などの遺構が存在したようである。

平成７年度の遺構で注目されたのは、瓦葺きの建物の礎石である（第３図Ａ～Ｃ）。この建物遺構(SB02）は、京の内で最も高い地域から検出されている状況から察度王（1350年～1395年の45年間即位）が1392年に数十丈の高楼をつくり遊観した高世層理殿 (2) の礎石か、1576年に家譜資料にみえる失火した高楼（高世層理殿？）の礎石か、いづれかの高楼の礎石として、今のところ考えられるが、出土遺物からすると14世紀中頃～15世紀中頃までのもので納まっている。建物遺構より上に堆積していたであろう15世紀以降の遺物包含層等については、戦災や琉球大学の校舎等の造成工事等で攪乱されたようである。今のところ1392年に察度王がつくった高楼（高世層理殿）か、家譜資料にみえる1576年に失火した高楼のいづれかに該当するが、現時点で言及するとすれば、出土した陶磁器や瓦等から後者の時期（1576年）の高楼の礎石かと考えられる。

この瓦葺きの建物遺構（SB02）が構築される前は、礎石の西辺において、小物用の青銅製品を製作するための小型の鍛冶炉（15世紀中頃）が13基切り合いながら検出されている（第３図Ｃ）。他に同様の小型鍛冶炉が三基検出されているが、検出地点は異なっている。

平成７・８年度に検出された遺構で注目されたのは、洞穴遺構（SX01）である（第３図Ａ・Ｄ）。洞穴遺構の入口は、自然の開口部を加工しながら有る程度、切り石を積み上げている。入口の根石直下は細粒砂岩（俗名: ニービヌフニ）を横位に設置している事が確認された。この細粒砂岩は板状に加工され、石材の端部近くには扉が取り付けられたことを示す円形状の扉の支柱受けの窪が観察された。洞穴内部は、灰色の磚瓦を敷いて、漆喰で固定していたようである。また、洞穴内の壁の窪み（北壁～東壁）や落ち込み（南西側）の箇所には、野面積みで壁とし、石積みの外面は意図的に凹凸を付けたような加工がみられた。石積みの外面の窪みを観察すると漆喰の一部が残っていた。この状況から判断すると洞穴の壁は、全体的に漆喰による白壁であったことが推察される。洞穴内（第３図Ｄ）の最下層を発掘したところ、15世紀中頃のベトナム染付などが出土した。磚瓦敷きの

遺構の直上からは、17・18世紀の沖縄産陶器片などが出土している。以上のような状況から洞穴内の本格的な整備は、今のところ16・17世紀頃が予想される。

京の内の洞穴については、真栄平房敬氏は次のように記している「この洞穴には、第一尚氏から第二尚氏への政権抗争にまつわる伝承がある。すなわち第一尚氏王統末の革命の際、尚徳王の世子が避難した場所であると言われている。」(3)。また、真栄平氏は『球陽』の「腓城由来」の項を引用しながら次のように掲載している「（前略）尚徳王（中略）王妃・乳母、世子を擁着して以て乱難を避け、皆真玉城に隠る。」とし、更に「この洞穴の北側５～６メートルまで離れたところに西に向かって真玉森御嶽が位置していた。（中略）首里城発祥の地である京ノ内の丘は、かって真玉森とよばれ、そこに築かれた最初の城は真玉城（真玉は接頭美称語）とよばれたであろうと考えられる。」と結論付けている。京の内跡の洞穴遺構の調査結果からすると真栄平氏の論文の信憑性が極めて高い。上記したように洞穴の北側５～６ｍ（方位に若干のずれはあるが）の箇所より西側に向かって、約30mの場所から御嶽の石積みとみられる根石が一部検出されている(第４図)。

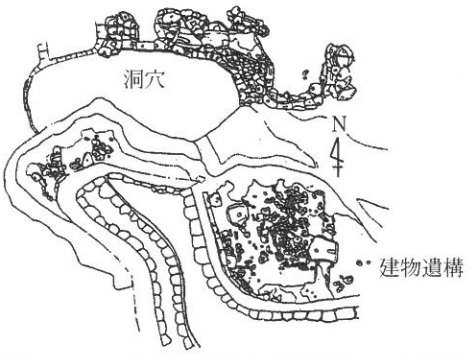
この石積みが御嶽の石囲いと成るのであれば真玉森御嶽として位置づけられるのではないだろうか（第４図)。その他に“京の内之三御嶽”と称されていた御嶽石積みの根石および石積み（SA13・SA25、SA03・SA09、SA04）の一部が、三地点で検出されている。

御嶽の一つは、南側の石積みの目地から永楽通宝２・３枚。そして、石積み外側からヤギの下顎骨、石灰岩製の円筒型三足香炉などが出土している。

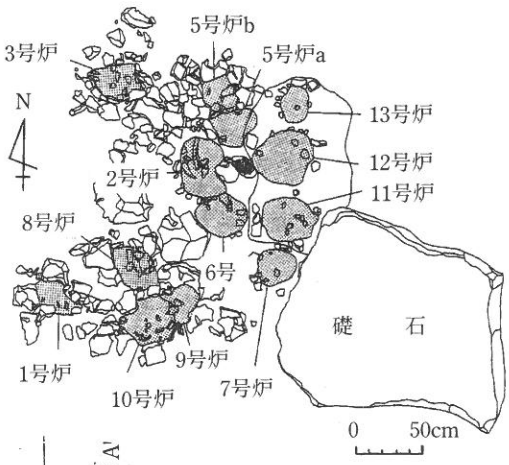
第1表　京の内跡の発掘調査年度と主要遺構および遺物

年度・期間・面積	主な遺構	主な遺物	備考
平成6年度 11月21日 ～3月28日 約2,000㎡	石積み17基、石敷き6基、土壙（倉庫跡を含む）3基、溝10基、建物1基、石列2基（合計39基）。	遺物の主体となる時期は、15C前半～16C代。時代幅14C中頃～昭和期。 中国……青磁、白磁、染付、褐釉陶器、天目茶碗、褐釉磁器ほか。 東南アジア……褐釉陶器、染付ほか。 日本……備前焼の壺・甕・擂鉢ほか。 沖縄……土器、瓦ほか。	・土壙の一基は、1459年に失火した倉庫跡（土壙SK01出土の陶磁器は報告済み）。 ・各遺構については、今後の遺物整理を含めて時期を検討。
平成7年度 11月21日 ～3月28日 約1,000㎡	石積み 6基、石畳 1基、建物 2基、洞穴内遺構1基、鍛冶炉18基（合計25基）。	遺物の主体となる時期は、14C中頃～16C代。時代幅14C前半～昭和期。 中国……青磁、白磁、染付、褐釉陶器、天目茶碗、古銭ほか。 東南アジア……褐釉陶器、染付ほか。 朝鮮……高麗青磁。 沖縄……土器、瓦ほか。	・建物（SB02）14C中頃～15C中頃。 ・洞穴内遺構（SX01）16C中頃～17C代。 ・各遺構については、今後の遺物整理を含めて時期を検討。
平成8年度 7月1日 ～3月28日 約1,000㎡	石積み12基、石畳 2基、柱穴?30基、洞穴入口遺構1基（合計45基）。	遺物の主体となる時期は、15C～16C代。時代幅14C前半～昭和期。 中国……青磁、白磁、染付、褐釉陶器、天目茶碗、緑釉陶器ほか。 東南アジア……褐釉陶器、染付ほか。 日本……青銅製鏡、寛永通宝。 沖縄……土器、瓦ほか。	・石積み（SA03～05、SA08～10）6基は15C～16C。 ・石畳（SS01・SS02）は16C～17C。 ・柱穴?（Pit）は15C。 ・各遺構については、今後の遺物整理を含めて時期を検討。

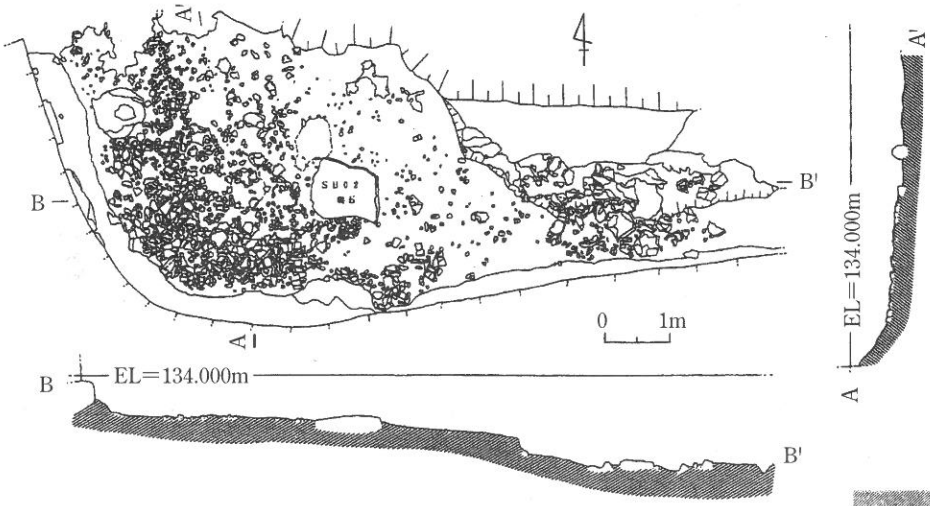
※平成6年～平成8年度までに検出された遺構は、合計109基を数える（平成７年度の検出の洞穴内遺構（SX01）と平成８年度検出の洞穴入口遺構は、一連の遺構であり、実質的には108基となるが、今後の資料整理と遺構の検討結果によっては、遺構の数の増減が予想される。）



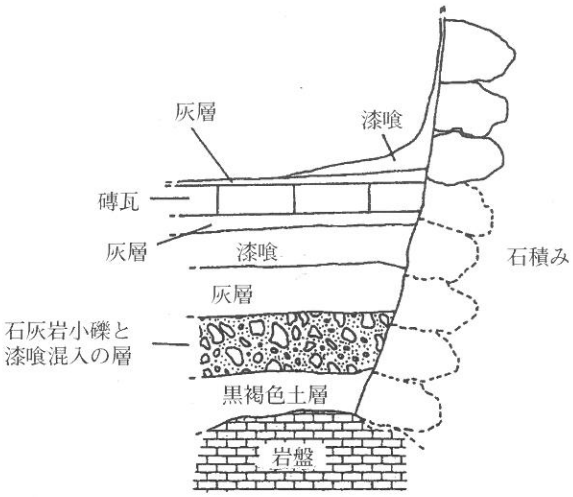
第3図A　G−15の遺構平面　洞穴（SX01），建物遺構（SB02）（平成7年度）



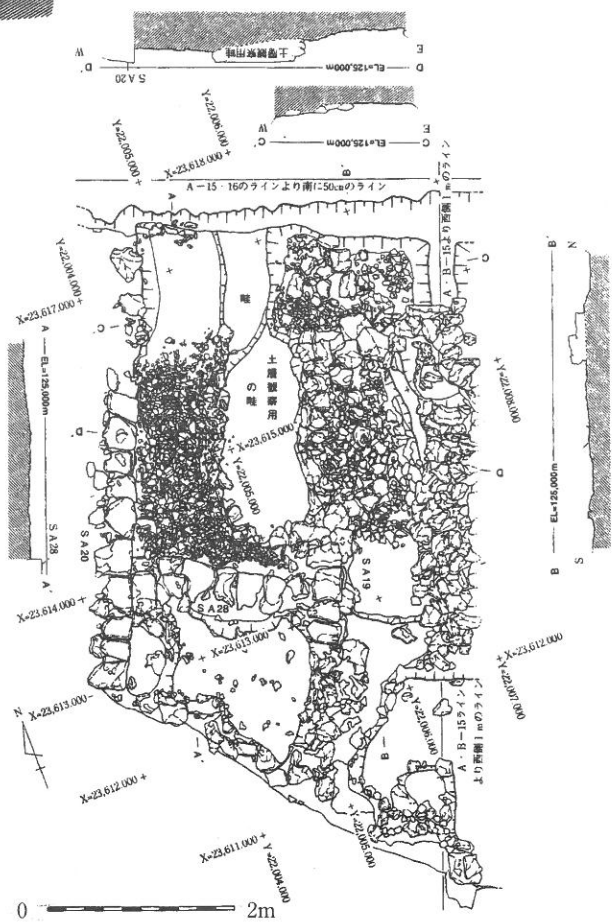
第3図C
G−15の第3層面検出の小鍛冶群
（平成7年度）



第3図B　G−15の第2層面検出の建物遺構（SB02）（平成7年度）



第3図D　洞穴内遺構（SX01）の土層模式図（平成7年度）



第3図E　1459年失火の倉庫跡（SK01）検出直後の状況（平成6年度）

平成６年度の遺構で、第Ⅰ期（14世紀前半～14世紀後半頃）の遺構として報告した(19) Ｂ－13・14のPit.２基とＣ・Ｄ－15・16のPit.４基は、基盤の琉球石灰岩を40cm前後の深さまで掘り窪めたものが３・４基存在した。Pit.の直径は40～50cmを測った。Pit.の中からウシの頭蓋骨や手指骨などが出土している状況からウシに係わる祭祀や儀式などと関連する遺構ではないかと判断された。

最近になって南風原町の仲間村跡から13世紀頃の祭祀場所が確認され、クバ（ビロウ）の根元にウシの下顎をクバの木に沿って南北方向に意図的に五個並置した状況で出土しているようである(20)。

ウシに関する祭祀・農耕儀礼は、仲間村跡や京の内の状況から古くから存在していることが発掘調査から推察される。その当時の祭祀や儀礼などの精神文化の内容をある程度、窺い知ることができるのではないだろうか。

京の内の倉庫跡に関する文献資料として、『明實録』(1) 英宗実録、巻301の1459年４月５日の項で、「天順三年三月癸未朔 [甲申] 禮部奏. 琉球國中山王尚泰久奏稱本国王府失火. 延焼倉庫銅銭貨物. 欲將附搭蘇木等貨. 照永樂宣德間例. 給賜銅錢. 且銅錢係中國所用. 難以准給. 宜將估計鈔貫. 照舊六分京庫折支潤生絹匹. 其四分移文福建布政司. 收貯紵糸紗羅絹布等物. 依時直関給. 従之.」にみえる失火によって焼失した倉庫として（倉庫跡から出土した多量の陶磁器の整理と他の遺構と関係から1459年に失火により焼失した倉庫）判断された（第３図Ｅ）。

1459年焼失の倉庫跡から出土した多量の陶磁器は、京の内での祭祀や儀式に使用された祭祀遺物も含まれているのではないかと判断される。倉庫跡より出土した陶磁器などから往時の京の内での琉球王国の重要な祭祀や儀式を想像するとすれば、首里森御嶽か首里森御嶽の西側の小空間でキミテズリの神を迎えるために、青磁牡丹唐花文花瓶・青花松梅樹文双耳花瓶・青磁香炉・青銅製鼎型香炉が置かれた。香炉の前には青花八宝文大合子や青磁盤（大皿）、青磁小皿などに盛り付けられた供物が供えられ、倉庫に保管されたタイの大型褐釉陶器壺の中から「香花酒（ラオ・ロン）」を青磁大型壺（酒会壺）に汲み移したものを御嶽まで運び、祭祀や儀式が始まる前に「香花酒」の入った青磁大型壺から更に紅釉水注と青磁水注あるいは青磁や白磁の玉壺春瓶に汲み移して置き、祭祀や儀式が始まると紅釉水注や青磁水注あるいは青磁や白磁の瓶から琉球王国最高神女や高級神女等が青磁馬上杯と青花馬上杯に注ぎ入れて行われたのかもしれない。また、多量の陶磁器と共に鉄製の錠、鎧小札、兜鉢、ガラス小玉、青銅製香炉の把手、刀の鍔などが出土している。これらの遺物の中で、直接的に祭祀や儀式と関係の薄い鎧、兜、刀の鍔の在り方を考えたとすると以下のオモロから武具や武器である鎧や刀などが祭祀や儀式に使用されたことが推察できるのではないだろうか。『おもろさうし』(6) 第１巻「首里王府の御さうし」の中から二例(5･25)を挙げて記す。

「あおりやへが節」

5「一　聞得大君や赤の鎧　召しよわちへ　刀うちい　大国　鳴響みよわれ　又　鳴響む精高子が　又　月しろは　さだけて　又　物知りは　さだけて」

25「一 聞得大君ぎや　初め軍 立ちよ　わちへ 合あて 行き遣り 敵 治あわちへ 又 鳴響む精高子 が」

とあり、聞得大君が京の内での儀式の際に鎧や刀を使用したことが推察できるようである。

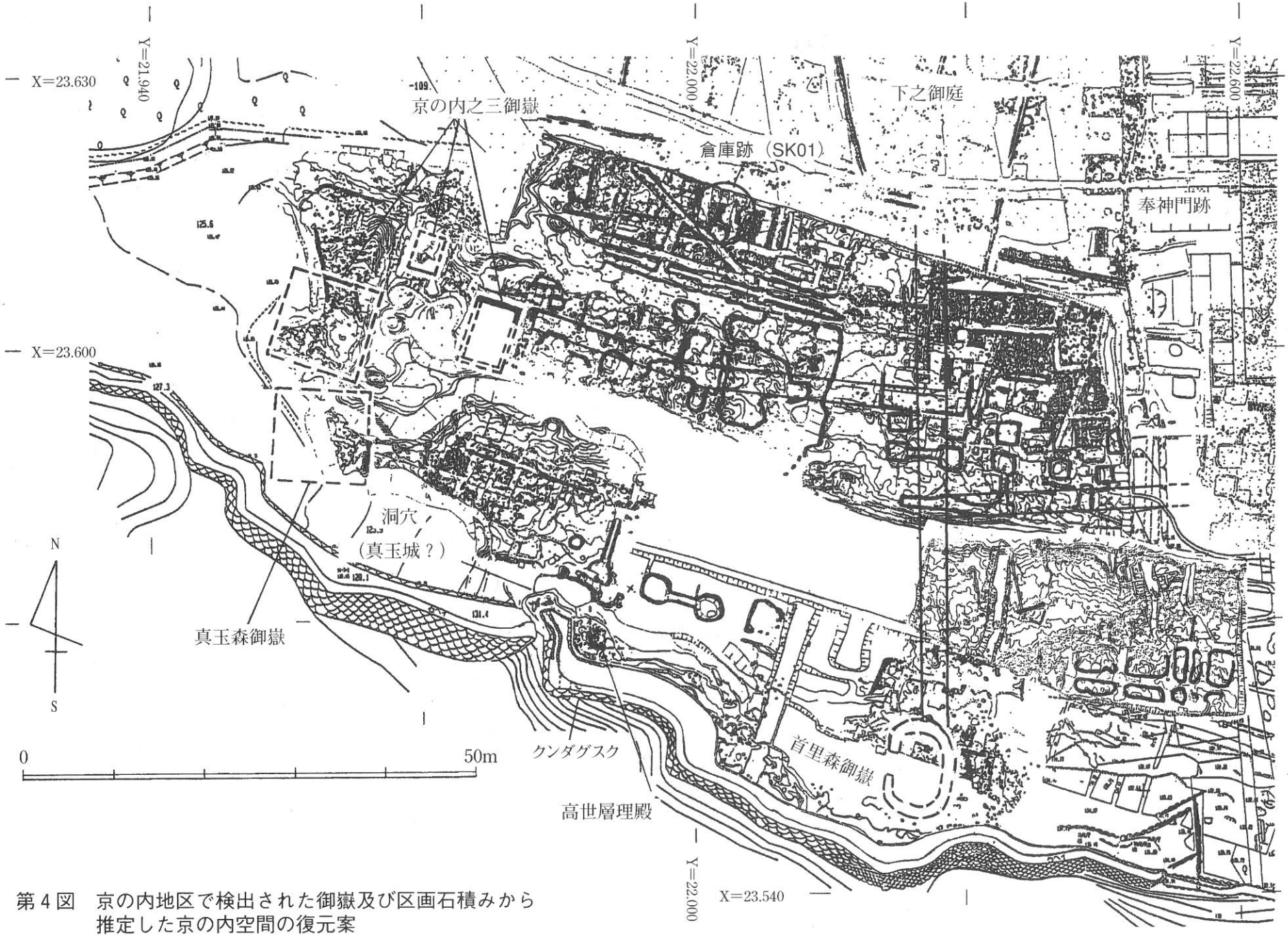
ところで第一尚氏王統（1406年～1469年）の頃の最高神（神女）は佐司笠（さすかさ）であったが、第二尚氏王統（1470年～1879年）にはその地位を聞得大君に譲るが、さすかさは依然として高い神格があったようである(21)。

15世紀中頃まで京の内での祭祀や儀式の頂点に君臨したのは琉球王国の最高神女は聞得大君ではなく、佐司笠であったことが推察される。京の内から出土した多量の貿易陶磁は、前記したように京の内での祭祀や儀式で主に使用されたのではないかと考えられるが、考え方によっては、中国皇帝の使者である冊封使を迎えた際での専用の使用。あるいは、京の内での祭祀・儀式での使用と冊封使を迎えた際の歓待用としての料理の盛り付けや酒入れとしての陶磁器の併用も考えられるようである。

４．おわりに

首里城京の内跡の1459年に失火により焼失した倉庫跡から出土した多量の貿易陶磁器に関連する資料としては、倉庫の焼失の一年前に首里城正殿に掛けられていた『万国津梁の鐘』（鋳造1458年）がある。『万国津梁の鐘』の銘文の中には、次のような一文がある「琉球国は南海の勝地にして、三韓の秀を鍾め、大明を以て輔車となし、日域を以て唇歯となす。（中略）舟楫を以て万国の津梁となし、異産至宝は十方刹に充満せり」（訳文）とあり、『万国津梁の鐘』の銘文の内容とおりに「京の内」の倉庫跡から中国、タイ、ベトナム、日本の陶磁器が多量に出土した。

沖縄の先人達が、進貢交易で国を豊かにし、財を築きあげてきたことを証明すると共に世界的にみても類稀なる貴重な陶磁器も交易によって入手している。



第４図　京の内地区で検出された御嶽及び区画石積みから推定した京の内空間の復元案

将来において、京の内の倉庫跡（SK01）から出土した陶磁器を基本にして、『歴代寶案』(22) などの文献にみられる陶磁器類の量と内容等を比較し、検討をすることのできる重要な一括資料でもある。

末尾ながら今回の特別企画展「首里城京の内展」で展示されている中国、タイ、ベトナム、日本の陶磁器は、平成6年度に発掘調査を実施した際に京の内地区の倉庫跡（SK01）から一括で出土した1,162 個体の一部である。

倉庫跡から出土した陶磁器の中から平成12年6月27日付けで、陶磁器518個（附、金属製品一括、ガラス玉一括）が国の重要文化財（考古資料の部）として指定された。展示も国の重要文化財を中心に構成されているようである。国の重要文化財として、指定された 518個の陶磁器の中には、国内の遺跡から報告例のなかった紅釉水注、青花龍文馬上杯などが展示されている。これらの資料は、貿易陶磁を研究する上でも貴重な一括資料であり、世界的にも注目されている。

［註文献および引用文献］

1．日本史料集成編纂会『中国・朝鮮の史籍における日本史料 明實録之部 1』　国書刊行会 1979年。

2．沖縄県教育委員会　『重新校正　中山世鑑』巻二1983年。「洪武二十五年　中略　察度王モ後ニハ驕奢ノ御心ヤ出来ケン高ヨサウリトテ数十丈ノ高楼ヲ作リ遊観ヲシ給ケルカ或時此楼ニ上リ戯言ニ常ニ此楼上ニ居給程ナラハ毒蛇ノ恐モ無物ヲトソ宣ケル」。

3．真栄平 房敬　『首里城物語』　ひるぎ社 1991年。

4．比嘉朝進　『沖縄のサムレー』　風土社 1990年。

5．沖縄県教育委員会　『金石文―歴史資料調査報告書Ⅴ―』　沖縄県文化財調査報告書69集 1985 年。

6．外間守善・西郷信綱　『おもろさうし』日本思想大系 18 岩波書店 1972年。

7．国語研究所　『沖縄語辞典』国立国語研究所資料集 5　大蔵省印刷局　1980年。

8．首里城研究グループ　『首里城入門―その建築と歴史―』　ひるぎ社 1989 年。

9．仲松弥秀　「新垣孫一翁よりの聞き書き」『知念城跡・斎場御嶽及び周辺整備基本構想・基本計画』知念村 1993年。

10．仲松弥秀（三、来訪神の経路）「南島の海神祭」『古層の村』沖縄民俗文化論 タイムス選書 4　沖縄タイムス社 1977年。

11．元県教育庁文化課民俗文化財担当指導主事の桃原茂夫氏より1997年に教示を頂いた。

12．伊波普猷ほか『琉球国由来記』琉球史料叢書第 1 ・ 2 巻　名取書店 1940 年。

13．鎌倉芳太郎　『セレベス　沖縄発掘古陶瓷』国書刊行会 1975年。

14．大川 清　「琉球古瓦調査抄報」『沖縄文化財調査報告 1962年版』沖縄県教育委員会監修　那覇出版社 1978年。

15．多和田真淳「首里城の古銭と首里遷都」『古稀記念多和田真淳選集(考古・民俗・歴史・工芸編) 』　古稀記念多和田真淳選集刊行会編 1980年。

16．多和田真淳「古都首里と古図」『古稀記多和田真淳選集（考古・民俗・歴史・工芸編）』　古稀記念多和田真淳選集刊行会編 1980年。

17．亀井明徳「明代華南彩釉陶をめぐる諸問題」『日本貿易陶磁史の研究』　株式会社同朋舎出版 1986年。

18．亀井明徳「明代華南彩釉陶をめぐる諸問題・補遺」『日本貿易陶磁史の研究』　株式会社同朋舎出版 1986年。

19．沖縄県教育委員会　「首里城跡―京の内跡発掘調査報告書（Ⅰ）―」沖縄県文化財調査報告書第132 集　1998年。

20．金城亀信（沖縄）「第二部　都市・城郭研究最新情報」『都市研究の方法』中世都市研究 6　中世都市研究会編　新人物往来社　1999年。

21．宮城栄昌　「佐司笠　さすかさ」『沖縄大百科辞典』中巻 沖縄タイムス社　1983年。

22．沖縄県立図書館史料編集室　『歴代寶案』校訂本第 2 冊　沖縄県教育委員会　1992年。

［参考文献］

・沖縄タイムス社『沖縄大百科辞典』上巻・中巻・下巻 1983年。

・當眞嗣一・上原　静「首里城正殿跡の調査」『文化課紀要』第 4 号　沖縄県教育委員会　1987年

・金城亀信「首里城跡「京の内」跡出土の輸入陶磁器」那覇市立壺屋焼物博物館　『那覇市立壺屋焼物博物館開館記念特別展　陶磁器に観る大交易時代の沖縄とアジア』 1998年。

・金城亀信「首里城跡「京の内」跡出土の中国陶磁」『陶説』第544 号 7月号 日本陶磁研究会 1998年。

・金城亀信「首里城「京の内」跡出土の輸入陶磁器」『月刊考古学ジャーナル　10月臨時増刊号』　特集　琉球考古学最新情報 NO.437 ニュー・サイエンス社 1998 年。

・金城亀信「青磁ラマ式蓮弁文碗について」『貿易陶磁研究　第20号』 日本貿易陶磁研究会 2000年。

首里城京の内出土陶瓷器

－15世紀前半代の標識資料－

亀　井　明　徳

（専修大学文学部 教授）

首里城京の内出土陶瓷器－15世紀前半代の標識資料

亀　井　明　徳（専修大学文学部 教授）

沖縄県那覇市首里城跡・京の内SK01土壙検出の中国・タイ・ベトナムなどの陶瓷器は，明代の15世紀前半の良好な標識遺物として認定できる。以下，中国陶瓷器を中心にして，これらの陶瓷器が，15世紀前半に，生産ないし流通していたとする根拠を明確にしたい。個々の出土陶瓷器の詳細については，すでに大部な発掘調査報告書が刊行されているので，それに拠られたい（沖縄県教委1998）。

1．青花白瓷

明代前半期の景徳鎮窯製の青花白瓷器（以下青花瓷と略す）は，ここ数年間の同・珠山御窯廠関連遺跡の発掘調査によって明らかになりつつある。とりわけ，洪武・永楽・宣徳，すなわち14世紀第4四半期から15世紀第2四半期を前後する時期の，官窯青花瓷の具体的な状況が，かなり鮮明になってきた。

しかし，宣徳以降，成化以前については，年款銘遺品がきわめて少数であるために，いぜんとして「空白の30年」などと表現されている。すなわち，15世紀第2四半期から中葉におよぶ正統（1436～）・景泰・天順（～1465）にいたる期間の状況は不鮮明である。これらは，主として官窯青花瓷についての状況であり，これを民窯青花瓷について広げると，的確な資料不足は否めず，官窯瓷器との影響関係をにらみつつ，少数の資料を点綴しながら，その姿を映し出す方法をとらざるをえない。

SK01検出の青花瓷のなかで，こうした方法によって，年代の手がかりがつかめる資料を摘出して，以下にのべたい。

〈　〉は写真，[　]内が挿図記号，（　）内は発掘調査報告書の図番号と一致。

①青花碗[a]（57図1－60図30）；SK01検出の碗に共通している特徴は，腰を丸く張り，外反口縁で，低い高台は内傾ないし直立であり，外側には開かない。文様は，外側面に牡丹ないし宝相華唐草文・如意頭文・三友文など，内底に梅月文・牡丹文・雲文・草花文・「福」字など，口縁内外に四方繋文・2連ないし反転雷文・パスパ文字などを描くことを特徴とし，直口口縁碗（31-33）も施文は共通している。やや大型碗（鉢）では，人物文と腰に蓮弁文を描くものや（38），小型品および高足杯も同様の形状で，施文は類似している。

（39·40）の皿もこれらに組み合わさる共通した意匠である。

このような特徴をもつ青花瓷は，南京・明故宮玉帯河調査によって，1964年にまとまって発見され，景徳鎮東河流域窯群で生産された永楽・宣徳期民窯の産品と考えられている（南京博物院1976，梁白泉他1996）〈2・3〉。年代設定の根拠は，同一層位から出土した官窯瓷器に依拠しているようである。

これら民窯製碗の原形として想定されるのは，一連の「宣徳年製」款銘品である。例えば，オックスホード・アシュモレアン博物館X1409やデビッドファンデーション美術館（PDFと略記）No.682の青花碗などでは，体部に宝相華唐草文，口縁に反転雷文帯と菊花唐草文帯，高台の唐草文の施文がされている。SK01検出品は，この種官窯様式を原形として，個々の文様の簡略化と高台などの文様すべての消去などがなされたものといえる。

紀年銘墓出土品で類似例をさぐると，景徳鎮市北郊観音閣劉家・舒母袁竜貞墓（景泰7年·1456）出土の碗2点では，巻雲蘭草「福」字銘文と巻雲蘭石文品が，同一形態で，文様構成も近い（文物1981-2,pp.46－50）。さらに，広東・羅亨信墓（天順1・1457年没）に随葬されていた青花碗（口径14.8cm，文物1991-11，pp.46）や，広東・海康県南興鎮外園村窖蔵出土の山水文碗（香港中文大1989）が，SK01検出品と共通する要素をもっているが，上記の南京・明故宮玉帯河出土品がより類似性がつよい。永楽・宣徳に該当する時期の紀年銘墓に良好な資料の出現が期待されるところである。なお，（60図38）の鉢は，同じ高士巻雲文の意匠の破片が，景徳鎮湖田窯の明代中前期地層から出土している（景徳鎮1992，No.296）。

この形式の碗は，外銷陶瓷にもみられ，フスタート採集品のなかに，梅月文碗がある（出光美術館1984）。わが国においては，和歌山・友ヶ島沖引き揚げ品，山梨県新巻本村遺跡などから発見されており，わが国出土の明代青花のなかで年代的に遡るものであることを指摘した（亀井明徳1980）。なかでも友ヶ島沖引き揚げの梅月文碗〈1〉は，（58図-15）などに類似しており，青瓷碗などもSK01の出土品とその特徴を共通しており，並行した年代が想定できる（和歌山市1997）。その後，新巻本村遺跡やその他の出土例が集められている（小野正敏1982）。さらに，フィリピン・パンダナン島沖沈没船から，類似した青花碗・皿・罐などが，青瓷稜花盤・櫛目文盤などと組みあわさって発見されており，SK01と類似した

器種構成である（森村健一1996）。

つぎに五彩菊花文碗について触れると，元代後半から明代前半に通有の，いわゆる枢府タイプ碗にみるように，口径にたいして器高が低く，腰をつよく張り，水平に切断された高台畳付の幅広いものがある。例えば，香港芸術館蔵品（口径12.8cm,器高6.5cm，香港芸術館1979，No.138，香港芸術館1995，No.13）は，この特徴をもち，内面に印花唐草文がみられ，破片が景徳鎮市落馬橋窯の元代後期灰坑から出土している（景徳鎮陶瓷研1992,No.177･178）。これに対して，[b]（69図1）は，腰の張りが比較的小さく，縦長の器形に近づいている。上記の景徳鎮窯の明初堆積層から類似陶片が検出され（同上No.289），同一層検出の白瓷盃が洪熙元（1425）年墓から出土し，年代の1点がおさえられる。フィリピン出土品に類例が求められ，プエルトガレラ発見のサントス・コレクション品は〈4〉，腰の渦巻き文をのぞいて類似し（Peralta.J.T.1982），富山佐藤美術館蔵の2点は，器形は類似しているが，文様の簡略化は進んでいない。（富山佐藤1999）。いずれも文様の構成・描法は類似し，これらが規格化された製品であることを示している。器形および略描体の菊花文および詳細は不明であるが，紀年銘墓出土例を勘案して，これを永楽・洪熙・宣徳期の産品と考える。

②青花高足杯[c]（55図9）；内面に印花文，内底には「射干」，すなわち，あやめ科の「ひおうぎ」を描き，体部の三爪竜文・口縁の唐草文とあわせて香港個人蔵品（葉佩藍1998図140，口径13.3cm）と〈5〉，アメリカ個人蔵（Lee.J.G.1950，口径13.7cm）が非常によく似ている。

外面に三爪竜文を描く高足杯は，内底には菊花文または雲文の2種類の描写が多く，前者例として，吉林省博物館（口径13cm，国家文物局1995），日本個人蔵（矢部良明1974），鴻禧美術館（鴻禧美術館1992），V&A（C311-1951），アシュモレアン博物館（X1387），ブランデージ・コレクション（de Young Museum1967）などの各蔵品がある。

後者の内底雲文としては，内モンゴル赤峰大営子元代窖蔵出土の5件（文物1985-5，pp.89-93），故宮博物院（葉佩藍1998，図139，口径13.3cm），アシュモレアン博物館（番号不詳D.H.Wikramaratna寄贈），ビクトリア・アルバート博物館（V&Aと略記，C311-1951，器高9.2cm），アディスコレクション（Addis.J.M.1979,No.6,器高9.3cm）などの各蔵品があり，他にもアメリカ個人蔵をあげることができる。

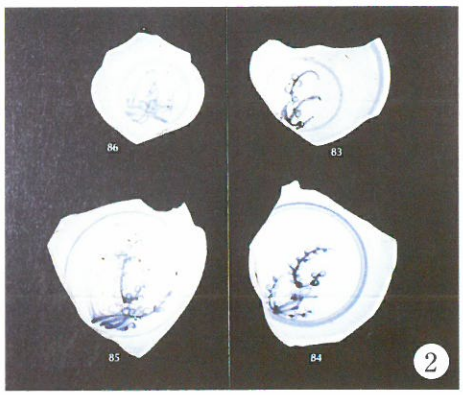
注意される出土例は，南京市北郊中央門外にある呉禎墓1件であり（口径12.9cm），内底には簡素化された菊花文が描かれ，SK01品の描法と類似している。墓主は，洪武12（1379）年に没し，葬年はこの年以降とみられている（考古1972-4，pp.31-33）。元代窖蔵から出土した青花高足杯例もいくつかあげられ，河北・定興県南関窖蔵出土の2件は，飛鳳文・寿字文品と，斗笠形梅月文品であり，共伴白瓷など元代後半のものと組み合わさる（文物1986-1，pp.89-91）。江蘇・丹徒元代窖蔵出土の青花高足杯6件のうち，内底の射干文は類似しているが，外面は梅月・松・竹などで異なる（文物82-2）。また，江西・高安県窖蔵出土品のうち9件は，内外面ともに唐草文と草花文の組合わせであり，SK01品とは異なる（文物82-4，pp.58-69）。

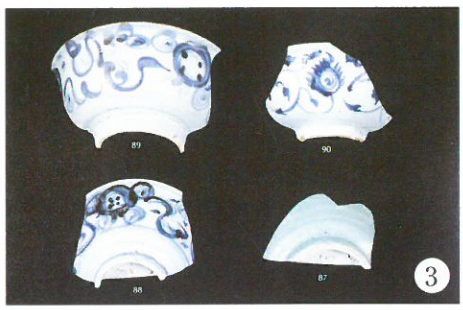
これら高足杯の，竜文は至正タイプにみられる描法であるが，内底面の射干・菊花・雲文などは，いずれも至正タイプとは異なる略描体であることは注意される。これらの生産年代を，上記の南京・呉禎墓にみるように洪武年間，あるいはそれ以降に下げて考えることができよう。

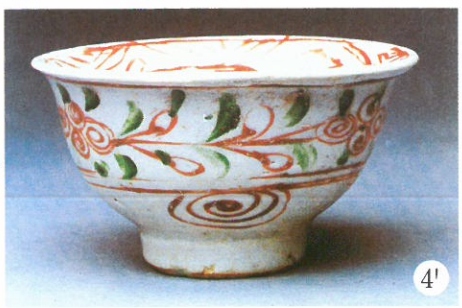
③青花牡丹文罐[d]（65図61）；甑口撫肩広口形で，腰をしぼり，わずかに外反させる。外底はあさく内抉りして露胎であり，内面はうすく施釉されている。これらの特徴は至正タイプを踏襲し，文様においても，口縁部の波涛文，肩にはラマ式蓮弁文内に，便化した雑宝文をいれ，腰の同文内の変形した垂下文の形も，下述する青花梅瓶と同巧意匠で，元青花瓷の配置にみられるものである。

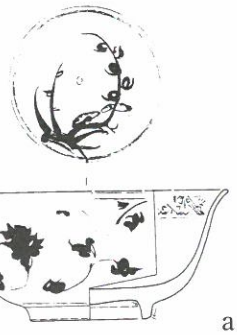
しかし細かくみると，その半円形の波涛文は，宣徳在銘品のそれと類似し（国立故宮1998，No.37），胴部の牡丹唐草文の葉文は葉脈を白く抜き，葉端を尖らす筆致も，珠山出土の宣徳在銘の罐の表現との関連をうかがわせる〈6〉（大阪東洋陶磁1995）。さらに，香港芸術館蔵の天順5（1461）年銘の青花牡丹唐草貼花蟠螭文瓶（馬希桂1999.205図）の花・葉の表現との類似性がよりつよくみられる。したがって，本品は，至正タイプを従文などの部分では，形式的には残してはいるものの，宣徳期ないしそれ以後の民窯の産品と考える。また，罐蓋（65図60）の捩花の周囲にめぐらされた十字型雲文は，宣徳在銘品からしばしば見られる特徴的な意匠であり，本品は捩花とともに宣徳期あるいはそれ以降と考える。

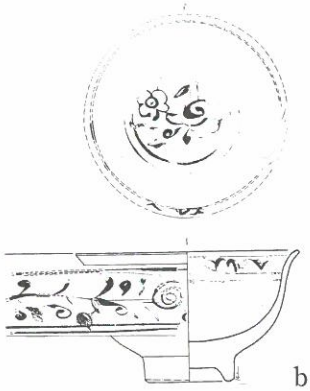
これとは別に小型の唐草文罐の破片が検出されている。（64図58）の類似品は，江西・新建県の朱盤炓墓出土の5件の青花罐のなかにみられる。そのうちの1点（図版7-3，器高19.5cm）の肩に描かれた線描蓮弁文と胴部の牡丹唐草文が類似し，腰の文様は，（62図50および52）の底部破片の渦巻き状の雲文である〈7〉。この墓主は，正統14（1449）年に葬せられている（文物1973-12，pp.64-66）。同じく，広東・東莞市篁村・

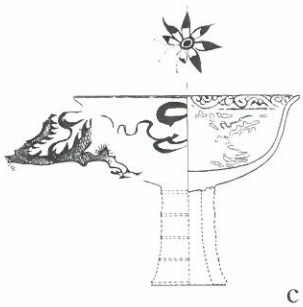












1-1'.青花梅月文碗　和歌山·友ヶ島沖海底引き揚げ
2.青花碗破片　南京·明故宮玉帯河出土
3.青花碗破片　南京·明故宮玉帯河出土
4-4'.五彩菊花文碗　Santosコレクション
5-5'.青花竜文高足杯　香港個人蔵品

羅亨信墓（天順1・1457年没）随葬の罐2点（器高16.6-17.3cm）も類似している〈8〉（文物1991-11，pp.46，広東省博1992）。さらに，（64図59）は小片であるが，南京市牛首山弘覚寺塔基出土の4点の青花蓋罐に類似しているようである（南京博1981）。この寺は，正統年間（1436-50年）に建立された。したがって，これら小型罐の年代は，紀年銘墓出土資料からみると，15世紀第2四半期前後の年代幅のなかにおさまると云えよう。

④青花牡丹文梅瓶[e]（63図56）；胴部下半をほとんど収斂させないこの形態は，宣徳以降の梅瓶に通有である。頸部には亀甲文を細かくいれ，胴部に描かれた牡丹唐草文は，上記の牡丹文罐と同じ手法であり，同時期の作とみる。肩と腰にえがかれた蓮弁文は，間弁を入れ，縦長で尖頂形にするところは宣徳期のそれに類似しているが，ここでも垂下文の下半に5本の流れをつくる意匠は，トクカプの至正タイプ牡丹文梅瓶（TKS15/1370）や瓢箪型八角瓶（TKS15/1473）などに近似文があり，従文の部分に古式なスタイルをのこしている。

獣首を付けた松竹梅文双耳花瓶[f]（64図57）は類例がすくないが，デビッド財団美術館（PDF680）の弘治9（1496）年銘品およびほぼ同時期と考えられるV&A品（器高60.0cm）などと比較すると，あきらかに先行している。頸部の蕉葉文は白抜き葉脈の外周に二重に葉文をつくり，主文は，基部から分枝する梅樹と，松・竹を組み合わせたとみられ，いずれもかなり異形であり，いかにも民窯の意匠といえよう。脚部の波涛文は，横位置に描いており，波頭の左に渦巻く波文を配する構図で，いわゆる雲堂手にみられ，北京市文物研究所所蔵の青花携琴訪友図罐（器高36cm）の肩部に類似例をみいだせる〈9〉。これは天順年間の作と推定され（周鑾書1998），この腰にも二重蕉葉文がみられる。

⑤青花盒[g](56図10·12)；元様式青花と報告されている破片は，SK01から大盒1（47片）と高足杯1であり，その他の遺構から14片，推定10個体分が検出されている。この盒は，管見のおよぶ範囲内では類例を見つけだし得ず，きわめて生産量の少ないものと考える。蓋甲部は，竹・草などの背景のなかにたたずむ，複数の人物が描かれているようで，青花人物（周業夫）文罐（大阪東洋1997）の文様構成であろうか〈10〉。周縁をめぐる波涛文帯・雑宝文・射干唐草文のそれぞれは，至正タイプの典型といえる。6区画された内蓋が嵌入され，身部は残存部分が少ないが，菊花唐草文・蓮弁文のいずれも至正タイプの描法である。類似の形状の硯台は数例あげられ，白瓷盒では，本品と同じく内蓋をもち，口径19.7cmのものが故宮博物院にあるが（葉佩藍1998－388図），このような大型青花盒の類例をしらない。

本品は，復原蓋口径が30.4cmの大型品であり，大英博物館蔵の青花人物文盒（口径11.2cm，OA1947.7-12.168)やV&A蔵の青花牡丹文盒（J.Addis寄贈品），景徳鎮市落馬橋の元末地層出土品（葉佩藍1998，No.32，口径8.8cm）は，いずれも小品であり，文様構成も異なる。モチーフがやや似ているとみられるのは，インドネシアのマリク・コレクション品（口径13cm，Adhyatman S.1980,No.34）があるが〈11〉，明代前半の文様が描かれ，破片では北京個人蔵品（葉佩藍1998，挿図30A）にあるが，その他に類例を見いだせない。

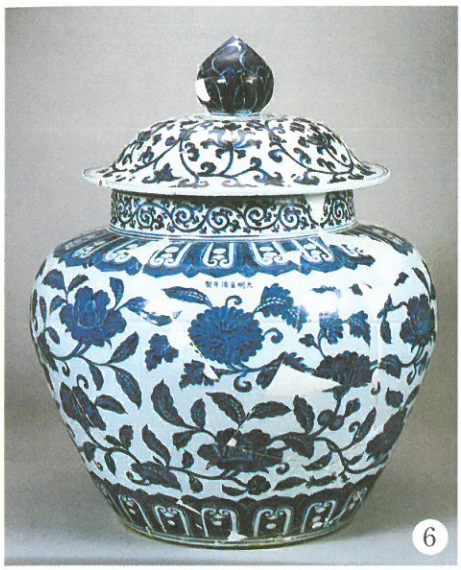
この他に，ベトナム青花貼花文瓶が検出されている（77図9）。胴部·頸部·腰部に格狭間形の窓を各4箇所あけ，花文を透し彫りのように貼り付け，その縁には赤色の顔料が塗られている。口縁は8角形，頸部には葉脈を白抜きにした蕉葉文，鋸歯文帯をはさんで，胴部には宝相華文を白抜きにし，外底部はチョコレートブラウンを塗布している。こうした瓶は，従来例をみないものであったが，最近類似品が，ホイアン沖沈船から数個体引き揚げられている〈25〉(Hoi An 2000)。器形および施文など基本的によく似ており，接近した時期の所産とみるが頸部の形状，蕉葉文や胴部の地文の細かい表現は，SK01品の方が丁寧なつくりである。両者ともに，窓枠の外周に丹とみられる赤色顔料を塗布しているところは，元青花瓷貼花花卉文罐（河北・保定永嘉路出土品など）の紅釉を想起させる。

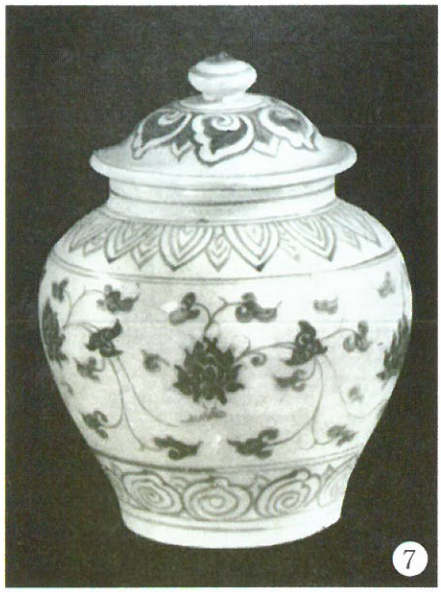
2．青瓷

SK01からは，多くの青瓷が検出されているが，青花瓷などと比較して，年代設定の明瞭な根拠がすくなく，一般的に承認されている説を援用せざるをえない。

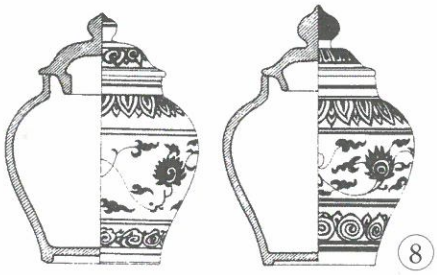
①青瓷碗；ここから検出された碗を，できるかぎり細分しないと，刻花蓮弁文，雷文帯（蓮弁文・唐草文），印花文に3分でき，施釉方法は主に外底の環状釉剥ぎである。

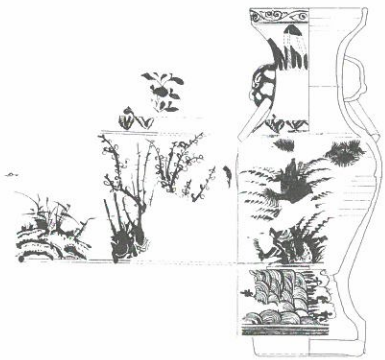
このなかで，直口の雷文帯の資料数が多く，体部に蓮弁文を刻むタイプについては，かつて14世紀中葉－15世紀前半の年代を推定した。これに大きく修正を必要とする新出資料がなく，現在でも変更の要はない。検出されたいわゆるラマ式蓮弁文タイプのうち，比較的施文が丁寧とみられる（26図14）などにおいても，かなり弁が変形し，形式的には上記存



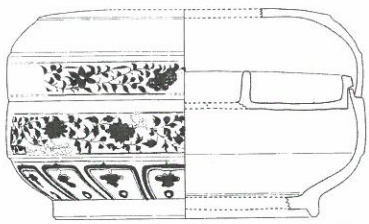


e





f



g

6.青花花唐草文蓋罐　景徳鎮·珠山遺跡出土
7.青花蓮花唐草文蓋罐　江西·朱盤烋墓(1437年)出土
8.青花牡丹唐草文蓋罐　広東·羅亨信墓(1457年)出土
9.青花携琴訪友図罐(部分)　北京市文物研究所
10.青花人物文罐(部分)　大阪市立東洋陶磁美術館
11.青花花文盒　Adam Malikコレクション
12.青瓷雷文帯碗　トプカプサライ博物館
13.青花花唐草文碗　国立故宮博物院

続期間内でも後半の時期が推定されよう。

同じく雷文帯で，体部の内外に刻花蓮花唐草文を配するタイプのうち，[h]（51図1）は，トプカプサライ博物館蔵鉢〈12〉(TKSと略記，15/9,No.517，口径33cm)に法量および施文が類似する。こうした文様構成は，宣徳期の青花宝相華唐草文碗（国立故宮1984）と類似している〈13〉。明初の青花碗の唐草文様は，ほとんど宝相華と牡丹文で占められ，蓮華文のみの唐草文はみいだせない。竜泉窯において，宣徳ないしその直後に，直口で，腰を張る青花碗の器形とともに，宝相華を蓮華文に変えた模写と推定したい。

雷文帯碗のなかで，もう一つ注意されるのは，内外面ともに印花文によって飾られた（28図32,33）に代表される一群である。口縁内外の雷文帯は，反転連続形で，内側面に蓮花唐草文，内底には花・鳥文など，いずれも型によって押印されている。そのなかで，[i]の内側面には花文の間に人物が挿入されているが，青瓷碗において人物を施文する意匠は元代にはみられず，明代になって取り入れられた構図のようであり，これを主文とする故事文（人形手）の意匠をうかがわせる。

青瓷故事文碗には，紀年銘共伴資料があり，1つは湖北・京山県梭羅河の弘治15（1502）年陳恩礼夫妻墓（朱伯謙1998，No.263，口径14.5cm）〈14〉，他は江蘇・淮安県の王鎮夫妻墓であり，1495-1505年の間に葬年が求められる。したがってこれらは，15世紀後半・末から16世紀前半に生産年代が推定できる。他に故事文碗はかなり多数があり，龍泉青瓷博物館（浙江文物局1998），故宮博物院（浙江軽工業庁1966，No.69，口径17.5cm），バッハロー博物館(Hochstadter. W.1946），東京国立博物館（TG2372,口径18.1cm），伝石川県小松市波佐谷出土の東京国立博物館（陶磁1336，口径17.8cm）などの各蔵品をあげておきたい。これらの意匠は，「孔子憶顔回」「韓信武志才」「李白功書巻」「真子破棋開」などの故事題材の意匠と銘文がみられる。簡略化されているものでは「牛氏」「真女」「伯皆」などの文字の横に，それぞれの故事文が型押しされ，碗心の花文内に「福」「孜」「寧」「紅」「高」など1字，あるいは鹿文などとの組み合わせ文がみられる。

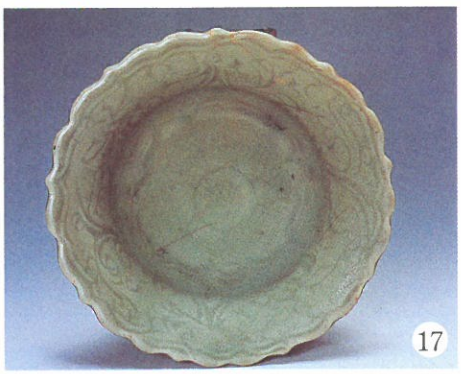
（33）は，こうした故事文と比較して，人物が唐草文の間に単体で挿入されているだけであり，銘文もなく，故事文とはあきらかに意匠を異にしている。しかし，この内側面の主文様の内容をのぞくと，印花雷文帯・内底の印花文，および直口の器形をふくめて共通した要素が看取でき，これが後に定型化した故事文碗への先駆となる意匠ではなかろうか。なお，故事文碗は，竜泉大窯yt5から発見されている（浙江省博物館蔵，981013実見）。

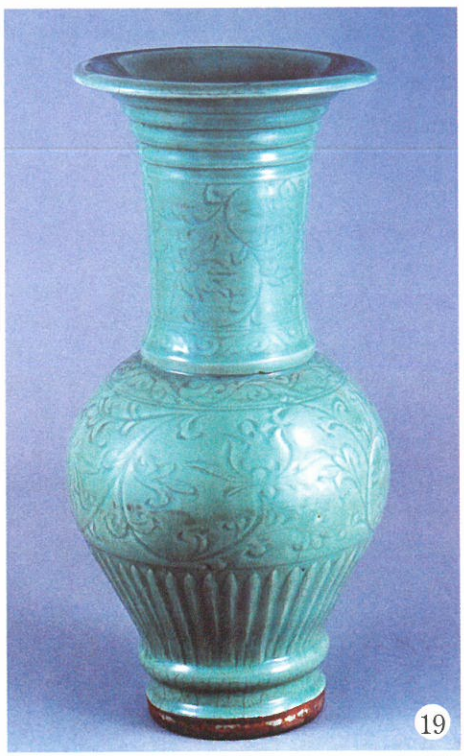
②青瓷盤；検出された青瓷盤の類例は，いくつか確認でき，例えば（42図2）は，トプカプサライ博物館TKS15/1054（No.341），（42図3）は,同TKS15/910（No.256），（43図7）は,同TKS15/298（No.292）,あるいは15/189（No.295），（44図21）は,同TKS15/36(No.462)にそれぞれ類似し，図録編者のR.Krahlは，いずれも15世紀（前半）の年代を想定している（Krahl.R, 1986）。また，同じように[j](43図7)については，内底の印花文を花文ではなく，古銭文とする同タイプの寧波博物館品（朱伯謙1988，No.269，口径41cm）を〈15〉，明代，おそらく前半と考えられている。この他，同様な青瓷盤の年代を明代前半に想定することに，内外の見解に大きな異論はないようである。

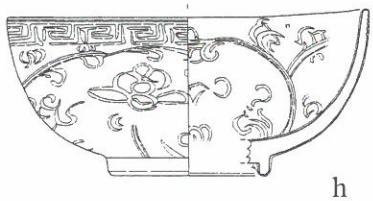
しかし，これには明確な根拠が必ずしもあるわけではなく，青花瓷の文様との類似性，元あるいは明初のタイプとは異なるとする漠然としたもののようである。元代の盤，例えば，新安沈船引き揚げ品と比較すると，釉色においては，青みが少なくなり，黄色みをおびた緑を基調とすること，施文においては，個々の文様が小型になり，単体での表現よりも，組み合わされて絵画的な細かさがあり，彫りが浅くなる。貼花文はほとんど姿を消して，印花文が多用され，また全体のつくりに厳しさ，鋭さがなくなり，例えば稜花盤の輪郭線が，丸みをおび，体部側の内側線も緩やかになる。

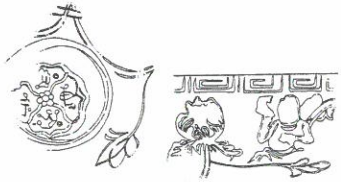
しかし，こうした指摘は，これ自体つねにあいまいさを伴っている。元代との明瞭な相違にも見えそうな，施釉方法においても，高台畳付き露胎は少なくなり，輪状釉剥が増加するが，これも元代にすでに一部ではみられ，また明代に多くなる臥足高台も元代から始っている。上記の青瓷碗については，青花との文様などの類似性をもって年代推定が可能と考えているが，盤においては，青花との文様の共通性は探しだしえない。印象として，明代の洪武期ではなく，永楽・宣徳～天順ではないかと推定するにすぎない。

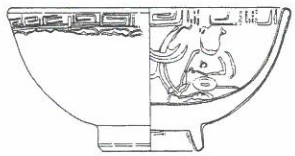
しかし，元代盤との差異を客観的にのべることが，まったく不可能ではなく，わずかに以下の点で指摘できる。直口盤の場合，口径を1としたときの高台径の比率が，新安海底引き揚げ品7例でみると，0.61-0.70であるのに対して，SK01品3例は0.50-0.54と，高台径が小型化し，低く，より中心に近い位置につけられる。口縁部の特徴として，新安例では，わずかに外反させるか，端部は体部の厚さを維持しているのに対して，SK01品は外反する場合も肥厚させる。南京中華門外発見の永楽5(1407)年の宋晟墓出土の印

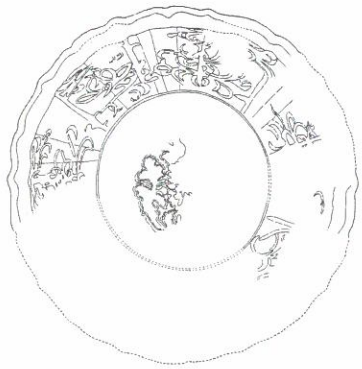


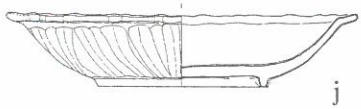


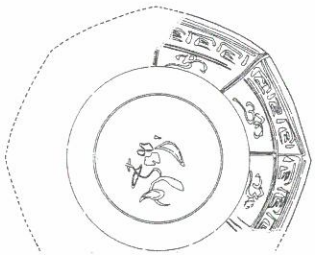


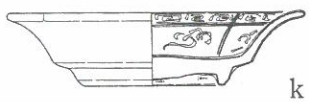


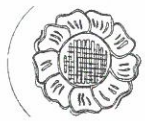


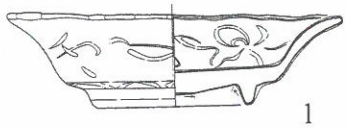












14.青瓷印花故事文碗　湖北·陳恩礼夫妻墓(1502年)出土
15.青瓷稜花古銭文盤　寧波市博物館
16.青瓷八角盤　トプカプサライ博物館
17.青瓷稜花皿　江西·魏源夫妻墓(1444年)出土
18.青瓷蓮華文瓶(1454年刻銘)　デビッド財団美術館
19.青瓷蓮花唐草文瓶　広東省博物館

花文盤の口縁が肥厚し（朱伯謙 1998，No.270），同じく永楽16(1418)年に葬られた南京市中華門外の西寧侯夫人葉氏墓出土の印花四羯文盤も同じ形状を呈し，高口比率も0.52である（朱伯謙1998，No.271）。外底部に環状の釉剥ぎをいれるが，新安例では，高台内側に接する位置にほぞく，ほぼ正円形であるのに対して，SK01では，やや内側に入れ，太くかつ不正円形の例が多くなり，上記葉氏墓品も同じ状態である。

折口の場合，SK01では内面に櫛ないし篦による放射状文＋印花文がおおいが，新安例では櫛目放射文はみられず，SK01の篦文は，その間隔が粗であり，内底中央の刻花文は少なく，印花文である。折口の断面凹形が，新安例は深く，SK01では浅く，端部を引き上げてはいるが，平縁に近い形態である。高口比は変化しない。釉剥ぎのやり方は，直口盤と類似している。盤については，元代との差異はこうした断片的な指摘に終らざるを得ない。

青瓷八角盤[k]（41図5）はいずれも口縁に反転雷文と花卉文をいれ，内底は印花花文の小型品である。トプカプサライ博物館品〈16〉（TKS15/419, No.366, 口径35cm，出光美術館1990，No.10）やPDF271（口径22.0cm）は，花卉文が丁寧であり，内底は刻花古銭繋ぎ文，前者の外面に蕉葉文を刻む大型品であり，形式的には先行する。SK01品は，雷文からみると，15世紀前半と考えられる。

小型盤である稜花外反皿[l]（41図1－3）は，内外面に刻花文をいれ，法量が少し大きく（口径15cm前後），15世紀後半以降に一般的になる文様が簡略化され，外面の文様を省略したもの（口径13cm前後）とは異なり，その祖形と推定できる。同巧例が，江西・永修県黎家山正統９（1444）年の魏源夫妻墓から出土し（口径12.7cm，考古1973-5）〈17〉，さらに景徳鎮窯製青瓷とみられる「大明宣徳年製」銘の稜花皿が，故宮博物院（国立故宮1988，No.69，口径8.7cm），上海博物館（番号不詳），大和文華館（大和文華館1991）などにあり，珠山御窯廠関連遺跡からも発見されている（香港芸術館1989）。この形態の皿は，やはり15世紀前半と考えられている口径20cmこえる盤（TKS15/578,No.395，口径22.5cm）を小型化した共通性がある。

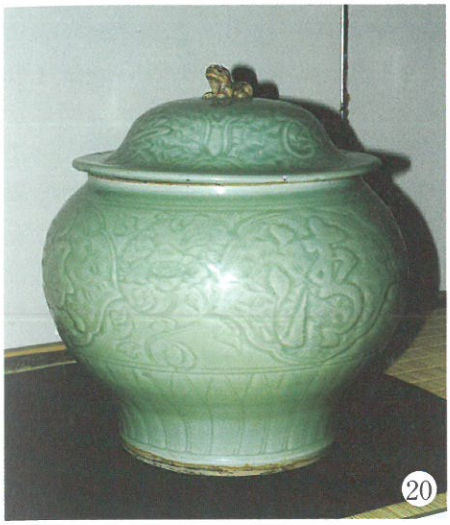
③青瓷刻花牡丹文瓶[m]（50図1）；この瓶は（器高62.7cm），元代と推定されているもの，例えばトプカプサライ博物館TKS15/672(No.206)器高46cmと比較すると，胴部に張りがすくなく，スリムであり，頸部は太く，短く，腰のしぼりがみられない。頸・胴部にめぐる牡丹唐草文は浮き彫りにされ，腰の蓮弁先端は丸みをおびている。

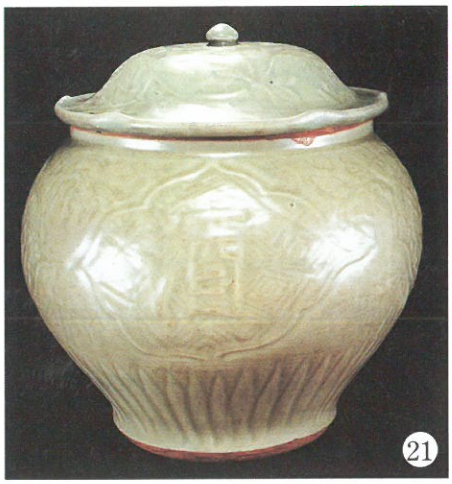
こうした特徴をもつ瓶として，PDF（No.238）蔵の景泰５（1454）年刻銘品があげられる（器高70.5cm）〈18〉。共通している特徴は，スリムな胴部の形態，下底ちかくの皿嵌入部の外面に突帯をめぐらすこと，頸部の款銘部をのぞいて，文様構成（牡丹唐草文+痩身蓮弁文）が同じであり，若草色の釉薬が掛けられていることである。とくに，下底ちかくに突帯をめぐらすことは，元代と考えられている上記のトプカプサライ博物館蔵品や，同じくPDF237の泰定4（1327）年刻銘品（器高44.0cm）にはみられない特徴である。逆に15世紀前半のPDF(No.239)の宣徳7（1432）年刻銘青瓷瓶にみられ，鎌倉・建長寺伝世品（鎌倉国宝館1987），広東省博物館〈19〉（広東省博1991，No.102，器高53cm），ストックホルム東アジア博物館（No.149，器高62.5cm，ストックホルム博1976），ジャカルタ国立博物館（No.1652，器高51.0cm，ジャカルタ博1977）などの各蔵品にみられ，これらは施文構成や彫法も共通し，明代前半期の青瓷瓶の指標として指摘できる。この腰部突帯は，底皿嵌入の近くにあるが，直接それとの技術的な関係はみられない。しかもその後と考えられる瓶にも突帯は消えており，15世紀前半代に限定できる特徴として理解したい。

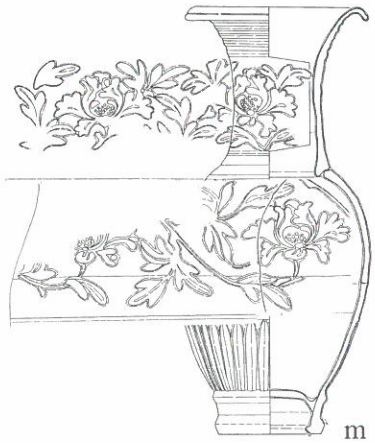
④酒海壷；元代の，例えば，新安海底引き揚げの酒海壷の特徴は，頸部が相対的に長い立ち上がりをもち，胴上半部で半球状に張り出させ，鎬文壷の場合は腰をつよくしぼっている。これに対して，「清香美酒」銘品をはじめとしてSK01から検出された酒海壷に共通する特徴は，頸部の立ち上がりが短く，胴部の張りが小さい。蓋に反りをいれる場合は，元代では大きく反転させているのに対して，SK01品は，反り幅が非常に小さく，端部をつまみ上げる程度である。

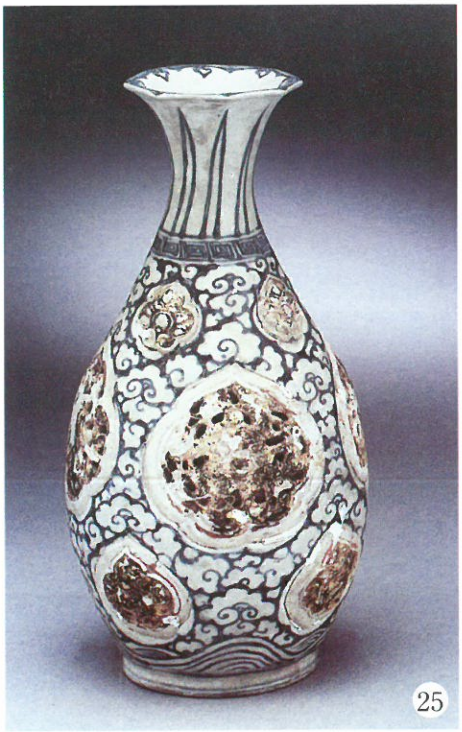
「清香美酒」銘品[n]（46図3，器高26.3cm）の類品をさぐると，ふくい藤田美術館品（ふくい藤田1997，総高35.0cm）が〈20〉，鉄釉獅子形鈕を付け，同一文字をいれた蓋とあわせてよく類似している。東京国立博物館の広田松繁コレクション品（TG2510, 器高35.6cm）も，開光部内の書体，その間に花実など四季花図，先端が尖り，細めの蓮弁文，短い頸部など共通している部分が多い。他に，故宮博物院〈21〉（器高33cm，朱伯謙1998，No.247），マリク・コレクション品（器高33.5cm，Adhyatman S.1980，No.20）にも鉄釉獅子型鈕蓋がつき，バウアー・コレクション品は（器高33cm,Baur1968, A108），同形の蓋をもち，胴部には開口部の替わりに縦区画内に文字と果実文を配している。

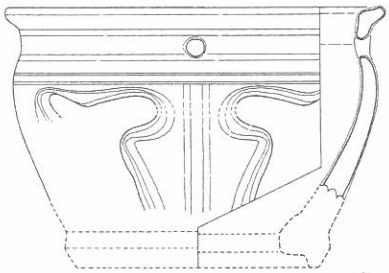
トプカプサライ博物館にも類似の蓋がみられる(TKS15/49,No.538)。文様の細部は異なるが，いずれ

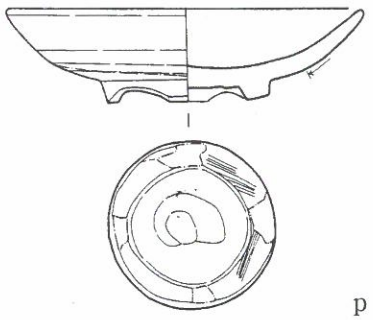












20.青瓷「清香美酒」銘酒海壷　福井藤田美術館
21.青瓷「清香美酒」銘酒海壷　故宮博物院
22.青花花盆　トプカプサライ博物館
23.青瓷線刻細蓮弁文碗　群馬·上栗須寺前遺跡SK5921出土
24.白瓷角杯　群馬·上栗須寺前遺跡SK5921出土
25.青花貼花文瓶　ベトナム·ホイアン沖海底引き揚げ品

も器形は，上記の特徴をもち，明代前半期と考えられている。なお，同様な施文・釉調の「清香美酒」銘瓶がV&A(FE.34 -1972)，トプカプサライ博物館（TKS15/671，No.371）にある。

SK01検出の他の酒海壷では，（47図7）がトプカプサライ博物館品（TK15/49，No.540，器高）と，牡丹唐草文や底部の作りが似ており，15世紀に位置付けられている。東京国立博物館(TG712，器高18.5cm)と肩の蓮弁文の有無をのぞいて共通している。

⑤青瓷花盆[o]（54図5）は，素文の鍔状口縁で，開光部の透かしの形状・施文が鈍いつくりである。口縁は稜花形につくる例がよくみられ，V&A(c234-1938，器高17.1cm)品では，7稜花·5個所の穿孔で，透かし部分には二重線によって力強い刻文がみられ，台部の切断面や施釉を勘案すれば，これを元代のものと考えたい。東京・八王子城址要害部採集破片（八王子市郷土博物館）や，ジャカルタ国立博物館品（No.2217，器高17.0cm，ジャカルタ博1977）は，これに類似し，線刻文が太く明瞭であり，稜花口縁で，つくりが丁寧である。それに対して，東京国立博物館(TG518,器高16.3cm)，トプカプサライ博物館TK15/68(No.542，器高15.5cm)〈22〉，内モンゴル平地泉行政区察右前旗土城子村古城出土品（文物1957-4）は，稜花形口縁につくり，線刻文もみられるが，いずれもやや鈍く，SK01検出品もこの範疇にぞくし，明代の14世紀後半から15世紀前半と考えたい。

3．白瓷

SK01検出の白瓷では，碗（66図2-6），小皿[p]（67図16-18-20）・杯（67図22-24）をとりあげる。これらは胎土・釉調がよく似ており，わが国の遺跡から，この組み合せで出土しているが，中国での良好な出土例に接しえない。

わが国のおもな出土遺構をあげると，千葉・篠本城跡では，この小皿17点が，常滑9-10期，古瀬戸後期様式などと共に検出され，15世紀前半期に遺物のピークがある（道沢明1998）。函館・志苔館遺跡では，量は多くないが碗・杯・小皿が，15世紀前半と推定されている珠洲焼と組み合わされ（鈴木正語1986），十三湊遺跡でも類似した様相をみせているようであり，いずれも15世紀中葉に廃絶したとされる断片的な史料もこれを補っている。碗は腰を丸く張り，高台畳付を幅広く削り，釉薬が白濁色に呈発する，ビロースクタイプと呼ばれている一群であり，従来14世紀に出土例が多いとされている。

群馬・上栗須寺前遺跡のSK5921土壙からは，白瓷・小皿3，角杯5，青瓷・細蓮弁文碗1，蓮弁文皿1，印花文皿1が，銅製・火舎1，柑子口花瓶1と一括埋納された状態で検出されている（群馬県教委1996）。このなかで，年代の指標となる青瓷線刻細蓮弁文碗は〈23〉，半円弧を口縁に連続して線刻し，縦線をいれることによって蓮弁文につくる施文方法である．こうしたタイプは，15世紀中葉を上限とすると考えており，標識遺物として，山梨・新巻本村出土品をあげた（亀井明徳1980）。しかし，SK5921出土碗の蓮弁形をこまかくみると，2弁単位のやや幅の広い形であり，上記線刻細蓮弁形式にみる，口縁に沿って山形文を連続線刻し，細い弁とする形とは異なっている。これは，竜泉安福窯など竜泉地域に生産地が求められ（考古1981-6，図版12-4），類似した施文は，広東・恵陽白馬山窯においてもみられる（考古1962-8，pp.414-415）。さらに興味深いのは，さきに青花碗でふれた15世紀前半と推定するフィリピン・パンダナン島沖沈没船から，これと類似した蓮弁文の青瓷碗が発見されている（森村健一1996）。したがって，このSK5921土坑から出土した白瓷小皿・角杯〈24〉も15世紀前半の年代と推定する。

4．小結

以上，青花・青瓷・白瓷などについて述べたが，ここでSK01出土陶瓷器の年代についてまとめておきたい。

まず青花瓷の年代について，碗は，永楽・宣徳期民窯の産品と報告されている南京・明故宮玉帯河出土例に非常に類似し，紀年銘墓共伴資料では，景泰・天順年間に類似した要素がある。牡丹文罐の主文は，宣徳期のそれと共通した要素が看取でき，小型罐については，正統年間の朱盤烋墓や，広東の天順年間墓，梅瓶・獣首瓶の施文は宣徳ー天順期とみられる。

このように，15世紀前半から中葉に比定できる青花が多いが，人物文盒は，元代至正様式である。また，高足杯や五彩菊花文碗は，元代窖蔵出土品とは異なるが，前者は，南京・洪武1379年墓に類似し，後者は永楽ー宣徳年間と推定できる。こうした15世紀前半の陶瓷器組成のなかで，至正・洪武様式が一定の割合で混在することは，南京・宋晟墓（永楽5・1407年）など，明確な例だけでも数件は指摘できるところであり，むしろ随葬遺物あるいは消費地におけるノーマルな存在形態として，通常の状況といえよう。したがって，SK01出土の青花瓷の年代は，15世紀前半から中葉の間，すなわち，永楽から天順の間と推定する。

青瓷の年代について，量的に多い刻花雷文帯碗は，14世紀中葉ー15世紀前半の年代であり，SK01出土品は，ラマ式蓮弁文がかなり変形し，上記存続期間内でも後半の時期が想定される。雷文帯で刻花蓮花唐草文

をめぐらす碗は，宣徳期の青花宝相華・牡丹唐草文碗のモチーフとの共通性が看取できる。盤は，トプカプサライ博物館などに同巧例があり，それらは15世紀前半の年代が想定されている。元代盤とは，釉調・施文・焼成方法などにおいて，異同点が指摘できるが，必ずしも明確とはいえない。しかし，直口盤の高台および口縁形態は，15世紀初めの宋晟墓出土資料に類似し，稜花外反皿は，江西・永修県黎家山正統９（1444）年の魏源夫妻墓や，「大明宣徳年製」銘の稜花皿に類似している。

刻花牡丹文瓶は，PDF（No.238）所蔵の景泰５（1454）年刻銘品に類似し，下底ちかくの皿嵌入部の外面に突帯をめぐらす特徴をもち，同じくPDF(No.239)の宣徳7（1432）年刻銘青瓷瓶にもみられ，いずれも15世紀第2四半期前後である。「清香美酒」銘品など酒海壷は，頸部の立ち上がり，胴部の張り，蓋の反りの形態などの点において，元代の形態とは異なる。青瓷花盆についても，稜花口縁ではなく，鈍い刻花文である点は，元代の製品とは考え難い。

次に白瓷については，碗・小皿・杯は，わが国の遺跡から，この組み合せで出土し，群馬・上栗須寺前遺跡のSK5921土壙の一括遺物にみられるように，共伴する青瓷碗は，15世紀前半であり，他に15世紀中葉までに消滅した史料をのこす城館址の出土例がある。

この他に，考察をくわえる資料をもたないが，仙盞瓶形の紅釉・藍釉品も，必ずしも元代に限定されるわけではなく，明代前半に位置づけられる可能性も十分にある。ベトナム青花瓷・タイ褐釉陶器などについては，考察の力をもたないが，この年代幅のなかで大きな矛盾は生じないと考える。

これらの青花・青瓷・白瓷と同じような組合わせをもつ遺構が，福井県吉田郡永平寺町の興行寺遺跡の第2遺構面である（冨山正明1993）。京の内出土品と類似しているものを括弧内でしめすと，青瓷では，雷文帯蓮弁文碗（京の内報告25図1-16）・刻花蓮弁文碗（23図2-16）・印花文碗（30図1-32図27）などと，雷文帯と人物文などを印花で施文した碗（28図33），粗い鎬文盤（45図28）および櫛描文盤などが検出されている。白瓷では，碗（66図1）・小皿（67図16-20）・角杯（67図23·24）などがあり，青花宝相華唐草文碗（57図1-9）にそれぞれ類似している。しかも，この遺構面は，炭化物の堆積する火災後の整地面であり，史料によって応永13（1406）年の創建から5年後の寺の移転の間，ないし1440年代の再移転頃の可能性がある。首里城京の内SK01を15世紀前半と位置づける傍証として掲げたい。

以上，青花・青瓷・白瓷を通じて，その年代について15世紀前半から中葉において，生産・使用された組み合わせと結論する。調査者である金城亀信氏は，SK01遺構の年代について，『蔡温本 中山世譜』記載の志魯・布里の乱（1453年）および，『明実録』記載の1459年の王府失火による，いずれも王庫焼失の記事に基づき，その下限を1453年から1459年に求めている。私は，陶瓷器の年代考定から，この結論を支持し，15世紀前半・中葉における外銷地における中国陶瓷器の存在形態と結論したい。

どの遺跡においても，ある程度の年代設定が可能な陶瓷器は，全体の出土品のなかで少数であり，そのなかで組み合わせによって，年代の蓋然性を求めているわけである。とりわけ明代前半については良好な基準的な資料は無いといってもよく，その意味で，本SK01検出の陶瓷器を，15世紀前半の基準資料としての仮説を提示し，他の出土例などの出現によって，加筆・修正されればよいと考えている。SK01検出品は，その素材として十分の価値を有していると確信する。

［参考文献］

※出光美術館1984；出光美術館編『陶磁の東西交流』190図No.126·127，出光美術館，東京

※大阪東洋1995；大阪市立東洋陶磁美術館編『皇帝の磁器－新発見の景徳鎮官窯』No.61，大阪市立東洋陶磁美術館，大阪

※大阪東洋1997；大阪市立東洋陶磁美術館編『東洋の染付』No.3，大阪市立東洋陶磁美術館，大阪

※沖縄県教委1998；沖縄県教育委員会『首里城跡－京の内跡発掘調査報告書（Ⅰ）』沖縄県教育委員会，那覇

※小野正敏1982；小野正敏「15·16世紀の染付碗，皿の分類とその年代」貿易陶磁研究2，pp.71-87，日本貿易陶磁研究会，東京

※鎌倉国宝館1987；鎌倉国宝館編『特別展・青磁の美』No.23，鎌倉国宝館，鎌倉市

※亀井明徳1980；亀井明徳「日本出土の明代青磁碗の変遷」『日本貿易陶磁史の研究』所収，pp.298-334，同朋舎出版，1986，京都

※広東省博1992；広東省博物館編『広東省博物館蔵陶瓷選』No.102，No.121，文物出版社，北京

※群馬県教委1996；『上栗須寺前遺跡群Ⅲ』3区－藤岡市上栗須寺前，第１分冊，pp.448-456，群馬県教育委員会他，前橋市

※景徳鎮陶瓷研1992；景徳鎮市陶瓷考古研究所他編『景徳鎮出土陶瓷』香港大学馮平山博物館，香港

※鴻禧美術館1992；鴻禧美術館編『天民楼青花瓷特展』No.16，口径11.5cm，鴻禧芸術文教基金会，台北

※国立故宮1984；国立故宮博物院編『明代初年瓷器特展目録』

No.27，国立故宮博物院，台北
※国立故宮1998；国立故宮博物院編『明代宣徳官窯青華特展図録』国立故宮博物院，台北
※国家文物局1995；国家文物局主編『中国文物精華大辞典ー陶瓷巻』No.565，上海辞書出版社，上海
※周鑾書1998；周鑾書主編『中国歴代景徳鎮瓷器　明巻』pp.144，中国攝影出版社，北京
※ジャカルタ博1977；アブリド編『東洋陶磁大観3・ジャカルタ国立博物館』講談社，東京
※朱伯謙1998；朱伯謙主編『龍泉窯青瓷』芸術家出版社，台北
※鈴木正語1986；鈴木正語他『史跡志苔館跡』函館市教育委員会，函館
※ストックホルム博1976；ブ・ユリアンスヴアッド編『東洋陶磁大観9・ストックホルム東アジア博物館』講談社，東京
※浙江軽工業庁1966；浙江省軽工業庁他編『龍泉青瓷』文物出版社，北京
※浙江文物局1998；浙江省文物局編『中国竜泉青瓷』No.145，器高8.1cm，浙江攝影出版社，杭州
※東博1990；東京国立博物館編『東京国立博物館図版目録・中国陶磁篇Ⅱ』，東京国立博物館，東京
※富山佐藤1999；富山佐藤美術館編『フィリピンにわたった焼きものー青磁と白磁を中心に』富山佐藤美術館，No.140·141，富山市
※冨山正明1993；冨山正明「福井県興行寺遺跡出土の陶磁器」貿易陶磁研究No.13，pp.127-133，日本貿易陶磁研究会，東京
※ふくい藤田1997；ふくい藤田美術館編「中国青磁の名品展目録」，総高35cm，財団法人ふくい藤田美術館，福井（同館から写真提供）
※香港芸術館1979；香港東方陶瓷学会編『東南亜瓷與中国出口瓷』No.138，香港東方陶瓷学会，香港
※香港芸術館1989；香港芸術館編『景徳鎮珠山出土永楽宣徳官窯瓷器展覧』No.67，香港市政局，香港
※香港芸術館1995；香港芸術館分館茶具文物館編『出藍寶色浮ー羅桂祥基金捐贈中国陶瓷』No.13，香港市政局，香港
※香港中文大1989；香港中文大学他編『広東出土五代至清文物』No.75，広東省博物館他，香港
※南京博物院1976；「南京明故宮出土洪武時期瓷器」文物1976-8，pp.71-75,
※南京博1981；南京博物院他編『南京博物院展』No.115，名古屋市博物館他，名古屋
※馬希桂1999；馬希桂『中国青花瓷』205図，上海古籍出版社，上海
※森村健一1996；森村健一「フィリピン・パンダナン島沖沈没船引き揚げ陶磁器」貿易陶磁研究No.16，pp.111-125，日本貿易陶磁研究会，東京
※道沢明1998；道沢明「千葉県篠本城跡の発掘と出土陶磁器」貿易陶磁研究No.18，pp.113-124，日本貿易陶磁研究会，東京
※矢部良明1974；矢部良明『元の染付（陶磁大系41）』No.62，平凡社，東京
※大和文華館1991；大和文華館編『大和文華館所蔵品図版目録7』No.139，大和文華館，奈良市
※葉佩藍1998；葉佩藍『元代瓷器』九洲図書出版，北京
※梁白泉他1996；『朱明遺萃ー南京明故宮出土陶瓷』No.73-94，南京博物院・香港中文大学文物館,香港
※和歌山市1997；和歌山市教育委員会編・発行『和歌山市加太友ヶ島沖出土の陶磁器』No.81，和歌山市
※Addis.J.M.1979; Addis.J.M. *Chinese Porcelain from the Addis Collection,* British Museum Publication, London
※Adhyatman S.1980; Sumarah Adhyatman *Koleksi Keramik Adam Malik,* No.34,The Ceramic Society of Indonesia, Jakalta
※Baur1968; Ayers J.*The Baur Colleétion, Geneva -Chinese Ceramics vol.one,* Collections Baur-Genéva,Geneva
※de Young Museum1967; *Avery Brundage Collection Chinese Ceramics,* pp.109, de Young Memorial Museum, San Francisco
※Hochstadter.W.1946; Hochstadter.W*Early Chinese Ceramics in the Buffalo Museum of Science,*No.61, 口径18.2cm, New York
※Hoi An 2000; *Treasures from the Hoi An Hoard,* No.203-213, Butterfields Auctioneers Corp, San Francisco
※Krahl.R,1986; Krahl.R,& Ayers J. *Chinese Ceramics in the Topkapi Saray Museum*I, Sotheby's Publications,London
※Lee.J.G.1950;Lee.J.G. *Ming Blue and White,*No.8,The Art Institute of Chicago,Chicago
※Peralta.J.T.1982; Peralta.J.T.*Kayamanan-Pottery and Ceramics from the Arturo de Santos Collection,* No.54, Manila

琉球の対外貿易路と京の内跡出土の陶磁器の流れ

（但し、粉青沙器については、首里城跡下之御庭他での出土）

用語解説

首里城（しゅりじょう）Shuri Castle:

県内最大のグスクで、伝承によると14世紀頃に察度が築城し、琉球処分（1879年）までの約500年間琉球王国の王宮として機能した。標高100～135mの琉球石灰岩の丘陵上に位置し、グスクの規模は、東西370m、南北213m、面積46.167㎡。首里城は、大きく外郭と内郭で構成され、外郭には正殿の歓会門や久慶門、継世門を開き、内郭には瑞泉門、美福門、淑順門、白銀門、右掖門などを設け、正殿、南殿、北殿などの木造瓦葺きの諸宮殿など政治の中枢的な施設を建立した。正殿跡の遺構確認調査（基壇は、第Ⅰ期から第Ⅴ期までが重複）で、第１期基壇は14世紀代に位置づけられている。

京の内（きょうのうち）Kyonouchi:

「京の内」は、首里城内郭の南西側に位置し、場内で最も神聖な空間。京の内の語義として、「けお」は「セジ」（霊力）の同義語と考えられ、“神または神の霊力”の意味を持つ。また、民俗学では、神が降臨する大岩の頂上や岩島・小島を「京：きょう」と称している事例などから、京の内は、神が降臨する聖なる場所と考えられる。首里城発祥の地ともいわれ、京の内には、首里森御嶽、真玉森御嶽の他に“京の内之三御嶽”と称された三つの御嶽があった。首里森御嶽を中心に、降臨神であるキミテズリの神を迎えて琉球王国の歴代国王の即位決定をはじめ国王への託宣など、王国の重要な祭祀が執り行われた。

御嶽（うたき）Utaki:

村落の背後丘陵上にある拝所のことを御嶽と称し、村を愛護する祖霊神、島守神、ニライ・カナイなどと関係する聖域のこと。沖縄諸島では、御嶽同義語のムイ、ウガン、グスク、宮古諸島ではスク、八重山諸島ではオン、ワー、スクなどと呼称してきた。首里城内の御嶽について『琉球国由来記』（1713年）には、９御嶽が掲載されている。

青磁（青瓷 せいじ）Celadon:

磁器の一種。素地と釉薬の中に含まれる鉄分が、※還元焔焼成によって青く発色した磁器。中国の殷周・戦国時代の灰釉陶器がその源流とされ、後漢三国時代の浙江省方面で製作された古越磁が最初の原始的青磁であるとされる。日本や沖縄で出土する青磁の多くは、元代から明代にかけて浙江省の龍泉窯及びその周辺で製作されたものである。

※還元焔　炭素が多く酸素が欠乏している不完全燃焼の焔。酸素に富み完全燃焼の焔を酸化焔という。

白磁（白瓷 はくじ）White Porcelain:

磁器の一種。白色の素地に透明釉をかけ、高温で焼成した磁器。白磁の起源についてはまだ明確になされていないが、その起源は灰釉陶器や古越磁とされる。原始的な白磁が誕生したのは、６～７世紀の隋から初唐とされる。沖縄で出土する白磁には、希に定窯で制作されたものがみられるが、大部分は景徳鎮や中国南部の諸窯及び徳化窯を産地とする。

青花〈染付〉（せいか）〈そめつけ〉Blue and White China:

磁器の一種。いわゆる染付で、中国では一般に青花(青花白瓷・釉裏青)と称する。白色の素地に※コバルトを含む※呉須により絵付けを施した後に、透明釉を掛けて焼成する。還元焔焼成により白地に青い文様が浮かび上がる。中国でのコバルトの使用は唐時代にみられるが、釉下に絵付けする手法を用いたのは宋時代以降であり、元時代に完成する。青花の主な生産地として景徳鎮及び周辺諸窯が上げられるが、明・清代には中国南部の各地に粗製の青花を生産する民窯が出現する。また、周辺諸国では中国の影響をうけて、ベトナムでは安南染付が、朝鮮では李朝初期から染付の製作が開始される。

※コバルト　呉須などの天然の鉱物などに含まれる化合物で、青の彩料として用いられる。

※呉須　コバルト化合物を含む天然の鉱物をさす。これを極細末にして水で溶かし、文様を描いた後に上から透明釉を掛けて焼き上げると藍色に発色する。

紅釉（こうゆう）Copper-red Glaze:
銅を発色剤に使用し高火度で焼成された磁器。銅紅釉・辰砂釉とも呼ばれる。還元焔焼成により鮮紅色に発色する。中国では宋代に始まったとされるが遺品は元代が初出である。景徳鎮窯が主に宮廷御器を焼造し、明・清代を通じて官窯の特技として製作された。

瑠璃釉（るりゆう）Bright-blue Glaze:
酸化コバルトを長石に混ぜた着色料を使用した色釉。高火度で焼成すると青く発色する。ほぼ全面に施釉した場合に称される。主に磁器に用いられることが多い。日本や沖縄で出土する瑠璃釉の多くは景徳鎮及び中国南部の徳化窯で生産されたものである。

褐釉（かつゆう）Brown Glaze:
広義では鉄分を呈色剤として褐色になった陶器も含まれるが、陶磁史からみた場合には、中国漢代に栄えた酸化鉄を呈色剤とする低火度鉛釉のことを指し、その陶器を褐釉陶と称する。沖縄で出土する褐釉陶器は、中国南部の広東省やタイで生産された12世紀以降の資料である。

陶器（とうき）Earthenware,Crockery:
広義では磁器や炻器、または土器をも含めたやきもの全般の総称に使われる場合が多いが、狭義では素地が十分焼き締まらず吸水性があり、不透明なやきものに限定して使う。粘土を主原料として焼成し、釉薬を掛けるものと、掛けずに焼き締めたものがある。磁器との境界は連続的であるため明確な区別はない。磁器に近いものから硬質陶器・精陶器・粗陶器に分類する。また、原料により石灰質陶器・白雲石質陶器・長石質陶器などに分けられる。

磁器（じき）Porcelain:
素地は白色で、半透明で吸水性のない硬いやきものを指す。陶石を主原料とし、長石・石英などを配合して素地とする。素焼きした後に施釉し、1100～1500℃の高温で焼成する。中国漢代末に始まったとされ、宋代に完成された。

瓦質土器（がしつどき）Ga ware:
内外両面が灰黒色の瓦質の軟質土器を指す。近畿地方で平安時代から室町時代にかけて生産されたいわゆる「瓦器」とは区別して、沖縄では、湧田窯(16～18ｃ)で生産されたものを言う。

五彩（ごさい）Polychrome:
中国明朝において完成した上絵付けで、その技術及び製品を指す。高火度釉の白釉陶・白磁を素地に、赤・黄・緑などの明るい上絵具を焼付ける。焼き上げられた絵具は透明で素地が透けて見え、冷たく硬い印象を与える。この技術は、中国金代12世紀後半に華北の磁州窯が始まりで、明代の嘉靖・万歴、また、清朝の康熙官窯などで盛んに焼かれた。日本では赤絵または色絵とも言う。

合子（ごうす）Lidded Box:
蓋のある小型容器の総称。身と蓋を合わせるの意。盒(子)・合とも言う。多くは扁球形で、材質は陶磁器・漆器・金属器などで、用途には香合・化粧品入・薬味入・印肉入などがある。元来は蓋物の身の方を転用したもの。

瓶（びん・へい）Vase:
壺甕類のうち、その最小のものを指す。瓶は元来は水を汲んだり物を炊く器であった。のちに、陶磁の器で口が小さく、胴部の膨らんだものを言うようになった。徳利や花入として使用された。

京の内関連図書目録

参考論文

赤沼多佳「建盞と天目」『唐物天目―福建省建窯出土天目と日本伝世の天目―』茶道資料館，1994年

安里嗣淳・盛本勲「天山陵跡調査の概略」『紀要』第１号，沖縄県教育委員会文化課，1984年

阿利直治「沖縄県石垣市山田平等窯址、慶田川窯址、黒石川窯址」『黒石川窯址』石垣市教育委員会，1993年

有島美江「博多出土のタイ・ベトナム陶磁」『貿易陶磁研究』第11号，日本貿易陶磁研究会，1991年

池田榮史・津波古聡「灰釉碗の話」『沖縄県立博物館紀要』第17号，1991年

伊藤晃「15世紀から17世紀の備前焼」『中近世土器の基礎研究』日本中世土器研究会，1985年

伊波普猷「三、きみよし考―守護神の成長に関する試論」『伊波普猷選集』下巻，沖縄タイムス社，1962年

上原静・島袋洋「首里国学・孔子廟跡の調査」『文化課紀要』第７号，沖縄県教育委員会文化課，1991年

上原静「首里城跡西のアザナ地区出土の明朝系瓦とその推移」『南島考古』第14号，沖縄考古学会，1994年

大川清「琉球古瓦調査抄報」『沖縄文化財調査報告書』1978年

小野正敏「15～16世紀の染付碗、皿の分類と年代」『貿易陶磁研究』No.２，日本貿易陶磁研究会，1982年

亀井明徳「明代華南彩陶をめぐる諸問題」『三上次男博士喜寿記念論文集』陶磁編，三上次男博士喜寿記念論文集編集委員会，1985年

亀井明徳「熊本県城南町出土の青磁資料」『貿易陶磁研究』No.１，日本貿易陶磁研究会，1981年

亀井明徳「先島諸島採集の輸入陶磁」『沖縄出土の中国陶磁（上）―ジョージ・H・ケア氏調査収集資料―先島編』沖縄県立博物館，1982年

金武正紀「沖縄出土のタイ・ベトナム陶磁」『貿易陶磁研究』No.11，日本貿易陶磁研究会，1991年

金武正紀「ビロースクタイプ白磁碗について」『貿易陶磁研究』第８号，日本貿易陶磁研究会，1988年

金武正紀「沖縄における12・13世紀の中国陶磁」『沖縄県立博物館紀要』第15号，沖縄県立博物館，1989年

金武正紀「沖縄出土のタイ・ベトナム陶磁」『貿易陶磁研究』No.11，日本貿易陶磁研究会，1991年

金城亀信「グスク出土の“その他の土器”・“移入系土器”について」『文化課紀要』第７号，沖縄県教育委員会，1991年

金城亀信「青磁ラマ式蓮弁文碗について」『貿易陶磁研究』No.20，日本貿易陶磁研究会，2000年

金城亀信・上原静「首里城京の内跡の釉裏紅」『文化課紀要』第13号，1997年

金城亀信・上原静「48　沖縄県那覇市首里城京の内跡」『日本考古学年報　48』，日本考古学協会，1997年

国吉真勝・金城亀信「玉城村玉泉洞西側風葬址採集の青磁馬上杯について」『具志川村の遺跡』具志川村教育委員会，1986年

杉山洋「褐釉系陶器の受容と展開」『東アジアの考古と歴史　岡崎敦先生退官記念論集　下巻』同朋舎出版，1987年

當眞嗣一・上原静「首里城正殿跡の調査」『紀要』第4号，沖縄県教育委員会文化課，1987年

仲松弥秀「新垣孫一翁よりの聞き書き」『知念城跡・斎場御嶽及び周辺整備基本構想・基本計画』1993年

仲松弥秀（三、来訪神の経路）「南島の海神祭」『古層の村』沖縄民俗文化論，タイムス選書４，沖縄タイムス社，1977年

中山俊彦・當眞嗣一・金城亀信・西平剛「仲栄真グスク採集の青磁馬上杯」『玉城村の遺跡』玉城村教育委員会，1995年

平敷令治「きみてづりのももかほうごと」『沖縄大百科事典』上巻，沖縄タイムス社，1983年

外間正幸「万国津梁の鐘」『写真集　首里城』首里城復元期成会，那覇出版社，1987年

宮城栄昌「三十三君」『沖縄大百科事典』上巻，沖縄タイムス社，1983年

森村健一「畿内とその周辺出土の東南アジア陶磁器―新政権成立を契機とする新輸入陶磁器の採用―」『貿易陶磁研究』No.11，日本貿易陶磁研究会，1991年

森本朝子「博多遺跡群出土の天目」『唐物天目―福建省建窯出土天目と日本伝世の天目―』茶道資料館，1994年

Richard Pearson，1999“TRADE CERAMICS:SHURI CASTLE，OKINAWA”ACRO(Asian Ceramic Research Organization)UPDATE，Chicago

栗建安「福建省の建窯系黒釉茶碗」『唐物天目―福建省建窯出土天目と日本伝世の天目―』茶道資料館，1994年

参考図書

伊藤忠太・鎌倉芳太郎『南海古陶瓷』宝雲舎，1941年

糸数兼治・當眞嗣一・上原静『旧首里城正殿跡位置確認調査報告書』沖縄県教育委員会，1986年

大城慧・金城亀信ほか『我謝遺跡』西原町教育委員会，1983年

大城慧・金城亀信ほか『西表島　上村遺跡』沖縄県教育委員会，1991年

大橋康二『都市計画道路博多駅築港関係埋蔵文化財調査報告博多３』福岡市教育委員会，1989年

沖縄県史編集室所蔵「首里城熊本鎮台沖縄分遣隊配置図」1893年

『沖縄大百科事典』沖縄タイムス社，1983年
『沖縄の文化財Ⅲ　有形文化財編』沖縄県教育委員会，1995年
尾崎直人『タイ・カンボジアの陶磁』福岡市美術館，1996年
加藤三吾『琉球の研究』文一路社，1941年
加藤唐九郎編『原色陶器大辞典』淡交社，1972年
鎌倉芳太郎『セレベス　沖縄発掘古陶瓷』国書刊行会，1976年
木崎甲子郎編著『琉球弧の地質誌』沖縄タイムス社，1985年
金武正紀・宮里末廣ほか『今帰仁城跡発掘調査報告書Ⅰ』今帰仁村教育委員会，1983年
金武正紀・阿利直治『ビロースク遺跡』石垣市教育委員会，1983年
金武正紀・城間千栄子『尻川原遺跡』那覇市教育委員会，1993年
金武正紀・大田宏好『慶田崎遺跡』与那国町教育委員会，1986年
金武正紀・島　弘ほか『御細工所跡』那覇市教育委員会，1991年
金武正紀・城間千栄子『ヒヤジョー毛遺跡』那覇市教育委員会，1994年
金城亀信『与那原遺跡』与那国町教育委員会，1988年
金城亀信・金城透・島袋洋ほか『西表島　慶来慶田城遺跡（重要遺跡確認調査）』沖縄県教育委員会，1997年
金城亀信・黒住耐二ほか『糸数城跡　発掘調査報告書Ⅰ』玉城村教育委員会，1991年
金城亀信・島袋洋ほか『クニンドー遺跡』南風原町教育委員会，1996年
金城亀信『南風原町の遺跡』南風原町教育委員会，1993年
金城亀信・照屋孝ほか『阿波根古島遺跡』沖縄県教育委員会，1990年
金城亀信・岸本義彦ほか『カイジ浜貝塚』沖縄県教育委員会，1994年
金城透・金城亀信ほか『高嶺古島遺跡』豊見城村教育委員会，1990年
湖城清・金城亀信『糸満市の遺跡』糸満市教育委員会，1981年
『蔡温本　中山世譜』正巻，沖縄県教育委員会，1986年
『霊仙寺跡』佐賀県東脊振村教育委員会，1980年
阪谷良之進編集「旧首里城図」沖縄県立図書館所蔵，1933年
『重新校正　中山世鑑』巻二，沖縄県教育委員会，1983年
『世界考古学辞典　上』平凡社，1979年
『首里城跡－歓会門・久慶門内側地域の復元整備事業にかかる遺構調査』沖縄県教育委員会，1988年
『首里城跡－南殿・北殿跡の遺構調査報告書』沖縄県教育委員会，1995年
首里城研究グループ『首里城入門その建築と歴史』ひるぎ社，1991年
首里城復元期成会・那覇出版社編集部『写真集　首里城』那覇出版社，1987年
砂辺和正『住屋遺跡　平良市新庁舎建設に伴う記録保存の為の緊急発掘調査概報』平良市教育委員会，1992年
東京国立博物館・京都国立博物館・名古屋市博物館『英国デヴィド・コレクション中国陶磁展』1980年
『東京国立博物館図版目録・中国陶磁篇Ⅱ』東京国立博物館1990年
當眞嗣一・大城慧ほか『稲福遺跡発掘調査報告書』沖縄県教育委員会，1983年
當眞嗣一ほか『佐敷グスク』佐敷町教育委員会，1980年
仲松弥秀『神と村－沖縄の村落』伝統と現代社，1968年
中村愿『玉代勢原遺跡』北谷町教育委員会，1993年
『那覇市歴史地図－文化遺産悉皆調査報告書』那覇市教育委員会，1986年
『那覇市の遺跡－詳細分布調査報告書－』那覇市教育委員会，1982年
那覇市立壺屋焼物博物館編『那覇市立壺屋焼物博物館開館記念特別展　陶磁器に見る大交易時代の沖縄とアジア』那覇市教育委員会，1998年
日本史料集成編纂会『中国・朝鮮の史籍における日本史料集成　明實録之部１』国書刊行会，1979年
『日本出土銭総覧　1996年版』兵庫埋蔵銭調査会
藤岡了一『陶磁大系42　明の染付』平凡社，1980年
文化広報部　文化財管理局『新安海底遺物』同和出版公社，1983年
外間守善・西郷信綱『おもろさうし』日本思想大系18，岩波書店，1972年
「琉球国由来記」『琉球史料叢書』第2巻，東京美術，1972年
真栄平房敬『首里城物語』ひるぎ社，1989年
間壁忠彦「備前」『世界陶磁全集３　日本中世』小学館，1994年
宮城栄昌・高宮廣衞編『沖縄歴史地図　歴史編』柏書房，1983年
名勝識名園環境整備委員会『名勝識名園環境整備事業報告書（Ⅰ）』1977年
『やきもの辞典』平凡社，1991年
矢部良明『陶磁大系41　元の染付』平凡社，1980年
矢部良明『陶磁大系47　タイ・ベトナムの陶磁』平凡社，1979年
矢部良明「元代の青磁器」『世界陶磁全集13　遼・金・元』小学館，1993年
『湧田古窯跡（Ⅰ）県庁舎行政棟建設に係る発掘調査』沖縄県教育委員会，1993年
『湧田古窯跡（Ⅱ）県庁舎議会棟建設に係る発掘調査』沖縄県教育委員会，1995年

協力者一覧

特別企画展の実施にあたっては下記の機関にご協力をいただきました。ここに記して感謝申し上げます。

【出品協力】

沖縄県立博物館

【写真提供】

沖縄県立博物館　　国営沖縄記念公園事務所

沖縄県立埋蔵文化財センター
平 17. 1. -7 成
調
069.9199
Ok

特別企画展　首里城京の内展 —貿易陶磁からみた大交易時代—

2001年3月24日発行

編集・発行　沖縄県立埋蔵文化財センター
〒903-0125
沖縄県中頭郡西原町字上原193番地の7
Tel：098-835-8752　Fax：098-835-8754

印刷　有限会社　金城印刷
〒901-0305
沖縄県糸満市西崎町5丁目9番地の16
Tel：098-995-0001　Fax：098-994-9886

執 筆 者：亀井明徳、金城亀信
城間肇
編　　集：嘉手苅徹、島袋春美
英　　訳：上原久
英訳監修：亀井明徳
写真撮影：長田剛

ⓒ沖縄県立埋蔵文化財センター　2001　Printed in Jpan
許可なく本書の無断複製、転載、複写を禁ずる。

首里城京の内関連年表

1500　1400　1300　1200

中国	明 / 元 / 南宋
日本	室町時代 / 南北朝時代 / 鎌倉時代 / 平安時代
沖縄	第二尚氏王統 / 第一尚氏王統 / 察度王統 / 英祖王統 / 舜天王統

京の内の遺物

中国・日本・沖縄の主な流れ

六〇七　隋の煬帝、朱寛を流求に遣わす

一一八七　舜天即位
一一九二　鎌倉幕府開く
南宋から元にかけて陶磁器の輸出がめざましくなる
一二〇六　チンギス-ハン、蒙古統一

一二六〇　英祖即位
一二六四　久米・慶良間・伊平屋の各島初めて中山に入貢
一二六六　大島諸島、中山に入貢
一二七一　元朝始まる
一二七四　文永の役
一二七九　南宋滅ぶ
一二八一　弘安の役
中国江西省・景徳鎮の台頭
一二九一　世祖（フビライ汗）、楊祥に六千の兵を率いらせ瑠求を討つが失敗
一二九六　元の成宗、張浩を遣わし再び瑠求を討つが失敗、百三十人余りを捕虜にして引きあげる
この頃、景徳鎮で染付磁器が完成する
この頃、景徳鎮で五彩色絵が創作される

一三三三　鎌倉幕府滅ぶ
一三三八　室町幕府開く

一三五〇　察度即位

一三六八　明が興る
一三六九　景徳鎮珠山山麓に御器廠を設け監督官を置き焼造（一説に景徳鎮御器廠はこの年に設けられる）
一三七二　明の太祖、楊載を遣わし招諭し、中山王察度、進貢する
一三八〇　山南王承察度、初めて明に進貢する
一三八三　山北王怕尼芝はじめて進貢
中山王、鍍金銀印を賜る
一三八五　中山・山南、海船一隻を賜り、山南・山北、駝紐鍍金銀印を賜う
一三八九　中山王、完王之を高麗に遣わす
一三九〇　宮古・八重山、はじめて中山に入貢
一三九二　閩人三六姓帰化と伝わる
南北両皇統の合一

一四〇四　成祖、行人時中を冊封使として中山に遣わす（冊封の始め）
シャム船渡来して交易
一四〇六　足利幕府、明と通商
尚巴志、中山王武寧を滅ぼし、父思紹を王とする
一四一六　山北王攀安知、中山に滅ぼされる
一四二〇　中山王、佳期巴那をシャムに遣わす
一四二一　パレンバンとの交易はじまる
一四二七　龍潭を掘り安国山を築く
一四二八　国門（中山門）を創建
一四二九　山南王、中山に滅ぼされ三山統一成る
一四三〇　南者結制をジャワに遣わす

一四五三　志魯・布里の乱が起こり、首里城が焼かれ鍍金銀印など焼失する
五彩の手法が中国・民窯で増えてくる
一四五八　護佐丸・阿麻和利の変
万国津梁の鐘を首里城正殿にかける
一四五九　首里城倉庫炎上
一四六三　マラッカへ使者を派遣
一四六七　応仁の乱起こる
一四七〇　金丸、王位に就き尚円と号し、第二尚氏王統が始まる
一四七二　進貢を二年一貢に制限する
一四七七　首里城歓会門、久慶門創建

一四九〇　バタニとの交易始まる
一四九四　円覚寺の宗廟を設立

一五〇〇　八重山のオヤケアカハチ、反乱を起こす
一五〇一　玉陵を築く
一五〇七　一年一貢を許される
一五〇八　首里城北殿創建
一五二二　再び二年一貢に制限される
一五二九　首里城守礼の門創建

一五四一　最後のバタニ渡航
一五四六　首里城東南側の城壁工事完成し、城壁が二重になる
一五五一　勘合貿易断絶
一五五四　倭寇を防ぐための屋良座森城竣工

一五七〇　南方貿易の記録とだえる

凡例：沖縄は青、中国は緑、日本は黄でそれぞれの歴史を表わした。中国の焼物に関する斜向は赤字で表わした。
遺物写真は断りがなければ中国産

沖縄県立埋蔵文化財センター
Okinawa Prefectural Archaeological Center
〒903-0125　沖縄県中頭郡西原町字上原193-7
Tel.098-835-8752　Fax.098-835-8754